北の黙示録

下

南原幹雄

講談社文庫

カバーデザイン　安彦勝博

な23-4

北の黙示録

下

南原幹雄

講談社文庫

南原幹雄　な23 4

北の黙示録(下)

講談社文庫
¥400

北の黙示録(下)
南原幹雄
定価400円

な23 4

奥州独立の野望実現に邁進する伊達藩——江戸幕府の命運をかけて阻止をはかる老中松平定信と中町奉行の面々。ついに幕府の奥州討征令が下る。緒戦で優位に立った六藩同盟は強力な火器で幕府軍を追い詰める。中町奉行の精鋭は、最後の挽回策に賭けて伊達の奥地へと潜行していく。奥州の野望は成るか？

ISBN4-06-184104-1 C0193 ¥400E (O)

講談社文庫
南原幹雄 作品

首一万両
修羅の絵師
北の黙示録(上)
北の黙示録(下)

北の黙示録(下)

南原幹雄

講談社文庫

講談社文庫

北の黙示録(下)

南原幹雄

講談社

北の黙示録 下 目次

江戸大火 9
佐竹・上杉 25
千住掃部宿 38
関所破り 50
大利根渡り 68
小山水戸街道 78
天当船 89
磐城七浦 109
白河越え 124
毘沙門島 136
ライフル銃 151
無縁寺 170
連判状 184
出陣 205
鶴ヶ谷 222
北海の守護神 233
白河会談 253
兄弟 271
爆破行 284
解説 石井冨士弥 307

北の黙示録 下

江戸大火

最初の火の手は、宵にあがった。

晩春の時候としては風のつよい日であった。出火場所は芝居町、中村座の楽屋である。

中村座とはいっても、昨年十一月から、市村座とともにそろって不入りのために、両座元の中村勘三郎と市村羽左衛門が興行をなげだし、隠居謹慎して、控櫓の都座と桐座が興行をうっていた。中村座には都座の櫓があがっていたのである。

演物は〈初曙文禄曾我〉と〈俠容形近江八景〉で、三津五郎、団十郎、友右衛門、菊之丞らが顔をそろえていて、夕方の幕も大いににぎわっていた。閉場て、楽屋にも役者たちがいなくなってから、楽屋口からとつぜん煙とともに火が噴きだした。

芝居小屋というのは内部が巨大な空洞になっているので、燃えやすく、火のまわりがいたってはやい。たまたま木戸番が発見して、大声で人を呼びあつめ消火につとめたが、すでに火の勢いはとめられなかった。

あっという間に楽屋から舞台へまわり、ついで客席へうつった。こうなるともう、手に負えぬ。火消しが出動するのを待つばかりだ。

半鐘がけたたましく打ち鳴らされ、半鐘が半鐘を呼び、一時の間に芝居町一帯は騒然たる空気におしつつまれた。

纏を先頭に火消し組が駆けつけて消火にあたりだしたが、火の勢いをおさえることはできなかった。すさまじい音をたてて火炎が燃えあがり、宵の空を紅に染めた。

たちまちのうちに中村座が大きな火柱をたて、燦爛たる火の粉を舞いあげ燃えおちていった。そして周辺の芝居茶屋などに燃えうつり、巨大な炎でつつんだ。

風にあおられた炎と噴煙は芝居町の大通りと裏側の楽屋新道を同時に、魔物のように突っぱしった。さらに上空の火炎が大きな渦を巻くように周辺へひろがっていった。

家屋の燃えるすさまじい音、こわれる音、人々の悲鳴、さけび合う声、荷物を積みだす物音などが一帯にひろがった。

「大火になるぞ！」

「これでは火消しにも食いとめられまい」

「宵越しの火事になるな」

このあたりは宵も人通りはすくなくないが、野次馬たちも逃げ腰である。

火の手は二手にわかれ、その一方は市村座やそれに付随した芝居茶屋を軒並みのみこみ、焼きたてながら掘割をこえて堀江町へのび、もう一方は人形町通りへでて、新和泉町を燃やしはじめた。

半鐘は休みなしに耳を聾するばかりに打ちつづけられ、新手の火消し組もぞくぞく到着した

が、火の勢いには太刀打ちできなかった。必死で消火にあたりはしたものの、見る見るうちに後退をつづけた。炎と噴煙に追いまくられて、消火作業はまったくはかどらなかった。火の手を断つべく、家々をとりこわしても、炎はそれを嘲うがごとくその上を楽々とこえて延焼していった。

火事にはなれている町民たちも、風にのった火の勢いに追われて、逃げまどった。逃げおくれて、煙にまかれ、くずれおちる建物の下敷きになったり、炎にのみこまれる犠牲者もでた。

断末魔の叫びがあちこちであがった。

江戸で大火がおこるのは、大体筑波おろしが吹き荒れる冬場ときまっている。今年の冬はそんな大火もなく、つつがなく春もおわりにちかづいた今、不意打ちのように大火災が突発した。この一ヵ月ばかり雨がなく、空気が乾燥していたうえ、強風の不運がかさなった。大火の季節がすぎて、油断もあった。

東方へむかった火の手は新和泉町の町並を燃やしつづけて、宵をすぎたころ、旧大門通りをこえた。この地に古くからあった橘稲荷もあえなく燃えおちた。

西方へすすんだ火の手は親父橋をあっという間に焼きおとし、照降町へむかってもいっこうに勢いはおとろえなかった。

亥の刻（夜十時）がちかくなったころ、大名火消しまで出動し、日本橋一帯はまるで戦場のような修羅場と化した。炎の通り道となったところは文字どおりの叫喚地獄を現出し、人間の焼け焦げる臭気があたり四方にたちこめた。

「中村座の楽屋が火元だっていうじゃないか」
伝兵衛が金次にいった。
浜御殿の二重櫓からも火事は望遠できた。夜空を真紅に焦がす壮大な夜景がうつくしいばかりに東北方にひろがっていた。
「火の用心にはおこたりないはずだが」
中村座といえば、昨年までは、金次の住居も同然のところであった。金次としてもこの火事は他人事とはおもえなかった。任務さえなければ、すぐにも駆けつけていきたいところだ。
芝居小屋が火事に見舞われるのはほとんど数年に一度の恒例だが、大抵が類焼である。小屋の者たちは、日ごろ火の始末には異常なほど気をくばっている。火元になったことは金次の知るかぎり一度もなかった。
「火付けかもしれない」
金次がいうと、
「金次、それは身びいきだ」
伝兵衛がわらった。
「楽屋から火をだすなんて、とてもかんがえられない。しかも宵になれば楽屋に人はいないはずだ。これだっておかしい……」
「芝居に恨みを持つ者でもいるのか」
夜空を染める真紅の色が時間とともに、ますます広範囲にわたってきた。

一方、百次郎は会津藩下屋敷の屋根裏部屋から、その夜景を食い入るように見つめていた。
「伊達屋敷で何事かおこるかもしれん。油断をするな。出動の準備をしておけ」
源之助へそう命じ、音もなくしずまっている隣屋敷へ注意をおこたらなかった。
火事さわぎに乗じて、伊達藩が事をおこすことは十分予想できた。兵法の常識からいっても、江戸で事をおこすには、まず市中に火をはなって騒乱をひきおこすことが定石だとかんがえられるからだ。
「むこうの者へもつたえてまいります」
源之助はそういって浜御殿へむかった。
百次郎は胸さわぎがおこって、それがしだいにつのってきた。
（火付けではないか？）
はじめにいだいた疑いが時とともにつよくなった。伊達の屋敷の不気味なしずけさが、かえってその疑惑をかきたてた。しずけさの中にひそむ不穏なものを、百次郎はいろいろ想像した。
（伊達のしわざだとすれば、何故中村座を……）
藩主と数千人の藩士たちをおくりだしてしまったばかりであるから、伊達が上屋敷にたてこもることはまずかんがえられなかった。
子の刻（午前零時）をまわったころ、おどろくべきことがおこった。
今度は西方から半鐘のひびきがきこえてきたのだ。
「又、火事か！」

「そのようです」
「芝の先だな」
「田町か三田のあたりでしょうか」
「源之助、いよいよこれはおかしいぞ」
源之助の顔にも今度は緊張の色があらわれた。
両人は部屋の反対側へまわって、西の空をのぞんだ。
半鐘の音はしだいに数を増し、ひびきも大きくなってきた。
「これも大きくなりそうですね」
「一夜のうちに、市中の東と西で火の手があがった。まちがいなく両方とも火付けだな」
二ヵ所の出火場所のほぼ中央に伊達の上屋敷がある。兵略的な意図がはっきりとうかがわれた。
「きなくさい臭いがしますね」
「藩主が帰国してから、風のつよい夜をまちかまえていたにちがいない。眼をすえて、伊達の屋敷をにらんでいろよ」
しかしこれだけでは、一同はまだうごくわけにはいかないのだ。
そうこうしているあいだに、西の夜空が薄紅色にそまりだした。
会津藩下屋敷のまえの大路を纏をおっ立てて火事の現場へ駆けていく火消しの一隊が見えた。
それについて走る町の者たちもいる。

西方の半鐘が乱打され、狂乱じみた音をたてはじめた。江戸市中全体が二つの火事で騒然となり、浮足立った。
今度の火元は、源之助の推量どおり、三田同朋町であった。場所からいうと、薩摩屋敷のほぼ裏手にあたる。
火の手は同朋町の中通りにある空家からあがった。昨年秋ごろまで薪炭屋だったが、引っ越してからずっと空家になっていたところだ。その家の物置がとつぜん燃えだし、母屋に燃えうつり、塀をつたってたちまち隣家を焼いた。
その隣家はみな寝入っていたために気づくのがおくれ、二階に寝ていた奉公人たちが焼け死んだり、大火傷を負った。無人の家の物置が火付け以外で出火する道理がなかった。
火の手は風の勢いを得て燃えひろがり、同朋町の商家をつぎつぎに焼いていった。夜更けの闇が巨大な炎に照らされて、白昼のような明るさとなった。炎と黒煙の中で懸命な消火作業がおこなわれたが、あざ嘲うかのように火の勢いは時がたつにしたがってますますつよくなった。
風は芝愛宕山のほうから吹きつけてきて、炎を海手へはこんでいった。となり町の通新町へ燃えうつり、道路をこえて三田三丁目へものびていった。
薩摩屋敷がちかいので、島津家や有馬家の大名火消しも出動し、鎮火につとめたが、きめはなかった。
半刻（一時間）あまりをへて、蓮乗寺へ燃えうつり、堂宇を焼きはじめた。火消し各組が芝居町のほうへ出動していたため、だいぶおそくなって各組が駆けつけてきたが、すでに手のくだし

ようがないほど燃えさかり、町ぐるみ火の海になっていた。

蓮乗寺を焼きつくした火は久留島安房守、松平豊前守、土岐美濃守などの大名屋敷へ延焼し、一段と勢いをつよめた。

二方面の火事は丑の刻（午前二時）ごろ最高潮に達した。日本橋一帯、三田一帯の住人たちは大事な家財道具を大八車や荷車につみこんで、安全な場所へむかって大わらわの避難をしていた。当初はタカをくくって見物をきめこんでいた連中も、際限なく燃えひろがってくる火の勢いに恐れをなして家族ともども逃げだしたのだ。

そのため道路は大路、中通りといわず、新道、横丁、路地まで大八車や荷車であふれだした。一台の車が横転して道をふさぎ、後からくる車や人々を立往生させる光景も見られた。

大名屋敷や旗本屋敷でも藩主の家族を避難させはじめた。この混乱はますますひろがっていくことが予想された。

伊達藩上屋敷の表門の片側の大扉が音もなくひらいたのは、一刻（二時間）ばかりたってのことだった。

いくつかの提灯があらわれ、ついで陸尺にかつがれた乗物がひっそりと二丁でてきた。その乗物は提灯をかざした数人の藩士たちに警固され、大路へでた。

提灯には、まぎれもない竹丸に二羽雀の伊達家の紋が入っている。乗物は身分の高い武家にゆるされたものである。

真夜中とはいえ、この大路も避難する人や車でごったがえしていた。この大路は品川、芝、京橋、日本橋をむすぶいわば江戸の幹線道路である。避難する人波はこの大路にもあふれだした。

しかも人波のむかう方角はさだまっていない。このあたりは二つの火事場のほぼ中央に位置するため、北へむかう者、南へ逃げる者がまちまちで、そのためかえって道路が混雑していた。

南へいく者たちはほとんど芝山内をめざし、北へ逃げる者は永代をわたって本所側へ避難しようとしている。さらに上野の山、あるいは千住、板橋方面へむかう人々も多い。

伊達の乗物は芝口橋のある北へむかったが、たちまち人波の中に没して見えなくなった。ときたま家紋を入れた提灯が闇の中に浮かびあがるが、すぐ人波の中にのまれてしまう。警固の藩士たちも大八車にまぎれて、どれがどれやらわからなくなった。

普段なら、人も車も乗物をよけてとおるが、急場の際はそんな配慮はしていられない。二丁の乗物は人にぶつかったり、大八車をよけたりしながらすすんだが、はかどりはきわめてわるい。

乗物がようやく芝口橋の袂まできたころ、今度は伊達藩上屋敷の裏門があいて、二丁の町駕籠がひっそりとでてきた。

それにも提灯を持った数人の警固がついている。提灯には〈丼〉の商標が入っていた。町駕籠は裏通りの浜御殿対岸をとおり、脇坂淡路守の下屋敷の後をまわって、芝口橋のほうへむかった。

だが、この通りも避難する老若男女が道をふさぎ、駕籠のあゆみははかばかしくなかった。傍目からすれば、この町駕籠も火事をのがれて避難していくものと見えた。

乗物は二丁とも芝口橋をわたってそのまま尾張町方面へむかったが、町駕籠は芝口橋をわたらず、橋詰を溜池方面さしてすすんでいった。

火事はまだ到底鎮火しそうにない。延焼地域は際限なくひろがっていた。

江戸の大火といえば、宵越しはおろか、丸二日、丸三日間も燃えつづく場合さえある。市街地や武家屋敷、寺院を焼きつくし、お濠をこして江戸城まで焼いてしまうこともあるのだ。

駕籠は愛宕下大名小路の横手をとおって、虎之御門のほうへむかっていった。南方と北方の空は真っ赤に焼けただれ、このあたりの上空までしだいに赤みがおよんできていた。

この駕籠が溜池のほとりにちかづいたとき、後から数人の男が追いせまった。

駕籠と警固は背後を気にするでもなく、四半丁ほどすすんだ。

「その駕籠待て！」

追いあげてきた先頭の男が声をかけた。

伝兵衛である。その背後にいるのは助勢にくわわった中町奉行の同心たちである。

警固の士が立ちどまってふりかえった。おたがいに提灯で相手を照らし、面体をうかがった。

「御上の御用だ」

伝兵衛はきめつけた。

「御上だと？」

追ってきた連中がまちまちの装いをしているので、警固の士はいぶかしんだ。

「左様、その駕籠に不審がある。中をあらためる」

伝兵衛はかまわずおっかぶせて、一歩踏みこんだ。いつしかその手には、長い房をつけた十手がにぎられている。

しかし相手はひるまなかった。

「別段あやしい者ではない。いかような理由で、路上で駕籠改めをやるのか納得できぬ」

駕籠をかばって、伝兵衛らをさえぎろうとした。

「まず第一に、伊達藩上屋敷から町駕籠がでてきたのが不審だ。つぎには町駕籠はいかなる場合であれ垂れを上げて乗るべきもの。垂れを下げて乗っておるところが不審の第二。さらに町駕籠に伊達藩士と見られる面々が警固についているのもいぶかしい。駕籠の垂れを上げろ」

伝兵衛はやや声高にいって、二丁の駕籠につめ寄った。

伝兵衛の後にひかえる同心たちも、相手方が抵抗におよべばすぐにも実力を行使するかまえである。

そのとき、先頭の駕籠の垂れが中からしずかにあがった。

提灯をかざすと、娘島田にゆいあげたあでやかな町娘の姿が明りの中に浮かびあがった。年のころ十七、八のうつくしい娘である。

「伊達藩の蔵元をつとめます升屋平右衛門の娘つたでございます。ご不審のかどがございましたなら、ご容赦くださいませ。先だって大坂から江戸見物にまいりました。伊達藩のお屋敷に逗留いたしまして、ただ今麹町にあります升屋へもどるところでございます。後の駕籠の者はわたし

の婆やです」

おつたと名のった娘は怖じ気を見せるでもなく、伝兵衛に大きな眸をじっとむけて応じた。

すると後の駕籠の垂れがあがって、上品な感じの初老の女が顔をのぞかせ、会釈をしてきた。

藩の蔵元の娘ならば、上屋敷からでてきたとしてもかくべつの不審はない。大藩の蔵元というのは、町人ながらもその藩の家老格身分をあたえられ、扶持まで受けている場合がおおい。

「駕籠の垂れを下げていたのはどういう理由だ」

「火事の際の夜道であるから、いかような変事や狼藉があるやもしれぬため、垂れを下げたまで。そして無事に麹町へおくりとどけるため、われわれがついてまいったのだ」

伝兵衛の難詰にたいして、ただちに警固の士の答えがかえってきた。その答えは一応筋道がとおっている。升屋の江戸店が麹町にあることも、伝兵衛は知っていた。

伝兵衛は蔵元の娘と婆やにふたたび視線をそそいだ。

両人はいずれも臆することなく視線をかえしてきた。

伝兵衛は今までお鶴の方と天祥院の顔を見たことがない。が、年恰好はぴたりと二人に符合する。

婆やのほうも、そうおもって見れば、気品があって、少々、気位も高そうだ。疑えば、いくらでもうたがいの余地がある。だが、二人とも、たじろいだところがすこしも見えぬ。

伝兵衛のほうが逆に相手から決断をせまられるかたちになった。

（ちがう……）

伝兵衛は自分の直感を信ずるしかなかった。囮であろう、と想像した。

「まだご不審がありますなら、麹町の升屋までご一緒なさいますか」

娘のほうが余裕のある表情でいった。

伝兵衛はいささか小娘に愚弄されたような不快さをおぼえた。

「十分気をつけていくがいい。狼藉者には油断するな」

伝兵衛はそういって一行をうながした。

垂れを上げたまま二丁の駕籠は警固の者たちとともに、ふたたび夜道をすすんだ。

駕籠が闇の中へ消えたとき、伝兵衛はほかの同心たちをかえし、自分だけ駕籠の後をつけはじめた。

丁度おなじころ……、

源之助は数人の助勢の同心とともに、二丁の乗物を追って京橋の橋詰ちかくまできていた。

彼は乗物の中には、お鶴の方と天祥院とが乗っているのではないかと推量していた。囮かもしれぬという疑いもあったが、順当にかんがえれば、斉村の奥方と母公が江戸脱出をはかっているとみるべきだ。江戸に騒乱をおこし、それに乗じて奥州への逃亡をくわだてているのだとかんがえられた。

脱出の経路は陸路と想定した。これについては百次郎も伝兵衛も金次も大体異論がなかった。海上を船で逃走するというのも方法としては成りたつが、どんな船であろうと、中川の御番所と波の高い鹿島灘の難所を避けてとおるわけにはいかぬ。中川御番所の守りもかたいが、病弱の

お鶴の方と老齢の天祥院には鹿島灘の難所を乗りきるのはとても不可能だとおもわれた。いかに非常の場合とはいえ、藩主の奥方と母公ともあろう者をそのような危険にさらすはずはないとかんがえられた。

乗物は京橋をわたりはじめた。日本橋方面から避難してきた人々や車で橋は雑踏している。人波は圧倒的に向うからくる者のほうが多い。乗物は、火事にむかってちかづいているのである。

「お止まりください」

橋のほぼ中央で源之助は乗物に追いつき、声をかけた。

警固の士がいっせいにふりむいた。

よく見たが、その中に、この正月上屋敷入りをした屈強な連中はいなかった。

「乗物を止めてどういたすのだ」

「無礼な！　そちらのほうこそ、何用だ」

警固の士は逆に怒気をふくんだ言葉をあびせてきた。中には大刀の柄に手をかける者もいた。

「御上の御用をつとめる者です。おいそぎのところ申し訳ありませんが、乗物の中をあらためさせていただきたい」

源之助は懐の中から十手を半分ほどのぞかせて見せ、丁寧にいった。

「いかような理由があって、伊達家の乗物をあらためるのだ。無礼であろう。こちらには御上の御用改めを受ける理由はまったくない」

御上の威光をはねつけるように、警固の士はこばんだ。

「そう申されても、不審がある以上改めをいたさぬわけにはまいりません」

「どこに不審がある？」

「不審をいちいち相手へ申しのべる要はありません。役儀によってあらためます」

「応じられぬ」

応酬し合っているうちに、いやがうえにも殺気がたちこめた。

「そうまでいわれるならばいたし方ない。力ずくでもあらためるまで」

源之助はいいはなって、十手をかまえて踏みだした。

そのとき、

「疑いがあるなら、乗物を存分にあらためるがいい」

ほかならぬ乗物の中から重い声がひびいた。そしてしずかに乗物の引戸がひらいた。

姿を見せたのはまだ少壮といってもいい年輩の武士だ。眉濃く、眸に光があり、精気はつらつとした風貌をしている。姿たおやかな女を想像していた源之助の勘ははずれた。

「伊達藩公用人鈴懸主税助だ。後の乗物におるのは、おなじく公用人須藤玄蕃頭。これから本所仙台堀の下屋敷へまいるところだ」

歯切れのいい言葉で鈴懸はいった。

後の乗物の引戸が半分ほどあいて、初老の男が顔をのぞかせた。

姓名をたずねるまえに、相手から名乗られてしまった。源之助は両人を凝視したが、戸惑いを

かくすことはできなかった。
鈴懸は威圧するようにするどい眸をむけてきた。
源之助は相手の気迫にたじたじとなった。
「まことに御無礼を申し上げました。おゆるしくださいませ」
そういうほかはなかった。
「これで疑いははれたか？」
「はっ、相すみませぬ」
冷汗の吹きでるおもいで源之助は頭をさげた。
相手は陪臣とはいえ、伊達六十二万石の江戸家老だ。年はまだ三十の中ごろだが、重い職責を負った男の貫禄がある。
「今後、軽々しく乗物を呼びとめるではないぞ。十分気をつけるがいい」
一言嫌みを投げ捨てて、鈴懸は引戸をぴたりと閉じた。
去っていく乗物と警固の一行を、源之助は呆然と見おくった。
この乗物の一行が立ち去り、京橋をわたりきったころ……、伊達藩上屋敷の表門がふたたびひらいて、乗物二丁がまたあらわれた。
前回とおなじく、提灯を持った数人の藩士たちに警固されて、乗物は芝口方面へむかった。
なんの家紋もうっていない乗物である。提灯にも家紋は入っていない。
乗物はたちまち闇と雑踏の中にとけ入っていった。

佐竹・上杉

日本橋一帯を焼きはらった火事が神田に燃えうつるにおよんで、下谷、浅草方面もにわかに浮足だった。気のはやい者たちは火の手が神田川を越える以前から避難の準備をはじめた。
柳原の土手と神田川を火の手が越したら、下谷、浅草方面は火の海と化する恐れがあった。町屋でも、武家屋敷でも騒然と人の群れが右往左往した。とくに下谷一帯には大名屋敷、旗本屋敷が密集しており、ひとたび燃えうつれば、全域焦土と化する恐れがあった。
神田側にちかい方面では、あわただしく長持や挟箱、櫃などが各屋敷から持ちだされた。
三味線堀のすぐ前にある佐竹屋敷でも、はやくから諸門をあけはなって火の手の接近にそなえだした。佐竹屋敷の表門といえば、〈佐竹の人飾り〉といって、正月七日間は門松がわりに麻上下の番士を左右に着座させることで江戸名物といわれるまでに有名である。そこは今、藩の火消し組が勢ぞろいして、ものものしい警備体制をとっていた。裏門や通用門などには、屋敷出入りの鳶職人たちが大勢駆けつけてきて、火の手にそなえた。
隣屋敷の立花飛騨守上屋敷でも、ちかくの藤堂和泉守、藤堂佐渡守、宗対馬守らの屋敷でもほとんど同様の警備をしている。

神田川にかかる和泉橋、新し橋に物見がでて、ひっきりなしに火事の様子を下谷方面へつたえていた。

伝令がくるたびに下谷側では色めきたち、憂色が濃くなっていった。

佐竹屋敷でも、数多くの長持や挟箱などが門の出口ちかくに積みだされた。

この年、藩主佐竹侍従義和は参勤中である。火の手がいよいよ神田川にせまったという情報がつたえられたとき、義和は屋敷内の奥御殿で奥方お静の方とともにすごしていた。

義和は天明五年藩主についていらい九年をへてきているが、いまだ二十歳の若者である。年齢は奇しくも、伊達藩主斉村と同年である。

お静の方とのあいだに一子義厚がいるが、まだ幼児で奥の別室で火事さわぎも知らずにねむっている。義厚のかたわらには、火の手がちかづいたらすぐに抱いて避難できるよう、乳母や腰元たちがついている。

お静の方は今しがた、ねむっている義厚と別れをしたばかりである。そして義和につがれた盃を前にしていた。

盃をみたしているものは酒でなくて、水である。

まず、義和が盃をとって口にかたむけた。

それを見つめるお静の方の顔は行灯の明りでもはっきりとわかるほど、紙のように白い。

盃を持つ義和の手もかすかにふるえている。

義和は英明、果断の藩主といわれ、藩の衆望をになっているが、なんといってもまだ若い。お

静の方にいたっては、まだ少女のようなあどけなさをのこしている奥方である。

若い夫婦は火事の恐ろしさよりも、もしかすると永遠のわかれになるかもしれぬ旅立ちをまえにして、感情がいやがうえにもたかまっていた。

旅立っていくのは、お静の方のほうである。その旅の前途には、命の危険が大きくたちふさがっている。

ましてお静の方にとっては、一子義厚とのわかれがかさなるだけに、万感胸にせまるものがあるのだろう。

「奥を人質にとられておったのでは、佐竹はおもうようなうごきがとれぬ。お家の将来のために、奥を国へかえすのじゃ」

義和にそういわれて、お静の方は夫から水盃をうけとった。

「わかっております。わたくしのことはご心配なさらないでくださいませ。殿さまのほうこそ、くれぐれもお体にお気をつけになって……」

そういったとき、おさえていた感情がこみあげてきてお静の方はようやくむせび泣きをこらえた。そして、盃の水を口にふくんでいった。

「義厚も佐竹にとってかけがえのない命じゃが、まだ秋田までの旅は無理というもの。母子をひきはなすのはしのびないが、これもいたしかたない。しかし、そう長いあいだのことではない」

義和はつとめて明るい顔でいった。

彼がお静の方の江戸脱出を決意したのは昨今のことではなかった。すでに半年もまえにさかの

ぼる。

佐竹の家にも代々、藩祖義宣のころから六藩盟約の誓紙の写しがひそかにつたわっていた。義和は父義敦から盟約の趣旨も経緯もきいていた。

佐竹は、伊達や南部らとともに諸大名のうちで今や稀有な例となった鎌倉時代いらいの名族である。新羅三郎源義光のながれをくみ、歴代関東常陸に君臨してきたが、関ケ原役において積極的に徳川へ味方しなかったという理由で、出羽秋田に改易された。そのときかつての五十四万石から、その半分にもみたぬ二十万五千石に減封された。

しかも昔の家臣をそのままかかえて移住し、さらに新城をきずき、城下町をあらたに建設しなければならなかったため、藩財政は当初から窮乏し、家臣たちはみなくるしい生活をしいられた。

領内に鉱山や林業はおこなわれていたが、農業生産力はひくく、発展の見とおしもとぼしかった。それで幕府への反感は代をへても、根づよくつのる一方であった。

かつて伊達政宗が主唱した六藩同盟にいちはやく同意したのも、佐竹義宣であったといいつたえられている。

そして昨年、片倉小十郎が盟約の実現を提唱したときも、義和は他の四藩にさきがけて、いちはやく〈加担〉の約束をおこなったのである。

義和は天明の大飢饉の翌々年藩主になったが、当時まだ少年であったために、しばらくは叔父の佐竹義方と家老疋田斎が補佐していた。義和がみずから政治をとりはじめたのは、寛政初年か

らである。

さっそく藩政改革に手をつけ、一方で荒地や新田の開発、国産物の振興、藩校の開設など、あらゆる分野にわたって大胆な新政をおしすすめ、ある程度の成功をおさめていた。家臣、領民からの信望も歴代藩主たちとは比較にならぬくらいあつかった。

しかし義和のおしすすめる政策におのずから限界があることをもっともよく知っていたのも、彼自身であった。封土のおかれた地理的条件、気象条件をかんがえると、もろもろの新政や開発が藩の貧困をすくうまでにいたらぬことを、義和ははやくから見とおしていた。

〈貧困〉は佐竹だけのものではなく、奥州全体の問題であり、さらに原因をもとめれば、幕府と諸藩の体制そのものにあった。藩の貧困をすくう道は、現在おかれている中では到底みつけだすことはできなかった。

それで義和は、片倉小十郎がこのたび主唱した六藩連合の企図に賭けたのであった。

それを確認したのが、昨年七月末の、伊達藩下屋敷における六藩の会合である。晩夏、花火の夜、ひそかに六藩の藩主あるいは江戸家老などの首脳が会合し、先祖たちが後代に託した遺志について談合し、その成否を各藩の立場で論じた。

席上、主唱者の伊達をべつにすれば、はっきりと〈加担〉を表明したのは佐竹のみであった。他の四藩は大筋において同意しながらも、おのおの藩内の事情によって確答するまでにはいたらなかった。

「殿さま、そろそろ奥方さまお立ち退きの時刻でございます。疋田さまがそう申しておいでで

す」

座敷のむこうから、襖ごしに老女立花の声がきこえた。

疋田は家老疋田斎のことである。

「わかった。これから表へうつろう」

奥御殿と表御殿とは廊下でつながっている。

「火が川を越えましてございます」

「そうか」

わかれまでにのこされたわずかな時間をお静の方とともにすごしていた義和はきびしい顔にもどって、妻をうながした。

今夜、中村座と三田同朋町に火の手があがることは、かねて伊達藩から報せがもたらされていたのである。

表御殿へうつると、疋田が待っていた。

「出立のご仕度はよろしゅうございますか」

沈着冷静な疋田の面にも、やや緊迫の色がうかがえる。

「敵の見張りの様子はどうだ」

ここで義和は幕府をはじめてはっきり敵と名ざした。

佐竹では上屋敷の東方にあたる、ななめ前の華蔵院に幕府の〈目〉がそなえつけられていることをすでに察知していた。また真裏にならぶ旗本屋敷のうちの一つが近年空屋敷になっていて、

昨年来そこに幕府秘密機関の見張りがついていることをもうすうす知っていた。

「華蔵院でも、裏の旗本屋敷でも火の手にそなえてさわぎたち、混乱が見えます。こちらへの警戒は手薄になっております」

佐竹のほうでも、逆に華蔵院と裏の旗本屋敷にたいする見張りをつづけていたのである。

「こちらの準備は？」

「万端ととのえてございます。火の手が下谷を焼きはじめましたら、そのときにかならず脱出の隙ができましょう」

火事はますます大きくなるばかりだ。伊達がはなった火の手はとうとう江戸中をまきこんだ騒乱になりつつあった。

日本橋、神田方面から火の手に追われてくる人々が上野の山を目ざし、神田川を越えてこの周辺にもあふれていた。

「では奥、無事に秋田へまいれ」

「殿さまも、つつがなく……」

「体をいとえよ」

若い藩主夫妻は表御殿の玄関口で最後のわかれをつげた。

お静の方は疋田にともなわれて納戸部屋へ入っていった。

そこには、お静の方の長持がいくつも置かれていた。

上屋敷の表門と裏門、さらに通用門から佐竹藩の荷物のはこびだしがはじまったのは、それか

ら間もなくのことだった。お静の方の長持もそれにまじって屋敷の外へはこびだされた。

米沢十五万石、上杉弾正大弼治広の上屋敷は桜田門外のお濠通りにある。桜田門の正面である。

桜田門は、大手門とともに〈両下馬〉といわれ、大名登城の表玄関であり、上杉の上屋敷はあたかも江戸城内濠の守りの要に位置する。後に大名小路をひかえ、このあたりは有力諸大名の上屋敷がひしめくようにならんでいる。

芝居町と三田同朋町からおこった火事が大きくひろがるにおよんで、各屋敷の大名火消しはそろって警備についていた。自分の屋敷を火の手からまもる任務と、桜田門をはじめとし日比谷御門、山下御門、半蔵門をかためて、江戸城への延焼をふせぐ役目とが課せられているのである。

火の手から大分はなれているので、大名火消し一同にそう緊迫感はないが、風向きがかわれば、火の手がこちらにむかってくるかもしれぬから、油断なく防火の態勢をとっていた。

佐竹屋敷の奥御殿で、義和とお静の方が水盃をかわしていたころ、上杉の上屋敷では江戸家老直江五郎太夫が宵から今にいたるまで、ずっと懊悩にくるしんでいた。直江のかたわらには、江戸留守居役新藤修理助と重臣竹俣当綱とがくらいつくような顔でひかえている。

宵に芝居町の半鐘が鳴りだしていらい、この二人は一時の間も直江からはなれようとしなかった。

新藤と竹俣のあいだには険悪な空気が張りつめている。両者は今まで何度となくはげしい言い

争いをかさね、まがわるければ脇差の柄に手をかけるくらい一触即発の状態におちいった。

そのたびに直江がきびしく二人を制し、あやういところで大事にまではいたらなかったが、このまま無事におわりそうもなかった。

この期におよんでまだ、直江は最後の決断がつきかねていた。上杉のとるべき態度としては二つある。

そのいずれかを直江は早急にえらばなければならないのだ。

「ご家老、もう逡巡をなさっておるべきときではありませぬ。今夜の時機をもしのがしますと、悔やんでもくやみきれぬことになりましょう。ご決断くださいませ」

新藤修理助が脂汗のにじんだ顔に懸命な表情をうかべてせまると、竹俣がこれをにらみつけた。

「新藤だまれ！　おぬしは上杉十五万石をつぶすつもりか。別室にひかえておれっ」

竹俣も必死なおもいをこめて、新藤をなじった。

「わたしの言葉は藩主治広様のご意志です。今にいたってこれをまげるわけにはまいりませぬ。ここでもし道をあやまれば、上杉の将来はうしなわれることになるでしょう」

「なにを申すか。わしは鷹山公のご意向をじきじきうけて江戸にまいったのじゃ。軽挙妄動でお家をつぶすわけにはいかぬ」

「竹俣様こそ殿様のご命令にそむいて、ご家老に政治をあやまらせる奸物ではありませんか」

両人は憎悪をこめた応酬をつづけた。

身分は新藤のほうがひくいが、役目と立場から彼は何ものもおそれぬ気迫で竹俣を面罵した。

上杉では、現在二頭の政治がおこなわれていた。現藩主治広と前藩主鷹山治憲が二人で政治をとっている。

鷹山は藩主在位当時おもいきった藩政改革をおこない、殖産興業政策をとって財政の立てなおしに成功した。農政の改革や士気の振興、学問の奨励をも積極的にはかって、天下に名君として知られている。

佐竹義和の諸政策なども、この鷹山に範をとったものといえるのだ。

ところが鷹山は天明五年、前藩主重定の三男治広に家督をゆずった後も、隠殿餐霞館に住んで、〈後見〉と称し、政務からはなれなかった。

治広は参勤中の昨年晩夏、伊達藩下屋敷における六藩会合に参加し、盟約の実現におおむね賛同した。

上杉はかつて越後と米沢において百二十万石を領していたが、関ヶ原役の直接のきっかけにもなった幕府への反抗で、かつての四分の一にすぎない三十万石に減封され、米沢におしこめられた。寛文四年に藩主綱景が歿したとき嗣子がいなかったために、さらに十五万石に減封されてしまった。それだけに幕府への感情にはぬきさしならない反感が伝統的になかれているのである。

今月初頭、治広は伊達斉村帰国のときに、正式に〈加担〉の約定をした。そして彼も、斉村の後を追うように帰国していったのだ。

竹俣当綱が鷹山の意をうけて至急江戸へやってきたのはその直後だった。奥州街道から米沢街

道をとった治広にたいし、竹俣は米沢から会津若松をへて白河にでる道をえらんだため、両者は道中ですれちがってしまった。

竹俣は鷹山の意をうけて、六藩盟約は〈無謀〉という意向を江戸につたえにきたのだった。従来までほとんど事なくすごしてきた二頭政治の弊が、このもっとも大切な急場のときに噴出したのである。

直江の苦悩はこのときからはじまった。人質を国元に回収する機会は、今夜をおいてほかにかんがえられなかった。

治広には子がなく、人質といえるのは奥方お鯛の方たった一人である。直江は数日まえから、お鯛の方に江戸脱出の旨をつたえてあったが、竹俣によって、待ったがかかった。

それを知っていきどおったのが治広の腹心中の腹心新藤修理助である。竹俣と新藤とはそれいらい何度も論議の応酬をかさねたが、意見の一致をみるはずがなく、とうとう今夜をむかえてしまった。

年齢は竹俣のほうが十歳ばかり上である。内政上の実績も竹俣が新藤をしのいでいる。しかし新藤には、主命をこうむっているという使命感があるので、竹俣にたいして一歩もひかなかった。ひくことは主命にそむくことだ。

新藤が直江説得に命をかけていることは竹俣にもわかっていたが、それは竹俣としても同様であった。

直江は決断を逡巡しながらも、お鯛の方の脱出の機をうかがっていた。彼はこの数日ほとん

ど睡眠をとっておらず、疲労困憊していたが、気力でもちこたえていた。

そのとき、直江、竹俣、新藤のいる表御殿の一室にあわただしい足音がちかづいてきた。入ってきたのは屋敷周辺にだしておいた物見である。

「屋敷のまわりは幕府の警戒がきびしく、脱出の隙はなかなか見いだせません」

物見から悲観的な報告がもたらされ、直江は顔をくもらせた。

反対に竹俣の表情が活気づいた。

「御用屋敷の様子はどうじゃ」

「相かわらず、こちらの屋敷の出入りの模様をうかがっております。それに桜田門をかためる大名火消し、近隣諸大名の火消しがいつ御用屋敷からの指令をうけて、追手に早がわりするかもしれませぬ。うかつにうごくことはできません」

上屋敷の東隣りにある幕府の御用屋敷から四六時中見張られていることは、上杉方もうすうす承知していたのである。しかも上屋敷が桜田門の真正面に位置することが、今上杉をもっとも不利な情況におとしいれていた。

「もうしばらく様子を見よ」

直江は焦慮をおしかくすことが、もはやできなくなった。肉体の疲労は限界にちかづいていた。

お鯛の方警固の使命をおびている粒よりの藩士たちも別室にひかえて、今か今かと直江の指令を待っていた。その者たちもしだいに苛だちをおさえきれなくなっていた。

そのうちの一人が、直江のいる部屋をおとずれてきた。

「ご家老、いかがいたしましょうか。あまりに時を待ちすぎましては、時機をうしなう恐れがございます」

「しかし今でていっては敵の術中にはまりにいくようなものじゃ。しばらく待て」

直江が制したが、その警固の士はすぐには立ち去ろうとしなかった。

直江の心中をいえば、ほとんどお鯛の方脱出にかたむいたが、まだその機が得られぬ苛だちになやまされていた。直江は本来は果断にして勇敢な性格である。今も果敢に振舞いたいが、どうしてもふるまえぬ状態であった。

「これから以後警戒がゆるむとはおもわれませんが」

その警固の士は決死の使命をおびているため、この場におよぶと家老にたいしても遠慮がなかった。

「ではおまえたち、わざわざ死ににいくのか。奥方様はどうなる。奥方様のお命はかけがえがないぞ」

直江は叱りつけた。

時刻はもう寅の刻（午前四時）にちかい。直江の気持も切羽つまっていた。

「もし本当に奥方様を脱出させるなら、わしはこの座敷で腹を切る」

竹俣が悲壮な顔でいった。その言葉に嘘はないはずである。そうする以外に彼の立場はないのだ。

そういう竹俣を新藤はだまってにらみつけた。おそらく新藤も、自分の意志がとおらなければこの場で腹を切る覚悟だろうと直江はおもった。

いずれにしろ、直江はどちらかに腹を切らせなければならぬ立場であった。

直江は立ちあがった。別室にひかえているお鯛の方が気がかりになってきたのだ。お鯛の方は緊張しきった気持のままでもう何刻もすごしているのである。

「ご家老どちらへ？」

直江が部屋をでていこうとすると、竹俣が喰いつくような顔をむけた。

新藤も同様の面持ちの顔を見せている。

直江は両人に返事もせずに部屋をでていった。

千住掃部宿

暁闇の空をそめていた火の色がしだいにかわってきた。日の出をむかえて東天がしらんでくるにしたがい、紅の色がより鮮明に浮かびあがってきたのである。

この空を見るかぎり、江戸の火事はまだ勢いがおとろえていなかった。

百次郎と金次は、最後に伊達藩上屋敷からしのびでていった二丁の乗物を尾行して、千住大橋のちかくまできていた。

千住は地理的には、江戸の外である。いわゆる四宿の一つで、奥州街道（日光街道）と水戸街道の最初の宿場になる。

朝のはやい宿場だが、払暁のころからさわぎたっているのは、火事で江戸から逃げだしてきた人々が大勢入りこんでいるせいである。街道の両側にならぶ旅籠や商家の者たちはおきだしており、町役人が出張っていて、宿場人足たちも姿を見せ、町中は騒然としていた。

二丁の乗物と六人の護衛は下宿をぬけ、大橋をわたりだした。千住は荒川にかかる大橋をさかいにして、北を上宿、南を下宿という。

半丁ほどおくれて、百次郎と金次は乗物をつけた。

金次がややもすると前へでたがるのを、

「せくな」

「あの乗物は本物だとおもいますが」

百次郎は何度か制した。

百次郎も前をゆく乗物の中には、お鶴の方と天祥院がまちがいなく乗っているものと信じていた。

「だとすると、あれだけの警固ではないはずだ」

百次郎は乗物の前後をかためている六人の護衛の面々の顔をあらためてみたかった。きっとこの正月、伊達の上屋敷に入った連中だろうとおもっていた。

「まだほかに警固が？」
「人目に見えぬところから警固していることもある」
百次郎が一定の間隔を乗物とのあいだにたもって、それ以上ちかづこうとしないのはそのためであった。
百次郎には姿なき護衛者の存在がはっきりと感じられた。彼等は影の護衛者ともいえた。どこにひそんでいるかわからぬが、もし乗物が危険にさらされた場合には、かならず救出にでてくることが予想された。
「だからといって、このまま江戸の外へだしちまうわけではないんでしょう」
金次の心中はおだやかではなくなってきたようだ。
「先方の腹と備えをもうすこし知りたい」
百次郎としては今、闇雲に乗物へ手出しはできぬ気持だった。
千住は江戸の外とはいっても、江戸とはほとんど町つづきであり、すくなくとも関所の内側である。関所の外にさえださなければ大丈夫だというかんがえがあった。
江戸周囲の陸上、水上の各関所には、中町奉行の要請で老中の命令をうけた幕府の兵が網を張っている。とくに奥州方面へいたる奥州街道栗橋の関所、水戸街道松戸の関所の警戒は厳重である。
「相手の腹の中をいえば、仙台への帰心矢のごとし、でしょう」
「どうやって関所をこえるつもりだ」

「秘策があるんでしょうか」
「まず、右へまがるか、まっすぐいくか？」
「正攻法でくるなら奥州街道、奇策をとるなら水戸街道でしょう」
千住の宿場をでたところから、道は奥州街道と水戸街道にわかれる。伊達藩の大名行列ならば通常は奥州街道をとるが、まれな場合には水戸街道からさらに浜街道をとおって仙台入りすることがある。
乗物は橋をわたりきって、上宿へ入っていった。
朝の早い旅籠や商家はすでに店をあけていた。江戸から家財ごと避難してきた者たちに払暁前からおこされていたのである。
ところが、二丁の乗物は〈上総屋〉と看板をだした大きな旅籠の中へ入っていった。
「や……」
「これは、どうした理由だ」
おもいがけぬことであった。
「勘づかれたか」
「それにしたって、今時刻、旅籠へ入るとは……」
百次郎と金次は意表をつかれた。仕方なくとっさに手ごろな場所をさがした。ここで乗物をやりすごすわけにはいかぬし、後もどりもできぬ。
折よく、上総屋の筋向いに一膳めし屋が店をあけていた。宿場人足や早立ちの旅人が朝飯を食

いにくるようなちいさな店である。
「金次、このあい間に浜御殿までひきかえせ。伝兵衛と源之助を助勢につれてきてくれ」
「はい」
「栗橋か松戸が勝負どころとなるだろう」
「かしこまりました」
いうがはやいか、金次は今きた道をとってかえしていった。
浜御殿の留守番には、源之助や伝兵衛への伝言をたのんであるので、彼らはもうこちらにむかって出動しているかもしれぬ。
百次郎は金次の後姿を見おくって、店へ入った。
縁台がいくつかならんでおり、奥に追いこみ式の小座敷がある。
百次郎は縁台に腰をおろし、朝飯を注文した。
その縁台からは上総屋の玄関をうかがうことができる。今のところ、上総屋にかわった様子はない。
百次郎は相手の意図をさぐってみた。関所をぬけるための策略か段取りをやっているのかもしれぬ。
やがて茶碗飯に惣菜をそえた膳がはこばれてきた。
ここでどれくらい待つことになるかは先方しだいである。百次郎は飯を食いながら、上総屋の玄関を見張っていた。

そのうち二、三人客が入ってきた。
四半刻ちかくたったころ、百次郎は店の外を見ていておどろきの表情を浮かべた。旅絵師ふうの男が入ってきた。
まぎれもなく浮世三斎、すなわち杉村三太夫である。
百次郎と杉村の眸が合った。
杉村はまっすぐに百次郎にちかづいてきた。百次郎はどうしてよいものか瞬時まよった。
杉村はこの正月いらい、佐竹屋敷の監視を任務としていた。佐竹の上屋敷から人質が脱走し、彼は配下の同心とともにそれをここまで追ってきたものとみえた。
「江戸は大層ひどくやられましたな」
そう声をかけて、杉村は百次郎のとなりの縁台に腰をおろした。
「火はまだおさまっていませんか」
「今もさかんに燃えつづけているそうです」
「そうすると江戸が立ちなおるには時間がかかりましょうなあ」
杉村と百次郎とのあいだで、行きずりの者同士の世間話がはじまった。
「なんでも、八王子から千人同心が江戸へむかったと申しますよ」
「大変なことになりましたね」
「火事で千人同心が江戸へ出張ったのは久々のことですよ」
幕府は甲州口の固めとして八王子に〈千人同心〉をおいているが、彼等はもし江戸に大災害や

危急がおこったとき、ただちに駆けむかう役目をもっている。

伊達がくわだてたと見るべき江戸騒乱の意図はたしかに達したといえるのだ。

「火災で滅茶苦茶になった江戸にいても仕方がありませんからね。旅の絵師とお見うけいたしますが、これからどちらへ」

「十一年まえ陸奥を旅いたしましてこころひかれ、できたらもう一度いってみたいとおもっておりました。昨今ようやく時機にめぐまれましたので、これからつれの次第によっては、陸奥路へむかって旅するかもしれません」

杉村は世間話にことよせて任務の話をしはじめた。他人が聞いたのでは真意をつかまれる心配はまったくなかった。

「左様ですか、それは偶然なことです。わたしも近々のうちに奥州方面へまいることになるかもしれません。これも気まぐれなつれの気分しだいです」

百次郎も杉村に合わせて話をはじめた。

「つれがどうしても秋田へまいりたいというものですから、万が一そちらへいくかもしれません」

「わたしの死んだ兄が一時仙台にいたことがありました」

「仙台ならば、わたしもしばらく逗留したことがございます。仙台の西北にある船形山で、わたしの友人が今も猟師をやっております。長吉という者です。もし気がむいたら会ってやってくださいまし。そのあたりのことにはよく通じている者です。耳よりな話がきけるかもしれません」

「船形山にいる猟師の長吉さんですね。あちらへいったら、ぜひ会ってみましょう」

「それから、もう一つ……」

といって、杉村は言葉を句切った。

「仙台へいくことがあったら、鶴ケ谷をたずねてごらんなさい。きっと大事なことがわかるでしょう」

そういったとき、杉村の顔をかたい表情がかすめた。

「鶴ケ谷？」

「そう、なにかの役にはたつとおもいます。ではわたしはお先に」

といって杉村は彼の身分をあかす手拭を百次郎にわたして、縁台をたった。

「きっといってみますよ。有難う。お達者でおすごしください」

百次郎の言葉を背にして、杉村は店をでていった。

百次郎は浮世絵師の後姿を見おくった。

杉村はかねて、そのことをつたえておきたかったにちがいない。佐竹の人質を追ってここまできて、百次郎の姿を見つけて部下たちとはなれ、わざわざおしえにきてくれたものにちがいなかった。

（船形山の長吉と、仙台の鶴ケ谷……）

百次郎はもう一度口の中で復唱し、脳裡にきざんだ。

十一年まえ杉村が奥州に潜入して得た重大な秘密か情報がそこから得られるかもしれぬ、と百

次郎はおもった。いずれにしろ、杉村がこの事件で味方についてくれたことは、百次郎にとって又とはない強力な援軍であった。

勘定をして、店をでた。杉村の行き先に興味をいだいたからである。というよりも、佐竹の人質の行方に興味があった。

かねて、百次郎は伊達をのぞく五家のうちでは、佐竹と上杉にたいしてとくにつよい興味をもっていた。この二家とも、藩祖がきずいた封土(ほうど)を後になって幕府から大幅にけずられ、それが藩窮乏のもっとも大きな原因になった。ともに幕府に代々恨みをもちつづけているとみてもいい。

佐竹は、伊達をべつにすれば、奥州でいちばん力のある大名である。藩祖義宣(よしのぶ)の反骨の気風がいまだに代々うけつがれてきているとみられた。

上杉は、二頭の政治がおこなわれているという意味でも興味が持たれた。

南部、津軽、二本松は情勢しだいでどちらにでもうごく可能性がある。けれども地域的にいって、三藩とも伊達藩の影響をもっともうけやすい。伊達が指導力を発揮しやすい相手だ。

それにたいして、佐竹と上杉は封土もかなり大きく、藩としての独自性もつよいところである。その意味で、佐竹が上屋敷の人質回収に踏みきったことは、幕府側にとって重大な意味があった。

百次郎は杉村の行方を追ってみた。

杉村は上宿をぬけたところで、道を右へまがってすすんだ。

（水戸街道！）

佐竹の人質は水戸街道をとったようだ。

佐竹以外の上杉、南部、津軽、二本松にもそれぞれ中町奉行のきびしい見張りがついている。だから、百次郎は目下は伊達だけに注意を集中しておればよいのであった。

やがてのうちに、上総屋から、伊達の二丁の乗物がでてきた。入ったとき同様、六人の護衛がついている。

でてきたときの様子は、外から見るかぎり入ったときと全然かわっていない。

予想したとおり、護衛する面々の顔には、かすかながらも見おぼえがあった。この正月に伊達藩上屋敷入りをした屈強な男十三人のうちの六人である。これでますます乗物の中の主がお鶴の方と天祥院とであることにまちがいなくなった。

乗物は上宿をぬけ、水戸街道への曲り角をとおりすぎて、そのまま奥州街道をすすんでいった。

奥州街道は大体において道はば三間、松や杉の並木が沿道をふちどっており、奥州方面へむかういわゆる本街道である。江戸から宇都宮までは日光街道とかさなっており、人通りは東海道にはおよばぬが、ふだんでもなかなかにぎやかである。

まして今日は、平常の二倍、三倍の人通りだ。それもほとんど千住から北へむかう避難民が大多数である。江戸を焼けだされた者たちが近在、近国の親類、縁者、知人をたよって、荷をかついだり、車につんだりして親が子の手をひきながら一生懸命あるいている。

百次郎はやはり半丁くらいの距離をおいて、乗物を尾行していった。

はやければ昼ごろ、おそくても昼すぎには、金次が源之助や伝兵衛をつれて駆けつけてくるはずだ。百次郎としては彼等が到着するまでは一切ことをおこさず、相手の様子をうかがいながら尾行をつづけるつもりであった。

千住をでてしばらくのあいだは、ところどころに旗をたてた茶店が見えた。が、まだ茶店でいこうている旅人の姿は見えぬ。

だいぶいったころ、右手にふるびた地蔵堂が見えてきた。そこをすぎると、草加の宿である。午すこしまえ、乗物は越ケ谷の本陣へ入り、昼餉をとった。

昼をかなりまわったころ、粕壁と杉戸のあいだで、百次郎に肩をならべてきた行商人がいる。

「お武家さま、いい足をしてらっしゃいますね」

声をかけてきたのは、いつの間にか小間物屋姿にかわった金次であった。

「ご苦労だったな」

ふりむくと、浪人姿の源之助が後に見える。

「もう一人見えないが」

問うと、

「さいぜん、追いこしてゆきましたよ」

金次はにやりとわらってこたえた。

前方をよく見ると、今さっきとおりこしていった行商人が伝兵衛と似ている。

「さすがは伝兵衛だ」

百次郎もこれには感嘆した。まったく気がつかなかったのだ。

「江戸の火事は今日の四つ（午前十時）ごろ消えました」

「そうか」

百次郎はうなずいた。

「それから、佐竹の上屋敷から護衛にまもられた人質の乗物らしきものが一丁でましたほかは、南部、津軽、二本松いずれの屋敷からも人質が江戸脱出をはかった形跡はなかったそうです」

「上杉はどうした」

百次郎はすかさずきいた。

「上杉では、ちょっと妙なことがおこったようです」

「どうしたんだ」

「払暁ごろ、上杉の上屋敷から護衛つきの乗物が一丁でてきましたが、すぐに屋敷内から追手がかかり、乗物の護衛者たちと猛烈な斬り合いになりました。そしてついには護衛者たちがことごとく斬り伏せられ、乗物は屋敷内に引きもどされました」

「同志討ちか」

「とても無残な斬り合いだったそうです」

予想もしなかった出来事を金次がつげた。

いかにも上杉の特異な藩政を象徴しているといえるが、藩主の奥方のあつかいをめぐってその

ような事件がひきおこされるとはかんがえてもみなかった。

「つまるところ、伊達と佐竹だな」

犠牲もかえりみず、人質を無理矢理回収してまでも幕府に弓をひこうとしているのがこの二藩だということがあきらかになった。

「左様でございます」

あとの四藩はいまだ去就をきめかねているといってもいい。かりに六藩同盟に加盟しているとしても、まだ本当の覚悟はきまっていない。性根のところはふらついている。いまだ意志をひるがえす可能性もいくらかのこっている。

「上杉、南部、津軽、二本松の四藩はまだ今のところは洞ケ峠だ。伊達と佐竹を徹底的にたたいておけば、盟約をやぶって寝返らせることができるかもしれぬ」

「同感です」

「佐竹にしても伊達しだいだ。何はともあれ、伊達をつぶすことだ」

関所破り

この日の昼まえ……。

杉村三太夫と配下の同心四人は佐竹の乗物を追って、水戸街道を金町まできた。

金町と松戸のあいだを江戸川がながれている。これが、武蔵と下総の国境いである。

ここに水戸街道の関所がおかれている。松戸の関と呼ばれているが、関所は金町側の岸にある。

街道を扼して、入口と出口の門が二つもうけてあり、塁柵で関の左右はかこまれている。門の内側は、道にむかって長柄、突棒、刺股、捕縄などをものものしくかざりつけた面番所がもうけてあり、いかめしい高札が正面に立っている。その後ろに番卒長屋があり、牢舎、物置などがいちばん奥にある。

ふだんはほとんど通行人がとどこおることのない関所の入口、面番所のところにかなりの数の通行人がむれていた。人ばかりでなく家具家財をつみあげた大八車や荷車、さらに長持、挟箱などもあるので、いっそう関所は混雑していた。

杉村ら一行のすこし前には、佐竹藩上屋敷からでてきた乗物と警固の侍たちがいる。一行の前と後には、江戸を焼けだされてきた避難者たちがいた。

面番所には、番頭をはじめとして番士たち、横目、足軽、人見女らが詰めている。

番所にでている役人の人数が、ふだんよりもずっと多い。しかも、関所内はこころなしかぴりぴりした緊迫感につつまれていた。

通行改めがいつもより念入りにおこなわれているのがわかる。

この関所は通常、江戸からでていく女の手形はきびしくあらためるが、江戸に入ってくる女手

形はほとんどあらためぬ。男はでていく者、入ってくる者の面体を一瞥するだけで、手形の改めはほとんどやらない。

ところが今は厳重にひとつひとつそれをやっている。番士たちの目つき、態度もちがう。それで行列ができて、とどこおっているのだ。

杉村らは行列をはなれて、道端に寄った。番士の一人がその一行に気づいて挨拶にこようとしたので、杉村はそれを制した。

以前からこの関所にも老中からの指令がとんでいた。公儀より派遣された粒よりの連中が関所内にひそんで、ここを突破しようとはかる奥州外様大名の人質にたいして戒厳態勢をとっているのだ。

面番所の内部をうかがってみると、それらしい人物たちの姿がちらりちらりと見えかくれしていた。御長屋のほうにも、何時でもとびだせるように待機しているようだ。

佐竹藩の乗物一行も行列についてならんだ。順番に武家と町人の区別はないのである。

丁寧な改めがつづいている。

関所をでる女にたいしては、番士の女房と見える人見女が仔細な改めをおこなっている。

三斎は高札を見あげた。

一、往還の輩　番所前にて　笠　頭巾を脱がせ通すべき事

一、乗物にて通る者　乗物の戸を開かせ相通すべし　女乗物は女に見せ通すべき事

一、鉄砲儀は　相定むる証文を以て相通すべき事

一、公家　門跡の大名衆　前廉より其沙汰これあり候わば改めに及ぶべからず　但し不審の事あらば格別たるべき事

右　此旨を相守るべき者也

仍て執達件の如し

以上の掟の文字が書きつらねてある。全国どこの関所にも、これとおなじ高札が立っているのだ。

佐竹藩の乗物の順番がちかづいた。

乗物の前に、長持と挟箱を使用人たちにかつがせた商家の夫婦がいる。乗物の後ろは、一見して着のみ着のままで江戸を焼けだされてきたとわかる貧相な感じの若い商人夫婦だ。

「神田須田町の履物問屋相模屋の主人佐太郎と女房のおしんです。昨夜の火事に見舞われ、取手にあります女房の実家に避難いたすところでございます」

四十歳くらいの夫がそういい、町奉行所の印判のある手形を番士に見せた。

番士はそれを読みくだし、女房のほうへ視線をうつした。三十路をようやく越えた年頃の女房である。

人見女がちらと一瞥をなげた。不審はどこにもなかった。

関所の番士や人見女が不審を見ぬくのは、大抵最初の一瞥だそうである。やましさのある者を見ぬくコツをこころえているのだ。別室へつれていって、女の髪の中から体までことごとくあらためるというのはまったく例外的な場合である。

「ようし、とおれ」
番士がいった。
「ありがとうございます」
相模屋の主人はそういってから、女房と使用人たちをうながした。
使用人たちは長持や挟箱をかついでとおっていった。
つづいて、いよいよ乗物が護衛者たちとともにまえにすすみでた。殺気をはらんだつめたい空気が、その瞬間関所内にながれた。
番士や足軽たちはいっせいに乗物に注目した。
杉村らは息をつめるようにして、乗物を凝視した。配下の同心たちはすぐに飛びだしていって取りおさえる態勢で見まもった。
「佐竹藩家老疋田斎様、国元秋田へ所用があって帰国をいたす途中でござる」
乗物の護衛者のうちの主だった者が一人前にでてそうつげた。
大名の家老といえども通行手形は所持していなければならぬ。藩の江戸留守居が署名、印判をおした手形である。
この関所でそれをとくに提示すべき必要はない。が、高札にも書かれてあるとおり、いかなる身分の者であれ、乗物で関所をとおるときは、その引戸をあけねばならぬ。笠、頭巾をかぶっていたら、はずさなくてはならぬ。
佐竹藩家老疋田斎と名のったのは窮余の嘘だと杉村はおもった。

「引戸をあけよ」
番士がそういったとき、乗物の引戸が内からするするとひらいた。
(……!)
杉村は一瞬啞然となった。乗物には佐竹藩主義和の正室お静の方ではなく、五十中ごろの年齢の、恰幅のいい武士が悠然と乗っていた。
「佐竹藩家老疋田斎じゃ」
殺気だった多くの視線があつまるなかで、乗物の主はいかにもおちつきはらった態度でこたえた。
関所役人一同、声を発する者もなかった。
杉村の配下たちとて同様である。みなの思惑がはずれて沈黙した。
「よろしいかな」
疋田がまわりを見まわし、乗物の中から返事をうながした。
不審といってはまったくないのだ。止めだてする理由もない。
「おとおりください」
番士があわててこたえた。
乗物の引戸がしずかに引かれ、疋田の姿が中にかくれた。
(おかしい……)
この瞬間、杉村は脳裡にひらめくものがあった。

とっさに乗物の前方を見やった。履物問屋の夫婦と使用人の一行が折しも関所の出口にさしかかったところであった。

（家老は囮だ）

杉村はそう確信した。

「相模屋待て！」

旅絵師姿もかえりみず、杉村はおもわず自分から呼びとめた。

「その長持をとおすな」

そして出口の番士たちにむかってさけんだ。

関所内がにわかに騒然となった。あわただしく番士がはしった。番士はただちに関所の出口を閉じた。

「相模屋、その長持に不審がある」

杉村は関所役人にかわっていった。

厳重に網を張っている関所をくぐりぬけるのに、まったく策略もなく、正面からぶつかってくる道理がない。佐竹としては二重三重の策をこらしているはずだ。

長持はふだんならば関所をとおすに際して注意を要する品物だが、火事で避難する者が多いうえに、番士たちはそのすぐ後ろの乗物に気をとられすぎていた。

相模屋夫婦の顔色があきらかにかわった。長持をはこぶ使用人たちの表情もこわばり、態度がかたくなった。

番士たちが長持めがけて殺到してきた。

「長持の中に何が入っている？」

番士にするどく詰問されて、相模屋佐太郎の口元がかすかに痙攣した。顔面は蒼白である。

「衣類、反物、履物などが入っております」

佐太郎は必死にたえてこたえた。

「中をあらためる。フタをあけよ」

番士が命じた。

「はいっ」

佐太郎は長持のそばへ寄っていったが、そのフタへ手をかけることができなかった。

「どうした、相模屋。あけて見せろ」

番士が命令をくりかえした。

佐太郎はフタへ手をかけたが、あけることができなかった。

業をにやして番士はみずからすすみでて、長持の錠前をはずし、フタをあけた。

「あっ……」

その番士がまずおどろきの声をあげた。衣類、反物、履物類は入っていなかった。かわって大きな人形が長持の中に横たわっていた。はじめの一瞥でそう見たのだが、すぐにそれが本物の人間であることがわかった。

「女だ！」

番士がさけんだ。

長持の中に声もなく横たわっているのは、まだおさなさをのこしながらも気品のある容貌容姿の女である。さすがに死人のように蒼ざめた顔をしている。

長持の周囲をとりかこんだ杉村や番士たちは、これこそまちがいなく義和の正室お静の方であろうと確信した。

「曲者っ、関所破りだ！」

「召し捕れっ」

「ふらち者！　逃がすなっ」

一同は口々にさけんで、相模屋と使用人たちへ六尺棒や十手をむけた。

関所破りには、どこでも極刑がさだめられている。

佐太郎以下の者たちはすでに決死の覚悟をしていたようだ。いっせいにおめき声をあげて、関所の出口へむかって突進していった。

長持は放置したままである。長持の中の女はおきあがるまえに失神しそうになり、いちはやくとらえられた。

関所の出口附近で、相模屋一行と番士たちとのあいだに凄烈な斬り合いがはじまった。

相模屋一行は道中差や脇差などをかくし持っており、いっせいに白刃をぬきはなって闘いをいどんできた。

番士たちには幕府が派遣した徒士百人組、御小人、御先手同心、持筒同心、持弓同心からえりすぐった援軍がついている。今までどこにひそんでいたか、数十人におよぶ連中がとびだしてきて、相模屋一党を押しつつんだ。

これで、勝負の帰趨が歴然たるものとなった。

それでも佐太郎をはじめ相模屋一行は降服はしなかった。佐太郎は道中差をかざして、並いる相手方の中へ勇猛果敢に斬りこんでいった。

使用人らも十倍以上の人数の相手にむかって、無謀ともおもえる闘いをいどんでいった。

疋田の乗物は悽惨な展開となった修羅場を横手に見ながらとおりぬけ、悠々と関所をでていった。

乗物のすぐ後ろにいた、焼けだされた若い商人夫婦もことなく関所をとおりぬけた。

修羅場はそうながくはつづかなかった。

佐太郎が最初に斬り死にするにおよんで、使用人たちの士気がめだっておちた。

深傷を負ってたおれる者、とらえられて武器を捨てる者……その最後はまちまちだが、いずれも悲惨であった。

日がやや西にまわりはじめたころ、百次郎は奥州街道粕壁の宿場をすぎた。

伊達の二丁の乗物は相かわらず前後を六人の護衛にまもられて、半丁ほど先をすすんでいる。

「今夜、どこで泊まるつもりですかね」

金次に問われたが、百次郎にはすぐにはこたえられなかった。千住をでたころから、ずっとそ

れをかんがえていたのである。

すでに千住からおよそ七里あるいてきた。通常の旅人ならば、杉戸泊まりくらいが普通である。

だが、乗物での江戸脱出となれば、一つでも先の宿場へのして、すこしでも遠く江戸からはなれておきたいところだ。

「幸手どまりか、それとも栗橋までいくつもりか」

金次は自分で返事をした。

「おれは、幸手でも、栗橋でもないとおもうが」

百次郎は思案しつづけながらいった。

栗橋から中田のあいだを利根川がながれ、栗橋側の岸に問題の奥州街道の関所がある。いわば栗橋が、江戸の水際、最前線なのである。

「今日中に関所をこえるつもりでしょうか」

「江戸に大火までおこして逃げてきたのだ。なんとしても今日のうちに関所をぬけでるつもりじゃないか」

しかし、栗橋は江戸からかぞえて十四里、関所をこえて中田までいくとすれば十四里半。いかに乗物の旅とはいっても、病弱のお鶴の方と老齢の天祥院にとってはいかにも難儀な道程である。

「そうですねえ、無理をして中田までつっぱしるかもしれませんね」

「おれがむこうの人間だったら、是が非でも無理を承知で、今日のうちに関所を越えるだろう」

伝兵衛はやや前をあるいており、源之助はすこしおくれて後からくる。

伊達の乗物がいかような手段をとろうとも、関所をこえることはまず不可能だとおもわれた。

小淵村のちかくまできたとき、街道のかなたからほら貝のひびきがきこえてきた。

百次郎はおもわず身をひきしめた。金次の顔にも、緊張感が浮いた。

「小淵村のはずれに不動院がある。ほら貝はそこからだろう」

不動院といえば、五百石の朱印をいただく関東の山伏の本山である。はげしい修行修法で知られる道場でもある。

音調のひくい、底力のあるほら貝のひびきはいかにも不吉な予感をいだかせた。太く野にひびきわたり、やがて風の中にかすれ、それがふたたび元にもどって、単調だが力を秘めたつよい音調できこえてきた。そのひびきはあたかも戦国群雄の出陣における陣鼓のごとくきこえた。

このところひさしく蔵王山伏の出現を見ていないが、百次郎はつねに彼等の出現にたいするこころがまえをおこたっていなかった。

ほら貝のひびきは止まなかった。杉戸からさらに幸手へくるまでに音調がつよく、ちかくなってきた。

幸手をでて間もなく、街道から半丁ばかり入ったところに、八幡の大きな森が横たわり、その入口に赤い鳥居がある。

「あっ……」

その森のほうをながめた金次がおどろきの声をあげた。

百次郎も金次とほとんど同時に、心中で呻きを発していた。あたかも白い川のながれのように、鳥居からでてこちらにむかってくる白い衣をまとった男たちの長い行列が見えた。

よく見ると、全員が兜巾をかぶり、結袈裟をまとい、錫杖を手にした屈強な山伏たちであった。先頭から後尾までおよそ一丁の長さはあろうか、人数にすれば五十人はくだるまい。

「蔵王山伏め」

金次が吐きすてるようにいったが、その声にはこころなしか恐怖のひびきがこもっていた。

「とうとうでてきたな」

「栗橋の関所で乗物を掩護するつもりでしょうか」

「そう覚悟しておいたほうがいいだろう」

細長い帯状につらなった山伏一行は八幡の森から参道をぬけて、街道にちかづいてきた。はじめて彼等が白昼堂々と正体をさらしてきたのである。

百次郎はしばらく一行を、感動をもって凝視しつづけた。深い山中での荒行で極限まで肉体と精神をきたえあげ、みがきぬいた武術を身につけた伊達の秘密軍団がついに姿をあらわした。

ほら貝が鳴りだした。腹の底に力づよくひびいてくる重い音調があたりに鳴りわたった。

〈月の入るべき山もなし〉といわれている関東の平野には、筑波山いがいに山らしい山はない。その広大な平野の真ん中をゆく奥州街道だけに、見はらしをさえぎるものがない。

山伏一行はついに街道にでてきた。一糸みだれずつづいた。その先頭が百次郎のわずか十数間

後ろについた。

百次郎らにしてみれば、追いたてられているようであり、またじっくりと背後から観察されているようで、はなはだ地の利がわるい。乗物の護衛者たちと山伏一行のあいだにはさまれた形となった。

後ろから不意につつみこまれて襲撃をうける心配もあって、おちつかなかった。伊達の乗物を追っているつもりが、逆に追われている形になってしまった。

かといって道は一本道であるから、途中をまがるわけにはいかぬ。やりすごすわけにもいかなかった。

「むこうは気づいているでしょうか」

「おれたちの顔を知っているやつらもいるだろう」

日が平野の西に大きくかたむいている。あと一里ばかりで栗橋につく。

百次郎の予想どおり、伊達の乗物は今日中に中田まで突っぱしることが確実になった。

名物のあわ餅の旗をだした茶店が街道ぞいに見えてきた。烏が鳴いている。街道の左右の風景が野原から田圃にかわってきた。

ほら貝のひびきは止まぬ。百次郎らはほら貝の音に後ろから追いたてられるようにすすんだ。

山伏一行の出現で、こころなしか伊達の乗物の足取りが力づよくなったようだ。栗橋の先は船渡しなので、旅人はこころせかれるのか、みな自然に足がはやくなるようだ。

このあたりまでくると、さすがに江戸を焼けだされてきた連中はもういない。百次郎らもしだ

いに足早やになった。

幕府は江戸の防衛上の見地から、街道筋の大きな河川に橋をかけることをゆるしていない。奥州街道でいえば、利根川と渡良瀬川、水戸街道では江戸川が船渡しである。

宿場の入口の木戸が見えてきた。

関所の閉門は暮れ六つ（午後六時）である。どことなくあわただしい雰囲気がただよっている。

宿場へ入って、とおりぬけた。でたところが関所の入口である。

関所に入ると、まず石垣にかこまれた石段があった。その一方の石垣の内に、高札場がある。この周囲に通行人たちはむれていた。入念な改めがおこなわれているのであろう。

山伏一行も入ってきた。さすがにほら貝の音はやんでいる。

石段をのぼると内庭になっており、その奥に関所番屋がある。この囲い内に捕物道具がものものしく並べたてられている。

関所番屋内に三間に九尺の砂利敷があり、その奥に三間に三尺の下座の間がある。通行人は砂利敷から下座の間にいたって手形を見せ、番士たちの改めをうけてから石段をさがって関所をでていくのである。

詰めている番士たちは緊張し、殺気だっている。張りつめた雰囲気が関所内にみなぎっている。言葉つきも、ふだんよりはやや荒々しい。

彼等が目的としているものは、伊達藩の人質をのせたと見られる二丁の乗物である。番士たちの注意と神経はそれへ集中している。

番士たちのほかにも、幕府から派遣されたよりすぐりの者たちが関所内のさまざまなところにひそんで、この乗物一行の様子を注視しているのであった。さらに乗物をあたかも掩護するかのごとく関所に到着した山伏数十人もの一行に、きびしい警戒の態勢をとった。

山伏全員が力ずくで番士たちの前にたちふさがったなら、この場はたちまち修羅場に一変するであろう。番士と幕府派遣の手だれたちをもってしても、簡単にとりしずめることは不可能である。

しばらく待ってから、乗物は数段の石段をゆっくりのぼっていった。

金次はそのすぐ後ろから、じっと乗物と山伏一行のうごきを凝視していた。

「どうするつもりでしょうか」

百次郎にも、それはわからぬ。伊達はどうやって、この守りのかたい関所をくぐりぬけようとしているのか……。百次郎も緊迫した空気の中で、双方の展開を見まもった。

二丁の乗物は内庭にすすみ、砂利敷から下座の間へいたった。番士が数人おり、その背後に、姿は見えぬが、十人や二十人ではきかぬ人数が息をひそめてひかえているのが感じられた。

通常ならば、そこで手形を提示するのだが、その乗物は手形を提示しなかった。

「引戸をあけよ」

正面の番士が乗物にむかっていった。その声はかすかにふるえていた。

「引戸を……」

もう一度番士が命じたときに、ほとんど同時に二丁の乗物の引戸が内側からひらいた。居合わす者すべての視線が乗物の中にそそがれた。そして啞然となった。

お鶴の方と天祥院はその中にいなかった。乗物の中にはいずれも白い浄衣をまとい、兜巾を頭にのせた堂々たる山伏がのっていた。

手形を持っていないのは道理である。山伏は役者や興行者、虚無僧などとともに、天下いずれの関所においても通行御免をゆるされているのである。

山伏は乗物の中からはったと番士をにらみつけた。

「お名前をうけたまわりたいが」

番士がやや言葉をあらため、丁重に声をかけた。

「本山派修験道、大願寺別当、蔵王坊と申す」

前の乗物の山伏がいった。

「おなじく大願寺越家、金剛坊と申す」

つづいて後の乗物の山伏が力づよいひびきの音声でこたえた。両人とも蔵王山伏の首脳である。

まったく予期せぬ人物であった。問うた番士のほうがとっさに応答をためらった。ほかの番士たちも無言である。

百次郎も意外であった。

しばしおもい沈黙がつづいた。

「得心まいられたか」

別当蔵王坊がいった。

番士は答えにまよった。

山伏が乗物で関所を通過するのはきわめて稀なことである。しかし関所の法規をもってしては、この二丁の乗物を止めだてすることはできないのだ。止めるとすれば、法規を無視して力ずくにおよぶしかない。

番頭がでてきた。

「おとおりくだされ」

一礼して彼はつげた。

やがて二丁の乗物の引戸が閉じられた。陸尺が乗物をかつぎあげた。

警固の侍たちにまもられて、乗物は下座の間を悠々ととおりすぎ、石段をおりていった。

そして一行が船渡しにかかったころ、数十人におよぶ蔵王山伏一行が関所をとおりすぎた。

番士たちはこの長い行列を止めだてすることはできなかった。最後尾の一人がとおりすぎるまで、無言で見おくるほかはなかったのである。

大利根渡り

その夜、栗橋の宿場の旅籠の一室で、百次郎は懊悩の色をふかめていた。居合わせている源之助も金次も、百次郎におとらぬ苦悩に苛だちを見せていた。

伊達の人質にまちがいないと追ってきた二丁の乗物の中には山伏の頭目が二人。乗物は悠々と関所をこえ、利根川をわたって中田へ去っていった。

伊達の人質の所在がかいもくわからなくなってしまった。これで百次郎は最大の苦境におちいったのである。

「あの乗物が伊達の上屋敷からでてきたのはまちがいない。その中にはじめから山伏が二人乗っていたのなら、なにもあれほど厳重な護衛はいらぬはずだ。仙台からわざわざ屈強な護衛をおくりこんで、それにまもらせて蔵王坊と金剛坊を奥州へはこぶ必要は毛頭ないだろう」

金次は百次郎の心中を代弁した。

もう半刻以上、百次郎はかたい沈黙をつづけていた。彼がこのように鬱然たる状態におちいったのは、中町奉行与力を拝命していらいはじめてのことだった。

源之助もおなじかんがえである。

幕府の人員を大量に動員して完璧の守りをかためたにもかかわらず、作戦は功を奏さなかった。伊達の人質については行方がわからぬ。人質ははじめから屋敷をでなかったというよりも、警戒網をまんまとくぐりぬけ、いかなる方法かによって関所をぬけでていったとかんがえるべきであった。

佐竹藩の人質お静の方が長持の中にひそんで松戸の関所をぬけでようとしたところをつかまったことは、この日の夕方には栗橋の関所に報告がもたらされていた。首実検はまだされていないが、ほぼそれにまちがいないとされた。お静の方をのがすために、相模屋佐太郎と名のった家臣をはじめ、その使用人と称した家臣数人が犠牲になって無残な死をとげた。

佐竹藩が江戸大火を好機として、藩主奥方を帰国させるという大博奕を打ったのであるから、奥州六藩の首魁ともいうべき伊達藩がただ手をこまねいているとはかんがえられなかった。

「あの大火は、お鶴の方と天祥院を奥州へのがすためにやった火付けだ」

源之助も苦汁をのみこむようにしていった。お鶴の方と天祥院は昨夜まちがいなく上屋敷をでたと見るべきなのであった。

百次郎は蔵王坊と金剛坊が乗っていった乗物をあきらめきれず、一応伝兵衛を尾行させていた。

別の出口からお鶴の方と天祥院が江戸脱出したとは、どうしてもかんがえられなかった。念のために、江戸周辺の関所はまだ当分、厳重な警戒態勢がとかれなかった。

「どうかんがえても、あの乗物以外にないとおもう。乗物と山伏一行とのあいだにカラクリが

あったのかもしれぬ」

百次郎がおもい口をようやくひらいた。

昨夜から彼は睡眠はおろか休息を瞬時もとっていなかった。今百次郎の顔貌には濃い憔悴の翳がおちているのは、肉体的疲労のためではなく、伊達の人質を見うしなってしまったという苦悩からであった。

体の疲労は百次郎にとって何ほどでもないが、もし伊達の人質を国元に逃げこませてしまっては、今後幕府対伊達藩の戦いの局面にあたえる影響は甚大である。

百次郎は伝兵衛の尾行にまだかすかな期待をかけていた。

今夜おそくにでも伝兵衛が川をこえてもどってきて、耳よりな報告をもたらしてくれるのではないか、そんな夢のような期待を寄せていた。というよりも、必死な願いをこめていた。

伝兵衛は船のあつかいは自由自在だから、大利根の流れもたいした障害にはならぬだろう。

時刻はやがて子の刻（午前零時）になろうとしている。源之助も金次も口にはださぬが、伝兵衛がしらせにもどってくるのを待っているのだ。彼らもこのまま手ぶらで江戸へはもどっていかれぬ状況である。

「蔵王山伏一行が大袈裟に隊伍をくんで、なんで今ごろ江戸をでたとおもいますか」

源之助が百次郎にきいた。

「山伏が諸国を旅することは、なにもおかしいことじゃない。不動院から奥州へもどるところだとかんがえれば、かくべつの不審はない。だが、今この時期、よりによって江戸大火の翌日、大

勢こぞって栗橋の関所越えとは……」

百次郎はそれについて今夕から今にいたるまで、くりかえし思索をかさねていた。

「偶然のこととはいえぬ」

金次がいった。

百次郎も、山伏たちの出現は人質の脱出を掩護するため……という以外はかんがえられなかった。今は伝兵衛の尾行と探索に一縷の望みを託すばかりであった。

「ほかの出口から脱けだしたとはかんがえられませんかね」

そういって金次がかんがえこんだ。

「まず東海道、中仙道、東山道らをいくはずがない」

源之助がこたえた。

「水路は？」

「水路といっても、浦賀と中川にきびしい見張りをおいている。陸路以上にこの水路を脱けだすのはむつかしいだろう」

江戸における船舶の出入りの監視は、浦賀と中川の二ヵ所だけである。またこの二ヵ所で十分なのである。浦賀奉行と中川御番がその役目をおこなっている。

浦賀奉行は江戸湾を出入りするすべての船舶を監督し、その積荷を監査する。江戸の海域に関する全権をにぎっている。浦賀奉行の目をかすめて江戸湾から船で脱出することは不可能である。

もう一つの中川御番は小名木川が中川とまじわるところにある。小名木川は隅田川と江戸川をむすぶ物資輸送の幹線水路であるばかりでなく、利根川によってはこばれてくる奥州および関東の海運輸送を江戸につなぐ大消費都市江戸の、いわば生命線でもある。

奥州から江戸にいたる海運の船がかりは銚子であり、そこから利根川をさかのぼり、関宿、境河岸から江戸川をくだり、行徳から小名木川で隅田川へいたる。でていくときはその逆をたどるのである。

この小名木川の最重要地点に御番があり、すべての船舶を監督監視する。したがって、この御番を無視しては奥州方面への船は一隻たりともうごけぬのである。

やがて丑の刻（午前二時）がちかくなったころ、

（……？）

百次郎は旅籠の裏口のほうでかすかな物音をきいた。

「伝兵衛がもどってきたようだ」

というと、源之助と金次は一瞬けげんな顔をした。

やがて、音もなく部屋の襖がひらいて、伝兵衛が闇の中から姿をあらわした。

「何かあったか」

百次郎はききながら、伝兵衛の返事を待つよりも、彼の顔色を読もうとした。

「乗物一行は中田で会津屋という旅籠にとまっておりますが、山伏一行もおなじところに宿をとりました」

「やはり……」

百次郎が想像したとおりだった。

「気づいたことは？」

「一つありました」

「うむ」

百次郎はその返事を今まで待っていたのだ。

「山伏一行中に、背丈ひくく、体つきの華奢な者が二人まじっておりました。体軀頑丈な山伏たちの中では、ひときわ貧弱さがめだっておりました」

「うむ、それだ」

百次郎はおもわず声をあげた。雀躍する気持をおさえた。そこまできいて、伊達の仕組んだカラクリがすべてとけた。

「わたしもおそらくその二人がお鶴の方と天祥院にちがいないとおもいました。兜巾、結袈裟に脛衣をはき、笈を背負い、ほかの山伏たちとまったくかわらぬ装いながら、体軀はまるで女のようでした」

「そうか……」

百次郎は低い声でうなずいた。

こちら側の盲点をつかれた。栗橋の関所において、みなが二丁の乗物に気をうばわれているあまり、山伏一行に仔細な観察がおよばなかったのである。大体、関所では山伏についてはほとん

ど詮索をしない習慣がある。さらに関所にいたる以前は、山伏一行は百次郎らの後についていたため、よく注意することができなかった。

二丁の乗物に番士たちの注意をひきつけさせておいて、お鶴の方と天祥院を山伏一行の中にまぎれこませ、関所をこえたにちがいなかった。

源之助、金次の顔にもようやくわずかな生気がよみがえってきた。

「そのまま両人は山伏の姿で先へいくのでしょうか」

「いや、お鶴の方は病弱で、天祥院は老齢だ。徒歩の旅をこれ以上つづけるのは無理だろう。中田の宿場でお鶴の方と天祥院は蔵王坊、金剛坊と入れかわって、ふたたび乗物に乗るのではないか」

「そしてそのまま奥州へ突っぱしる算段だろう」

「どっこい、そうはさせぬ」

伝兵衛はひくい声でいった。

栗橋から先には、幕府の関所はおいてない。あるのは大名の国境いにおける関所だけである。あとは知恵と力を駆使して取りおさえ、江戸につれもどすしかない。相手も護衛と山伏らの武力を縦横につかって本国に逃げこむつもりなのである。

「江戸をはなれれば、地の利は敵と五分五分になる。油断はできぬぞ」

「もとより、その覚悟です」

「一日おくれればそれだけ、伊達の領国へちかづいていく。どうしても江戸のちかくで取りおさえなければならん」

百次郎が気持をひきしめていうと、源之助は力づよくうなずいた。

「伝兵衛、一刻でもはやく、敵にちかづいたほうが有利だ。これから川をわたれぬか」

百次郎が伝兵衛に見入った。

「さいわい今夜は月がでております。なんとか乗りきれるでしょう」

伝兵衛はたのもしく請け合った。

四人はただちに出立の仕度をした。そして旅籠を後にし、関所内の御長屋へ寄り、宿直の番士にその旨つげて、関所からやや上流へ寄った定船場へ案内させた。

関東の特定の河川には、幕府のさだめた定船場があり、それ以外のところから渡河はできぬ定めになっていた。

一行は番士から関所の船をだしてもらった。

伝兵衛が櫓をとって大利根へ漕ぎだしていった。川の水は月光をうけて、黒くにぶいひかりをたたえている。

川中へでていくにしたがい、船が波をうけて右に左にゆれだした。岸べりは波しずかでも、川中は流れがはやい。

風もでている。

轟々と音をたて、ところによっては渦をまいて川はながれている。昼間見たときとちがって、おもいのほかの急流である。水かさも増している。油断すれば、ながされる危険があった。

さすがに伝兵衛の腕には年季が入っていた。腰をしっかりとすえた、見るからに安定感のある櫓さばきで、船はすすんでいった。乗っているあとの三人は、水しぶきを顔や体にうけながら、前方の闇をじっとにらんでいた。

川の中央にいたると、波はますます高くなった。流れもいっそう早くなった。

木の葉のように波にもてあそばれて、生きたここちもしなかった。四人は何度も水上へ投げだされそうになった。

「大丈夫、おれの腕を信じてくれ」

伝兵衛はそういいながら、対岸めざして懸命に櫓をさばき、船をあやつった。

ようやく船は急流をのりきって、対岸へ乗りつけた。

「おれの腕も、まだ捨てたもんじゃない」

「同心がだめでも、食っていけるぞ」

伝兵衛の先導で、乗物一行と山伏たちが宿泊している会津屋へむかった。

中田の宿場は戸数わずか七十余軒、町並も四町五十間。奥州街道の宿場としては小さいほうである。

本陣はない。大勢で宿泊する場合は、つぎの古河までいく場合がおおい。したがって、会津屋は中田でもっとも大きな旅籠である。

百次郎らは会津屋と筋向いにある旅籠笹屋をおこして、階下に部屋をとり、しばらく休息した。

暁がおとずれる以前に、一同は仕度をととのえ、百次郎と伝兵衛は笹屋の木戸脇にでて、会津屋の様子をうかがい、源之助と金次は会津屋の裏手へまわって、物陰から見張りをおこなった。

東天がかすかに白みはじめたころ、会津屋の玄関先に人の気配がしてきた。払暁のまえに、一行は旅立つようだ。

やがて玄関から、ものものしく六人の護衛にまもられた乗物がでてきた。前日とおなじである。前に三人、後ろに三人ついて、油断なく乗物をかためている。

一行は、ようやく暁の気配が濃くなった会津屋の門前をでて、古河へむかって出発した。

百次郎と伝兵衛は木戸の隙間から、じっとそれを見おくった。

乗物一行につづいて、暁の闇の中から蔵王山伏たちがぞくぞくと姿をあらわした。これも予想したとおりである。

百次郎と伝兵衛は木戸の隙間から仔細に一行に視線をそそいだ。一行数十人の中に、きわだって小柄な山伏が二人ふくまれているかどうかをたしかめるのが目的であった。

わずかに明るみがさしかけてきたくすんだ大気の中を、山伏たちも古河方面さして出立していった。

「いない！」

その一行の中に小柄な山伏はまじっていなかった。まちがっても女が変装したような華奢な山伏は見つけられなかった。いずれも屈強な者ばかりである。

「いなかったな」

「乗物の中か……」
「もう入れかわったのだろう」
伝兵衛と百次郎はうなずき合った。
乗物と山伏の一団は中田の宿場をぬけていった。
百次郎と伝兵衛はその後を尾行しはじめた。源之助もその尾行にくわわった。
金次だけが念のために、中田にのこった。
中田のはずれ木戸のところに、一里山がある。ここをすぎると、もう古河領である。

小山水戸街道

常野（常陸と下野）にひろがる村々は、関東でも代表的な水田農村地帯である。米麦の生産地としてなりたっている。
下野小山もそうしたところである。水田地帯としてさかえ、副業として木綿栽培や紬の生産などがおこなわれている。
奥州街道間々田から小山がちかくなるにしたがい、街道の左右は見わたすかぎりひろびろとした田園風景となる。蒲公英や蓮華草、菜の花が一面に咲きみだれている。

小山は宇都宮藩領、戸数四百三十の町で、町並は十数町におよぶ。そこをでると、右へまがる道がある。
石の道標がたっている。
　右、結城　水戸へ
とある。一里半で結城であり、加波山の北の麓をとおって水戸へいたる。小山水戸街道である。
その道標をかたわらに見て、二丁の乗物と護衛、さらに山伏一行は奥州街道をまっすぐ北へすすんでいった。
しばらくいったとき、街道の前方に長々と寝そべっているものがあった。やや遠くから見ると、それは大きな野良犬が野放図に昼寝をむさぼっているように見えた。
一行がすすんできた。前方からちいさな白いものが無数にふわりふわりと風にのってとんできた。
蒲公英の絮である。花をおわって実になった蒲公英は白い冠毛があり、それが今時季は風にのって旅をするのだ。
絮は護衛や陸尺の肩や顔にかかった。それを手ではらった陸尺がとつぜん悲鳴をあげた。
「痛いっ」
つづいて後ろの陸尺も声をあげ、おもわず乗物をほうりだして、街道にうずくまってしまった。

「どうした？」

先頭の護衛が後ろをふりかえったが、そのとたんに彼もみじかい声を発して、その場で棒立ちになり、うごけなくなった。

陸尺が乗物をほうりだしたために、乗物は均衡をうしなって、横へたおれかかった。片方の陸尺はあやうくこらえたが、その直後右足に釘をふみぬいたような激痛をおぼえ、たまらず乗物をはなした。

同様の被害がこのとき一行中に続出した。

「菱だ、撒き菱だ。気をつけろ」

そのとき先頭の護衛が声をあげた。

彼が踏みぬいたのは、菱という水草の実をかわかしたもので、強靱で長くするどいトゲをいくつも有している。忍者は逃走するとき、追跡を断つためにこれを撒いておくのである。

後ろの乗物も陸尺がおなじ被害をうけたため、あやうく転倒しかけて路上になげだされた。

そのとき、前方の路上に寝そべっていた者がやおらムシロをはねて身をもたげた。乞食である。

「乞食っ、おまえの仕わざだな！」

護衛の一人がさけんではしり寄っていった。

「おれは昼寝をしていた。いいところをおまえたちにおこされた」

不服そうに乞食は不敵な面がまえでこたえた。護衛が抜刀したが、乞食はおくれも見せずに傲

然としている。

「曲者っ、ただの乞食ではないな！」

そういって護衛が斬りかかった刹那、乞食がわずかに身をひねった。瞬間、ムシロの陰で日の光がきらめいた。

「ううっ」

護衛が呻きをあげて、前にくずれおちた。乞食がさしだした槍のようなものに胸を突かれたのだ。

乞食がつかった得物は忍び槍という武器で、ふだんは三尺の長さだが、いざという場合に六尺くらいにのびる。

つづいてばらばらっと駆け寄ってきた護衛たちをむかえて、乞食はすっくと立ちあがった。

伝兵衛である。乗物一行が間々田で昼餉をとっているあいだに、乞食に身をやつして先廻りしていたのだ。

しかし一時はひるんだものの、護衛たちは伝兵衛を一人とみて、押しつつんで斬りかけてきた。

伝兵衛は忍び槍で立ちむかった。この槍は一名〈しばき槍〉とも呼ばれる武器で、穂先に鉤がついており、鉤にかけて相手をひきたおすこともできる。

山伏たちも後方から伝兵衛めがけて殺到してきた。

ダーン

そのときとつぜん一発の銃声が街道にとどろいた。
先頭をはしってきた山伏が腿を撃ちぬかれて、絶叫をあげて転倒した。この銃撃で山伏たちはややひるんだ。
銃弾が飛来したところは、街道の右手の田圃の中である。田圃には蒲公英、蓮華草、菜の花が一面にひろがっている。そこから銃声はきこえた。
百次郎は田圃の畝の中に身を横たえていた。すばやく短筒に火薬と弾丸を装塡して、ねらいをつけた。
動揺し、浮足だっている相手の様が手にとるように見えた。十分ねらいすまして、引金をしぼった。
ダーン
ふたたび銃声が虚空に鳴りわたった。
前の乗物の屋根が撃ちぬかれた。
百次郎から標的までの距離はおよそ半丁。彼の腕ならば、十分命中できる射程距離だ。
百次郎は腰に下げた胴乱の中から三たび早合をとりだした。早合には丁度一発分の火薬と弾丸が入れてある。これがあれば、素早く装塡することができるのだ。
三発めの装塡をしおわったとき、乗物の引戸があき、中から浄衣、兜巾の山伏がのがれでてきた。
（……！）

啞然となって百次郎は見なおした。ここでも、予想がはずれた。彼はこの中にまちがいなくお鶴の方か天祥院が乗っているとおもっていた。
百次郎は数瞬、惑乱した。
（お鶴の方と天祥院はどこへ……？）
かいもく見当がつかなくなった。山伏一行の中にそれらしき人物はいない。
惑乱がしずまらぬうちに、山伏たちがいっせいに田圃めがけて手弓を射ちはなってきた。
シュッ　シュッ　シュッ
するどい音が百次郎の身辺をかすめた。飛来してくる矢が日の中で、しきりにきらめいた。
手弓も半丁くらいの飛距離は十分あるが、矢の威力は半減している。弓ならばこの距離でも十分殺傷力はあるが、手弓や半弓となると四半丁くらいが確実な射程距離だ。
百次郎らはお鶴の方と天祥院が乗物の中にのっているのを確認するために、あえて危険な攻撃にでたのだ。ところがその目的はうしなわれた。
早急に作戦をたてなおさなければならなかった。
（どこへ消えたか……）
後方の乗物の屋根をねらいながら、百次郎は頭の中で模索した。
銃声が三たびひびきわたった。
ねらった個所をあやまたず撃ちぬき、乗物の中からあわててもう一人の山伏がでてきた。昨日、栗橋の関所で姿を見せた蔵王坊と金剛坊ではないか。

装塡の合い間をねらって、山伏たちが一時にこちらに殺到してきた。まるで天狗が疾走するような早さである。山中で脚力をきたえあげた威力が十分発揮されている。

ダーン

そのとき街道のむこうから銃声がきこえた。百次郎が貸しあたえた短筒を源之助が撃ちはなったのだ。

百次郎には源之助の姿は見えなかった。これは山伏たちをねらい撃ったというよりも、伝兵衛を逃がすための掩護が目的であった。

伝兵衛が北へむかって逃走していく姿が見えた。逃げるならば江戸方面の南へいくほうがのぞましいが、山伏一行に道をふさがれているために反対側へ逃げた。

小山の先は新田である。さすがに山伏たちはそういう戦術にぬけ目がなかった。

百次郎も南方の退路を断たれたために、街道の北へ逃走する羽目になった。

源之助もおなじく北へ逃げていった。

百次郎は懸命に逃走した。奥州街道は道中奉行の管轄だが、兵を擁し警察権をにぎっているわけではない。自力で逃げきるしか方法がなかった。

伝兵衛も源之助も必死の逃走をつづけた。走っていくうちに、やがて街道の風景がかわってきた。松や杉の並木が林にかわってきたのだ。

頭上が薄ぐらくなった。大木が頭上たかく、枝と枝、葉と葉が幾重にもかさね合って、空が見えないまでになっている。これでは雨をとおすこともないだろう。

街道の左右も、ゆくほどに林がふかく、森林をおもわすような風景にかわった。檜、杉、松、榎などの大樹が幹と幹、枝と枝とぶつかり合うように密生しているのだ。

あたかも、森林の中を切りひらいて一筋の街道がとおっているようだ。このあたりから新田の宿場の入口ちかくまでずっとこの状態がつづくのである。

半丁ほど前方をはしる伝兵衛の姿がはるかに見えた。百次郎の後ろには、源之助がいる。

百次郎は一丁ほどすすんだ。

そのとき、前方の行く手に、蜘蛛が糸をひいておりてくるように高い木の枝から山伏が身軽におり立ったのが見えた。

とっさに危険を察し、百次郎は頭上をあおいだ。もっとちかい木の枝に、山伏のいるのが見えた。

百次郎は真ぢかの木の幹に身をかくし、短筒をかまえた。

シュッ

するどい音とともに、手弓の矢が足もとに深く突きたった。

山伏は枝から枝へ身軽につたいながら、つづけて手弓を射かけてきた。それも一人や二人ではなかった。すくなくとも数人の山伏の姿が高い木々の枝のあいだに見えがくれした。

シュッ　シュッ

手弓の矢がさまざまな角度から飛来した。百次郎はいちばんちかい枝に鳥のようにとまっている山伏にねらいをつけて撃ちはなった。

銃声がこだまし、高い木の枝から山伏が落下していった。
早合をとりだし、すばやく装填し、ふたたびねらいをつけた。
狙撃するよりもはやく、その山伏は枝から枝をつたって、森林の中へ身をかくした。
しかし手弓による攻撃は後をたたなかった。ほとんど間断なく射かけられ、百次郎は樹幹の陰から体をあらわすことができなくなった。
やや後方から、銃声がきこえてきた。
源之助がやはり、上空からおそいかかる山伏にたいして応戦している様子だ。
前方の伝兵衛のたたかいぶりはわからぬ。しかし、苦戦をしいられていることは十分に予想された。
三者が分断され、別個にたたかっていたのでは不利におちいっていくのはあきらかで、最後には各個撃破されるおそれがあった。
百次郎は街道を後退し、まず源之助と合体しようとおもった。
白昼でも薄暗い並木の下である。日暮れを待って、街道の左右の森林の中へまぎれこめば、逃走の機会はあるとおもった。
百次郎はじりじりと後退をつづけた。木の陰から木の陰へうつり、追いせまってくる山伏にたいしては短筒をねらい撃った。
あたりは徐々に暗くなってきた。
さきほど以来、ななめ前方の上空から執拗にねらってくる敵があった。すこしでも木の陰から

姿をのぞかせると、すかさず射ちかけてくる。
百次郎は根気よく、その山伏と対峙した。彼としても、簡単には短筒を撃ちはなつことができなかった。撃ちもらした場合、つぎの装填の合い間をねらわれるおそれがあるからだ。
そのほかにも、まだ数人の敵がねらっている。彼らはたくみに場所を移動しながら、手弓を射ちこんできた。
百次郎は後退しながら、応戦をつづけた。そして日が暮れるのを待った。
しばらくたったころ、つづけざまに背後から銃声がきこえた。さきほどとくらべれば、距離がずっとちかくなっている。
百次郎も一発射ちはなって、合図をおくった。
それからしばらくのあいだ、敵の攻撃がやんだ。しかし下手にうごけば、たちまち手弓の犠牲になることはあきらかである。
そのうちに、前方の敵が百次郎ごしに背後へむかってたてつづけに攻撃を開始した。
（……？）
いぶかしんでいると、
ダーン
百次郎のすぐ後ろで銃声が鳴った。
そして男が二人、百次郎のひそむ木の陰にとびこんできた。
「おおっ！」

一人は源之助で、もう一人は今朝中田でわかれた金次であった。

「百さん！」

命の急場のときに、金次はくだけた言葉をかけてきた。その度胸に百次郎はおもわず惚れ惚れした。中町奉行同心はこれでなくてはならぬとあつい気持がこみあげた。

「何かつかめたか」

まずそうたずねた。

「人質二人は、小山から水戸へむかいましたよ」

「なに、水戸へ？」

百次郎はおもわず大きな声をだした。

「途中で乗物をおり、七人の警固とともに道中駕籠に乗って小山から右へまがったんです」

「小山水戸街道か」

百次郎は小山の町はずれの石の道標をおもいだした。

「そうです、小山水戸街道」

「ううむ……」

百次郎はうなり声をあげた。かんがえてもみなかったことである。

水戸方面へまわるなら、千住から水戸街道をとおるべきである。奥州街道の途中からわざわざ脇道をとおって水戸へでるのは、なんとしても奇策である。

（どうして水戸へ……？）

その意図はつかめなかったが、今はそんな詮索をしている場合ではなかった。

「ようしこうなったら、どうしてもここを突破して水戸へ！」

百次郎はみなを奮いたたせるようにいった。

天当船

江戸は建設の槌音と活気にみちていた。どこにいっても、槌や鉋の音がきこえた。

江戸は燃えるのもはやいが、復興もはやい。大火がしずまったその日から、焼け跡の始末もそこそこに、もう槌音がひびきだしたのである。

木場などに貯蔵されただけの材木では足りるはずがない。大量の材木が大型の船で木曾や紀州からぞくぞくと江戸にはこびこまれ、飛ぶように売りさばかれていった。

江戸市街のおよそ二十分の一が灰燼に帰した。武家屋敷や寺院などの被害もそれにおとらなかった。

材木が高騰し、大工、左官、屋根屋、瓦屋などがひっぱり凧の有様である。ただちに家屋の復旧にかかれたのは不幸中の幸いといっていい人々である。

裏店や借家を焼けだされた者たちは自分らの手では復旧にかかれない。家主にしたところで、

材木が高騰している折から、店子のために必死で再建にとりかかる者は稀れだ。

小さいながらようやく自分の家を手に入れた連中にしても、再建のメドはすぐにはたたなかった。そうした人々は、ちかくの寺院に収容され、炊きだしをうけて、雨露をしのぐ場所を提供された。

お蝶は富田屋を焼かれて、東両国にある浄土宗回向院に収容された。回向院には両国近辺で焼けだされた者たちが大勢収容されていた。

はじめは疫病が心配されたが、これはなんとかことなきを得た。

お蝶は少々貯えがあるので食べるにはこまらないが、とたんに商売がやっていけなくなった。地面は自分のものだが、すぐには店をたてられぬ。

さすがのお蝶も途方にくれていた。

火事によって、とつぜん人生の岐れ道にたたされた。これはまったくの不意討ちであった。

百次郎に会いたかったが、大火の夜いらい行方がわからなかった。回向院を足場にしてこころあたりを方々さがしてみたが、消息はまったくつかめない。

お蝶は百次郎との体のむすびつきが復活してからというもの、少々気がよわくなっていた。これは自分では予期しなかったことだった。男への甘えが知らず知らずのうちに芽ばえていたのだろうか。昨今ほど百次郎を恋しいとおもったことはなかった。

そのかわり勘兵衛は火災の翌日から、まめに見舞いに足をはこんでくれた。

伊勢町の米河岸はおよそ半分が火事に見舞われたが、半分は災難をまぬがれた。米蔵のほう

は、戸前の隙間を土でふさぐなどしてほとんど無事だった。火の手は道浄橋の袂まできて、そこから方角をかえた。

常陸屋はすんでのところで、火災に見舞われなかったのである。勘兵衛らしい運のつよさだとお蝶はおもった。

勘兵衛は、回向院を早々に立ちのいて常陸屋へうつってきたらどうかとすすめてくれたが、お蝶はそれを丁重にことわった。

常陸屋に厄介になることは、勘兵衛の後妻になることを承知したことになる。体はあたえたが、女房になる気はなかった。

それでも勘兵衛は毎日やってきては、なにくれとなく世話を焼いてくれた。お蝶としては大助かりだった。

「縁起なおしに、旅へでてみないかね」

今日も昼ごろ、お寺の炊きだしはうまくないだろうといって御馳走のつまった弁当をはこんできてくれて、とつぜんそうきりだした。

「こんなときの旅なんて……」

お蝶がいうと、

「こんなときだから、おもいきって江戸を留守にしちまうんですよ。そしてゆっくりと命の洗濯をしたらどうです。はたらくばかりが人生じゃないからね」

勘兵衛一流のいいまわしである。こういうときの勘兵衛は本気である。なかなか後へひかない

のである。

「でも、今は気がすすみませんよ」

「旅からもどってくれば、江戸はだいぶおちついているだろう」

「どこへ？」

旅のことよりも、勘兵衛の意中に興味がわいてきた。

ちかごろの勘兵衛の言動には、少々フにおちぬところがあった。どことはっきり指摘はできぬが、なんとなく浮足だっているところが女の勘でうかがえるのだ。

「陸奥だよ。以前一度いったことがある。もう一度いってみたいとかねがねおもっていたんだ」

勘兵衛はそういったが、こういう言葉をきいたのははじめてである。

「陸奥のどこですか」

「仙台にうちの取引先があるから、仙台を中心にして、まわりに足をのばしてみたい。陸奥には謎と夢があるだろう。あのあたりは神秘の国だよ。人情も素朴だっていうじゃないか。ぜひ女将と一緒に旅をしたい。あんたの生まれ故郷にちかいところだ」

「謎と夢ですか……、それに神秘の国ですって。そうおもいこんでいらっしゃる人もいるでしょう。本当に陸奥を知らない人は」

「女将にはどうなんだね、陸奥は」

「とても寒くて、きびしいところでした。わたしがおもいだすのは、ひもじさとまずしさですよ。雪の季節にわたしたちは藁とムシロ蒲団で寝てくらしたんです。そんなところへもどる気な

んかありません」

にべもなくお蝶はいった。

「そうだろうか。それは陸奥の一面だろう。いいところだってある」

「さあ、どうでしょうかね。わたしにはいい思い出なんか一欠らもありません」

少々意地になっていった。

「陸奥のすべてが貧しいわけじゃない。あそこだけがおくれているというのもかんがえちがいだよ。寒いのは仕方がないが、陸奥には穀倉地帯だってある。第一江戸の食糧はほとんど陸奥にたよっているくらいだ。たしかに昔は飢えと寒さの国だったかもしれないが、今じゃそんなことはない」

勘兵衛の口ぶりもしだいに熱がこもってきた。

「ずいぶん、ごひいきなんですね」

「わたしは奥州との米取引きでなんとかここまでになれた商人だよ。ほかの商売をしてたら、まだウダツのあがらぬ小商人だっただろう。わたしは奥州に感謝している。いつか恩がえしがしたいとおもってるんだ」

お蝶に勘兵衛の気持がすこしわかりかけた。が、大筋のところはまだ理解しがたい。奥州米で財産をなしたから奥州に感謝しているという理屈は筋がとおりすぎている。説明のための理屈か綺麗ごとのようだ。

それほど謙虚な商人ではないはずである。

お蝶は陸奥を今でも好きにはなれないが、他人がほめるのを聞くのは不快ではない。やはり、生まれてそだった場所をにくみきれないものがあった。

「わたしはとても恩がえししたい気持なんてありません。むこうとは縁を切ったつもりなんです」

「そう意地を張ることはないとおもうがね。なんといっても、自分を生んでそだててくれたところじゃないか。いけば、かんがえがちがってくるかもしれない」

「陸奥の本当のきびしさやまずしさをご存知ないから、そんなことがいえるんです。とてもわすれられるようなもんじゃありません。今でも毎年、むこうの若い男や女は米俵とおなじように船底につみこまれて、一人いくらで江戸に売られてきています。旦那さまにはとてもわかってもらえないでしょう」

こと生地に関することとなると、お蝶は今でも血がさわいでくる。少女期のうらみと悲しみをわすれることができないのだ。

「まあいろいろなことはあるだろうが、今一度自分の生まれ故郷を見ておくのはいいことだよ。いってみて、かんがえがかわらないのならば仕方がない。いかないでとやかくいうのは間違っているよ」

いつもは大抵お蝶のいいなりになる勘兵衛だが、今回は執拗なうえにもねばり腰だ。

お蝶はその勘兵衛のこだわりに興味をおぼえてきた。

「わたしのおもいすごしかもしれませんが……」

お蝶はちょっと風向きをかえた。

「無理にとはいわないが、もし気持がかわったら、一緒にきてくれないか。今からだと、気候だってわるくはない。旅だって、そう難儀じゃないから」

「そうですねえ……」

お蝶は逡巡をあらわしてみせた。

以前からいだいていた勘兵衛の素姓への疑問が、旅にでることによってとけるかもしれないとおもった。この疑問はそのままほうっておくわけにはいかぬ。多少の危険はあっても、相手の懐にとびこまなければ、この謎をとくことはできないのだ。

「一日に十里もあるくような旅じゃない。ただすわってればいい」

「船ですか」

「そのほうが楽だし、ずっとはやい」

「父さんや母さんに、一度会ってみようかしら」

両親へのなつかしさはべつである。ふと口からこぼれでた。

「それがいい」

勘兵衛はその気になってきた。

「お店はどうなさるんですか」

ちかごろ勘兵衛はあまり商売に熱をいれていないようだ。これは昨冬の米ひでりのときから、お蝶が感じていたことである。

「店についてはあらためてかんがえなおそうとおもってるんだ。商売のやり方をかえようかとおもってな。一緒にやろうといってくれてる人がいる。この人物は大物だよ。今度は大きな商売をすることになるだろう。それについての下調べもしなくてはならない」

「だったら、わたしは邪魔じゃありませんか」

「そんなことはない。それはそれ、これはこれさ。女将、一緒にいってくれるかね」

「すこしかんがえさせてください」

「いい返事を待っているよ。出発はできるだけはやいほうがいい。今晩にでも返事がききたい」

勘兵衛はお蝶の風向きの変化をよろこんだ。

翌日、お蝶は勘兵衛と常陸屋の手代藤吉とともに小網町の箱崎から船にのって、江戸を旅だった。

いったん気がかわれば、腰があがるのははやかった。お蝶にしても、まるでにわかな旅だちで、仕度らしいものはほとんどしていなかった。身一つに下着類などを買いととのえて旅行李につめ、菅笠をかぶり、塵よけの旅の浴衣をまとい、手甲、脚半、草鞋の旅姿である。

船は境河岸の船積問屋が所有する高瀬船で、ふだんは米の運搬などにつかわれている。

大川を突っきって小名木川へ入り、本所を縦断していった。

中川とまじわる北岸の角に、幕府の御番所がある。船はそこでとめられた。

ここは五千石以上の寄合旗本が三人、五日交替でつとめる川の関所だ。江戸の勝手口といってもいい。

通行をゆるされるのは、明け六つから暮れ六つまでのあいだである。今日、番士たちの姿がふだん以上に多い。

船の行き先と、積荷をきかれた。

番士の一人が船の中にわざわざ乗りこんできた。

積荷は奥州石巻へはこぶ呉服、太物、古着類がつまれている。

お蝶は通行手形のあらためをうけた。今朝、町奉行所の印判をもらったばかりの手形である。女はこの手形がなければ、ここを通過できないのだ。

「ようし、とおれ」

許しがでて、高瀬船はふたたび漕ぎだしていった。

小名木川は途中から新川と名をかえて、やがてのうちに下総行徳についた。

ここから江戸川のぼりとなる。船頭のしぶい棹唄をききながら、船はゆったりと江戸川をさかのぼっていった。

季節はもはや晩春もどんづまりである。川岸には柳並木が風にゆれ、燕が矢のように川面をかすめ、白い腹を見せて飛び去っていった。

もしこれが遊山の船旅なら、おもわず嘆声のもれるようなのどかな風景だ。田舎びてはいるが、風光はわるくない。

だが、お蝶にとっては、腹に一物を秘めた旅である。のんびりとこころゆくまで沿岸の風物を

たのしんでいるようながらも、意識はつねに勘兵衛へむかっている。ささいなことにでも気をつかった。勘兵衛の心中をさぐり、彼の素姓についての疑いを晴らそうとしているのだ。

（どうして、しつこく陸奥への旅にさそったのか？）

お蝶をつれだすことに、どんな重大な意味があるのだろうか。それをしきりにかんがえてみた。惚れているだけとはかんがえられぬ節があった。

ともに旅にでる以上、体をかさね合わせることは覚悟しなくてはならない。それは仕方がないとあきらめていた。

それを差しひいても損にはならぬものが得られるという勘がお蝶にはあったのだ。けれども、それを得るには命の危険がともなうだろうという不吉な予感があった。

日が暮れてきたころ、高瀬船は境河岸についた。ここは関東屈指の繁昌地である。

船積問屋のでむかえをうけて、そこの別棟に厄介になった。常陸屋はそこの顧客なのである。

翌早朝、船は利根川へでていった。さすが坂東太郎である。川幅が江戸川とはまるでちがう。対岸が朝靄にかすんで見えなかった。

船はここから白帆をかかげた。

大きな帆をはらませた大型船があちこちに見えた。物売り船も漕ぎ寄せ、しきりに声をかけてきた。弁当、お茶、菓子、果物、日用雑貨などなんでもここで手に入るのである。

十一年まえ、お蝶はこの水路をとおって江戸に売られてきたのだが、そのときは積み荷同然のあつかいだったので、風景をゆっくりながめる余裕はなかった。

船はながれにのって、ぐんぐんくだっていった。おなじ船にのっているのに、江戸川と利根川とでは乗りごこちが大層ちがう。くだりだから早さもちがう。

「女将、中町奉行っていうのを知っているかね」

胴の間で、勘兵衛がはなしかけてきた。

「なかまちぶぎょう？」

いきなりのことなので、お蝶はなんのことやら意味がわからなかった。

「知らないのか」

勘兵衛は意外な顔をした。

「知りません」

「きいたこともないかね」

「ありませんねえ」

「昔、江戸には、南と北のお町奉行所のほかに、中のお町奉行所というのがあった」

「ああ、それだったら、以前きいたことがありました」

「何十年もまえに、中町奉行はなくなったといわれてるが、それは表むきのことらしい。幕府にはいまだに人に知られることなく中町奉行がつづいているんだ。そして秘密の任務にしたがっている」

「まあ、そうなんですか。そんなものが今でも……」

南北の町奉行所のほかに、もう一つかくれた町奉行所があるとはにわかには信じがたいことだ

が、勘兵衛がそんな嘘をいうはずはなかった。公儀には世間に公にできぬ役目や仕事はいろいろあるのだから、真実だろうとかんがえた。

「奉行本人から与力、同心にいたるまで、自分の身分役目を内密にしている。ふだんは別の職についている。町人や百姓になりすましている者もあるんだ」

「そうですか」

お蝶は、勘兵衛がどうしてそういう話をもちだしてきたのか気になった。もしかしたら、勘兵衛自身が中町奉行の与力か同心なのだろうかとうたがってみた。

「女将のまわりにも、もしかしたらそういう者がいるかもしれない。わたしはそんな者じゃあないがね」

勘兵衛にはお蝶のこころのうごきがわかったようだ。

「もしそうだとしたら、本人が口にするわけはないでしょう」

そうこたえながら、自分の周囲にいる男たちのことをいろいろかんがえてみた。

誰といって、おもいあたるような人物はいない。が、もし中町奉行の者であるなら、たくみに偽装、擬態をこらし、言動にも気をつけているだろうから、すぐ他人に気づかれるような振舞を見せるはずがなかった。

「この旅は中町奉行にかかわりがあるんでしょうか」

「そんなことはない」

「旦那さまのお知り合いにいらっしゃるんですか、中町奉行のお役の人が」

「以前、会ったことがある。その人は中町奉行の与力だったよ」

勘兵衛の話が発展してきた。

「その人は今は？」

「もう以前に死んでしまった」

「そうなんですか、でもとても面白いお話じゃありませんか。今後、人の見方がかわってくるかもしれません」

「世の中にはかならず表と裏がある。光があれば、影がある。だから世間は面白いともいえるんだがね」

お蝶は勘兵衛の言葉の意味をかんがえてみた。

川幅はくだるほどにひろがってきた。潮来をすぎて、終着銚子にちかづいてきたのである。海のようなひろがりを持つ河口には、大小さまざまの船が無数に上下している。川岸には諸藩や大商人が所有する大きな蔵が櫛比している。

銚子は利根川流域最大の河岸であるとともに、関東随一をほこる港である。河口はいつしか海にかわっている。

行く手の水平線上に、巨大船の姿がいくつも見えてきた。この光景には、昔一度だけ見たときのおぼろな記憶がのこっていた。これを見たことによって、お蝶にははるかな奥州がぐっと身ぢかなものにおもえてきた。

船は桟橋に横づけとなり、一同はおりたった。

ようやく港は暮れかけていた。海は夕焼けの返照をうけて、視界はとどくかぎり赤くかがやいている。夕焼けを見て、さすがにお蝶は胸にせまってくる感慨をおぼえた。

ここで一泊して、船を乗りかえるのである。

一行は日没まぢか、港の横手にある旅籠に入った。旅籠には勘兵衛の到着を待つ先客がきていた。

「升屋平右衛門さんとおっしゃる大坂のお方だ」

お蝶はその人を紹介された。

「両国で居酒屋をやっておりますお蝶と申します」

〈升平〉の名前だけなら、お蝶も知っていた。大坂の米年寄の一人で、大坂商人の中で五本の指に入るだろうといわれるほどの豪商である。諸大名の蔵元や掛屋をつとめ、昨年、一文字屋にかわって伊達藩の蔵元に就任した。というよりも、力ずくで一文字屋を追放して、伊達藩蔵元の地位をもぎとった人物である。

麹町には、升屋の江戸出店がある。升平は四十歳前後の年恰好、意外なほどおだやかそうな風貌風采をしている。

「これから仙台まで、ご一緒に船旅をすることになります。よろしゅうおねがいいたしま」

先方から如才なく挨拶をしてきた。

「こちらこそ、よろしくおねがい申しあげます」

勘兵衛と平右衛門とはごくしたしい口をきいている。勘兵衛が升平と昵懇であったのはまことに意外だった。

蔵元といえば、多くの場合苗字帯刀をゆるされ、その藩の家老格身分をあたえられている。金力を背景にした権勢は並大抵のものではない。藩の台所を牛耳っていることが多い。まして伊達藩ほどの雄藩の蔵元となれば、その力は名実ともに絶大なものである。

大物の商人とくんで大きな仕事をやる、と勘兵衛がいっていた相手は升平なのだとおもった。

勘兵衛の懐の意外なほどの深さと広がりに、お蝶は感心した。彼の底力におどろきをおぼえてきた。

それとともに彼の素姓にたいする疑いがいっそう濃くなっていった。今までかつて一度も勘兵衛の口から升平の名をきいたことはなかった。

お蝶は、わけもなく、背筋のぞっとつめたくなるような恐ろしさを勘兵衛にたいしていだいた。今までお蝶が知っていた勘兵衛は彼のごく小さな一部であって、本当の姿はおもいもよらぬところにあるのではないかとおもった。

平右衛門は、小右衛門という番頭と平三郎という手代をつれている。小右衛門は三十年輩だが、いかにも切れ者という感じのする男である。平三郎は体の屈強な、用心棒がわりのような者だ。

一行六人は翌朝、高砂丸という天当船にのりこんだ。

天当船は積量八百石ときまっている。奥州石巻と銚子を往復している御穀船の最大のものを天当船と呼ぶのである。御穀船の大半は藩有船ではなく、商人所有の船であるが、常時藩の雇い船

となって、江戸廻米船を編成しているのである。

この高砂丸は升平の持ち船である。升屋は伊達藩の江戸廻米をおこなうために、天当船だけで二十余艘を所有している。

銚子沖は波おだやかであった。巨大な蛇がかま首を高くもたげたような舳先をおったて、三十五反の白帆をかかげて鹿島灘をすすんでいった。

もどり船だから、積み荷は呉服、太物、古着のたぐいである。船足はいたって早い。海岸はたちまちかすんで見えなくなった。

ところが鹿島沖をすぎたあたりから、俄然波が高くなってきた。時化におそわれたわけではない。このあたりから悪名高き鹿島灘の荒波海域に入ってくるのだ。

船がぐらぐらと揺れはじめた。波は山なりの大きなやつがやってきた。

谷間にしずんだとき、周囲の波は頭上をはるかに覆う山のような高さになり、まるで地獄の底におちたような気分におそわれた。大波の頂きにおしあげられたときは、視界からすべてのものが消えさってしまう。空がななめにかたむき、舳先が頭上に見えた。これが交互にくりかえしやってきた。しかも際限もなくつづくのだ。

「波を見るな」

勘兵衛がそう注意してくれたが、波のほかに見るものがない。つい見てしまう。無理な注文なのである。

おっつけくるだろうとおもっていた船酔いがおそってきた。

（こなければよかった）

後悔したが、どうするすべもなかった。もう生きてこの船をでられないのではないかと観念しかけた。何度もこの航路を往復している水主や水夫でも、この荒海には容易に慣れることがないそうだ。

お蝶は必死で我慢をした。が、船が上下するたびに気持わるさに痛撃された。

我慢には限界があった。呼吸がつまるほどの苦しみにおそわれ、こみあげてくるものに抗しかねて、はげしく嘔吐した。

それははてしなくつづいた。吐いてしまえば気分のはれる酒の酔いとはまったくちがう。嘔吐感はいっそうこみあげてくる。仕方なくくるしまぎれに唾液をはき、さらに臓腑の底の液までしぼりだした。

船酔いにきく薬などはない。船をおりるしかないのである。

気がつくと、藤吉もおなじことをやっている。勘兵衛も蒼い顔をしているが、懸命にたえている。

升平や小右衛門、平三郎すらもむっつりとだまりこんでいた。かわらぬのは船乗りたちだけである。

「波がしずまるのは、どのあたりでしょうか……」

息もたえだえになってたずねると、

「那珂湊をすぎて、久慈あたりまではこれがつづくだろう」

絶望的な答えがかえってきた。

神も仏もない気分で勘兵衛の顔を見た。とてもそれまでもちこたえられそうもないとおもった。

「横になっていたほうがいい。へとへとにくたびれれば、あとはねむるしかない。ねむっているうちに、波はおさまっているよ。この船は明日の朝、小名浜によって、大事な荷をつみこんでいく」

そんな乱暴で無責任な忠言を勘兵衛はあたえてくれたが、実際にそれがいちばん適切な処置なのであった。

長時間、お蝶はくるしみつづけた。そして苦痛と疲労の頂点にたっしたあたりで、とうとう自分をうしなってしまった。意識をなくしたも同然の状態のまま、眠りにおちこんでいった。

昏々と泥のような眠りをむさぼった。ながい空白の時間がながれていった。

どれほどの時間がたったか、お蝶にはわからなかった。が、おぼろな意識の中で、人のはなし声がかすかにきこえた。酔いはもうさめていた。けれども疲労のために、まだ眠りからぬけだすことはできなかった。

声だけがつづけてきこえてきた。波の音とその声が子守唄のようにきこえた。長い苦痛のあとだけに、この安らかな時間を大切にしたかった。

もう日はおちているようだ。目をあけなくても、気配で感じることができた。船は夜の海上をすすんでいるのだ。

船旅が歩行の旅よりもずっとはやいのは船足にもよることだが、夜間もやすみなく航海をつづけるせいである。ここちよい時をすごしながら、とつぜんお蝶は我にかえった。

男たちのはなし声の中に、〈百次郎〉という言葉がきかれたのだ。まさかとおもったが、またきこえた。

お蝶は耳をすました。勘兵衛と升平とがわりあいちかくで、はなしている。

はじめは途切れとぎれで意味のわからなかった話が、しだいに脈絡がつながってきた。彼等が口にする百次郎という名前は、けっして好意的なひびきを持っていなかった。

お蝶は全身を耳にして、神経を集中した。彼等はお蝶がまだねむりほうけていると信じて、油断していた。

彼等は百次郎の行方についてかたっていた。百次郎と彼等はあきらかに敵として対立する立場にたっているのだ。

話の内容から、百次郎は仲間とともに、大火の夜いらい彼等の一味を追跡して江戸をでたことがわかった。

それと同時に、彼等の話の中に〈中町奉行〉という言葉がひんぱんにでてきた。しかも、その言葉は明確に百次郎とその仲間たちをさしていっていた。

はじめは耳をうたがったが、彼等の会話は疑問をいだく余地のない状態を説明していた。

〈百次郎ら中町奉行一団は、火事場さわぎにまぎれて江戸を脱出した伊達藩、佐竹藩の人質を追跡して、奥州街道と水戸街道を北上して陸奥へむかった〉

おどろくべき事態が彼等の会話から浮き彫りにされた。

（百さんが……）

お蝶は大きな衝撃にうたれた。勘兵衛の素姓をあばくために同行した旅で、おもいがけなく百次郎の正体を知ることになった。

百次郎が駿河台稲荷小路にある天地一心流道場の主人であるというのは、表むきの姿にすぎなかった。正体は中町奉行与力であった。源之助、伝兵衛、金次らは百次郎配下の同心だということも今にしてようやくわかった。

とおり一遍のおどろきや衝撃ではすまなかった。自分がもっともよく知っているとおもっていた男の正体を今はじめて他人に知らされた。

今さらながらおもいあたる百次郎の言動や事柄がぞろぞろとお蝶の記憶の中から浮かびあがってきた。これまでずっと実の親だと信じてきた者がとつぜん養い親だったとわかったようなおどろきであった。

勘兵衛についての謎もとけた。彼が単に奥州米をあきなってきた米商人ではなく、伊達藩ともっとも密接につながっている人物であることも判明した。伊達藩のために江戸市中でさまざまなはたらきをする〈密偵〉だということがあきらかになった。情報を得るために、彼は何年も前から江戸市中に大きな米問屋をもうけて、その主人におさまっていたのである。

伊達藩の用意周到さにもおどろかされた。彼がお蝶にちか寄ってきて、あまつさえ後妻にのぞんでいるのは、任務のためだとわかった。

お蝶の胸ははげしい動悸をうっている。ここにじっとしてはいられぬ気持にかりたてられた。はやくここを脱けださねばとおもった。勘兵衛がしつこく旅にさそったのは、百次郎からお蝶という人質をうばうのが目的であったのだ。

自分が意外にも大きな価値をもっていることをはからずも知った。それを知ったことがうれしかった。だが、このまま船でつれ去られてしまっては、百次郎に大きな打撃をあたえることになる。それは死んでもできないことだ。

小名浜に寄港して大事な荷をつんでいくといった勘兵衛の言葉の意味が明瞭になってきた。

（伊達の人質……）

お蝶はそう確信した。

この船から脱出する機会は小名浜に寄港したときしかないとおもった。

まだしばらくお蝶はねむったふりをしつづけた。闇が幸いしてうたがわれる心配はなかった。

磐城七浦

三日前の朝。百次郎、源之助、伝兵衛、金次は水戸の三里ほど東北にあたる田彦の追分道にいた。

そのまま東北に直進すれば、水戸街道から浜街道へつづき、真北へすすめば棚倉街道から中街道にいたる。ここで一行は立ちどまった。

このさらに二日前、一行は小山から小山水戸街道へわかれて下館に泊り、翌日の夕刻水戸城下について、伊達の人質とみられる二丁の道中駕籠と七人の護衛者の消息についてたずねまわった。

それらしき一行が水戸城下に入ったことまでは、何人かの証言であきらかになった。それで次の朝水戸を出立して田彦まできたのである。

追分のわかれ道のところに、石地蔵が赤いヨダレ掛けをつけてたっている。地蔵は知っている。

（どちらへ行った？）

できるものなら、たずねてみたかった。百次郎らはどちらの道をとるべきか見当がつかなかったのだ。

水戸街道は常陸、磐城の海岸通りをとおって奥州へいたる陸前街道であり、棚倉街道は棚倉から白河をへて奥州街道に合流する。水戸から田彦にいたるまで、百次郎はどちらの道をとるべきかなやみつづけていた。

伊達藩は人質を回収するために、計画を練りにねりあげていた。それはおどろくべきほどの周密さであった。何年、いや何十年にもわたって研究しつくされた跡がうかがえた。江戸市街を広範囲にわたって焼きはらい、何組もの囮をふんだんにつかい、大勢の護衛をつけ、さらに幾たびにもわたる幻惑作戦を巧妙に駆使して江戸の防備網を突破し、ついに水戸の先までいった。

中町奉行は周密周到な彼等の策略のために、完全に後手にまわったのである。これから先も狡智な幻惑作戦が何重にもわたってしくまれているにちがいなかった。

「二手にわかれましょうか」

おもいあぐねて源之助がいった。

それはすぐれた策のようにみえて、けっしてそうではない。どちらが伊達の人質一行においついたとしても、たった二人で敵の精強部隊とたたかわねばならなくなる。

「それはまずい。はずれる危険はあっても、どちらかに賭けねばならん」

逆に百次郎のほうが窮地においつめられていた。

「どちらをとりますか」

伝兵衛がきいた。

百次郎は二日まえから、ある勘がひらめいていた。

「おれは、右へいきたい」

百次郎は水戸街道を指さした。

「浜街道をめざしていったとおもいますか」

伝兵衛はためらいを見せていった。

「いやちがう。一行は海へでるのではないかとおもう。船で奥州入りをねらっている」

「船で……？」

三人とも意表をつかれた顔をした。

三人の反応ぶりを見て、百次郎はかえって自信をふかめた。

「伊達はこれまでも、ずっとおれたちの意表をついた作戦をとってきた。だから今後も、こちらをだしぬく手立てくるのはまちがいないところだ」

海路は本来ならば、もっともすぐれた脱出路である。ところが浦賀と中川の関所を突破するのは至難であるし、鹿島灘の危険海域を計算に入れて、百次郎は当初からこれを除外していた。

ところが、たった一つだけ、関所もとおらず、鹿島灘の難所をもこえずにいける航路があったのだ。

「磐城小名浜まで歩行できて、そこから船でる。小名浜からならば、あとは石巻へむかって海上を一直線だ」

東廻り航路の寄港地といえば、小名浜か常陸那珂湊である。

だが那珂湊は鹿島灘の難所の真っ只中である。ひ弱な女二人の人質を途中から船にのせるには、小名浜いがいにはかんがえられなかった。

「船が小名浜まできて待っているという寸法ですね」

金次がいちはやく態度をかえ、勢いこんだ。

源之助、伝兵衛の顔にもにわかに生気がよみがえっていた。

「最後まで陸路をいくつもりならば、小山から小山水戸街道へ外れるというのはどうしてもうなずけぬ。これは、小名浜へぬけるための迂回だとかんがえるべきじゃないか」

「そうですよ。そのとおりです。百さん、どうしてはやくそれをいってくれなかったんです」

金次ははやくもそれときめてしまった。

「おれとしても、かんがえにかんがえぬいたんだ。きめつけて万一しくじったときは、とりかえしがつかぬ」

百次郎は心中で会心の笑みを浮かべた。

「江戸から仙台まで、陸路半分、水路半分というのは敵ながらあっぱれ妙案をかんがえだしたものですね」

「それを見やぶった百さんもただ者じゃない」

源之助と伝兵衛もこの方法にツユほども疑いをもたなかった。

四人は石地蔵の右手をとおって東北にすすんでいった。

佐和、石神、大橋、守山、下孫、介川、田尻、伊師と水戸街道の各宿場をへて、その夜安良川の宿までのした。一日十四里あるいたことになる。普通の旅人の一倍半の道程である。

翌日も十四里あるいて、とうとうその日の夕方、磐城七浦の一つである小名浜に到着した。

百次郎は源之助を代官所へはしらせる一方、伝兵衛、金次とともにただちに港へ急行した。

この附近は磐城平五万石安藤対馬守の領地である。が、小名浜は天領である。

ここは絶好の地形をもつ天然の良港であり、近在各藩の米の積みだし港としてさかえているばかりでなく、漁港としても繁栄している。ふかい入江になっており、風光もすばらしい。東廻り航路の港と地元漁港とは隣接し、夕闇がせまる中に大型船も漁船も帰港していた。

代官所から、すぐに代官小寺長左衛門が手代数人をひきつれ、馬でかけつけてきた。
「お役目、ご苦労に存ずる」
直参としての地位は小寺のほうが百次郎よりも格上だが、百次郎は特殊任務をおびているので、小寺は十分配慮をはらっていた。さらに緊急事態がおこるやもしれぬとみて、小寺は緊張していた。この僻地の港を舞台にして、天下に大乱をもたらす騒動がひきおこされるかもしれぬと心配しているのだ。
「代官どののお力をおかしいただきたい。大きな鼠が二匹港にまぎれこんでいるやもしれません。逃がしましては大変なことになります」
「できるかぎりの力をつくそう」
小寺はさっそく部下に命じて船積問屋、廻船問屋をあたって寄港中の船をくまなく検分させ、さらに旅籠や商人宿などのあらためをおこなわせた。
ところが、小名浜の港は昔から伊達藩を大顧客としているので、代官所のあらためには時間がかかった。船問屋などはもちろんのこと、水夫、旅籠商人にいたるまで伊達とのつながりのある者は多いのだ。疑わしい船や人質一行はなかなか見つからなかった。
百次郎らも夜を徹して港の見張りと捜索につとめた。だが、暁がちかくなっても手がかりは何一つ見つからず、しだいに焦りをおぼえていった。
四人とも時がたつにしたがい無口になった。百次郎の胸中にも不安がめばえてきた。まったく別の道筋をとおって、人質一行は着実に伊達領にちかづいているのかもしれぬという疑いがお

こっていた。
源之助、伝兵衛らもおなじ不安にとらわれているのがわかった。
しかし一行は疲れも見せずに捜索を続行し、代官所の役人たちも総勢出張って尽力しつづけた。
夜があければ、早朝から船積みや荷あげがおこなわれ、漁船の出漁がはじまる。
「百さん、ちがうんじゃないでしょうか……」
とうとう伝兵衛がおもくるしい口調で口をひらいた。
「うむ」
百次郎はつとめて冷静に応じたが、顔色はなかった。
「それらしい気配が何一つ見られませんね」
伝兵衛のいうことはもっともだった。一行のとおっていった形跡がどこにもないのだ。
百次郎のこころもそちらにかたむきかけていた。ただそれを口にするのは勇気を要した。
もし人質一行が陸路をとおっていたとしたら、いずれの道をとったにしろ、もうこれから追っても間に合わぬ。悠々と追跡をふりきって伊達領内に逃げこんでしまうだろう。
「しかし、まだわからん。そうではないという証しも、何一つない」
百次郎には、まだ水路に執着があった。
「すでに人質をのせて出港したのかもしれません」
「それほど素ばやいうごきができるでしょうかね」

伝兵衛と源之助がいった。

水平線のかなたが早くもうっすらと白んできた。徐々に闇がうすらいできている。はるか沖合をながめる面々の顔に焦躁がうかんでいた。

「どうしよう、百さん」

伝兵衛が百次郎の決断をうながした。

「もうすこし様子を見よう。代官所も力をかしてくれていることだ」

百次郎はどうしてもあきらめることができなかった。彼の勘と思考はいまだに水路を捨てることができないのだ。

半刻ほどたって、夜はすっかり明けた。

そのとき、あわただしい馬蹄のひびきがきこえ、代官所の伝令の騎馬が駆けてくるのが見えた。

伝令は小寺のまえで、馬をとびおりた。

一同は色めきたった。

百次郎はそこへすすみ寄っていった。

「昨夜、二丁の駕籠と数人の侍が海岸道を北へむかうのを見たという漁師がいる。それも四、五人の漁師が見ている」

そういった小寺の顔が緊張している。

「それだ」

百次郎も興奮をおぼえた。

「人目につくのをおそれ、明るいうちはどこかに身をひそめ、夜に入ってからうごきだしたのだろう」

「どこへ？　そう遠くではないはずだ」

百次郎にはすぐには見当がつかなかった。

「磐城七浦……」

小寺がそのときうめくようにいった。

この附近には、磐城七浦とよぶ七つの入江がある。小名浜がいちばん南に位置し、北へむかって永崎、中之作、江名、豊間、薄磯、沼之内といった浦が点々とつづいている。

百次郎は土地にあかるくないので、くわしいことはわからなかった。

「船の出入りする港がそのなかに？」

「江名だ」

小寺はひくくつぶやいた。

「江名……」

「そう、大昔は小名浜にひけをとらぬくらいの港だったそうだ。小名浜が繁昌するようになってからは、まったく影がうすくなって、今では小名浜であふれた船が臨時に入るとか、時化で避難する控えの港としてしかつかわれていない」

「そこだ。やつらはそこから船で」

これで百次郎はすっかり得心がいった。

「ここから一里半。まだ間に合うかもしれぬ。夜間の入港出港はおそらくないだろう」

「代官どの、馬の用意をいたしてくだされ」

百次郎は気負いこんだ。

「ひきうけた。わしが案内いたそう」

「かたじけない」

百次郎はこれでいったんうしないかけた望みをふたたび回復した。くじけかけた勇気と闘志がまた体中にみちてきた。

小寺の命令によって、四頭の馬がクツワをとられてひかれてきた。

さっそく小寺と部下の若者が案内にたち、海岸道を北へむかって疾駆していった。

四人がその後につづいた。

朝日がはるかな水平線からようやくはなれ、さざ波のたつ海面のほとんど全域を黄金色にかがやかせている。まぶしいくらいな光のきらめきの中を、一団はまっしぐらに風のように駆けた。

永崎の浦と竜ケ崎がたちまちのうちにすぎた。

彼方にうつくしい入江がひらけて見える。しずかな港の中に船影がいくつも豆粒のように見えてきた。

その中に人質をのせた船がまだのこっていることを、百次郎は必死でねがった。

入江がしだいにちかづいてきた。

江名は譜代安藤対馬守の領地である。外様領ではないのが、不幸中の幸いである。

入江の手前のほうが漁港で、その先が東廻り航路の港になっている。

港には大型船も停泊している。小名浜とくらべればさびれているのは仕方がないが、天当船級の船も一、二艘見えた。

港の様子をひとわたり見てから、伝兵衛と金次を港にのこして、一行は港役所をたずねた。

藩庁の役人はまだ出仕していなかったが、地元からえらばれている名主の手代が三人ばかりつめていた。

昨夜から今朝にかけての大型船の入港出港の有様をきいた。

「天当船じゃあ、高砂丸が今しばらく前にでていきました」

天当船ときいただけで、

(それだ!)

百次郎は心中でさけびをあげた。

「その高砂丸は?」

「今朝はやく入港し、積み荷をのせると早々にでていきましたよ。伊達藩の雇い船で、升屋の持ち船となっております」

手代は帖面の記載を見てこたえた。

「おそかった!」

おもわず源之助が臓腑からほとばしるような声をはなった。

「高砂丸がどうかいたしましたか」
手代たちも一行のさしせまった様子から、ただごとならぬ状態を察してきた。
「高砂丸がここからのせた荷を見た者はいるか」
「……」
「積み荷に立ち合った者は」
「おりませんねえ」
彼らとしては、積み荷揚げ荷にいちいち立ち合う義務はないのである。船の入港と出港をたしかめれば、それでよい。
「高砂丸に女二人と侍七人がのりこんだとおもわれるが」
念のためにたずねてみた。
「伝馬船が荷をはこんでいったようですが、たしかめておりません」
おもったとおり把握はしていなかった。所詮小名浜の控え港であるから、港役所といってもこんなものなのだ。
相手を責めるわけにはいかぬ。
「高砂丸のほかに、伊達藩ゆかりの廻米船の入港はなかったか」
今度は小寺がたずねたが、彼らの答はやはり否であった。
「ともかく港をまわってみよう」
百次郎はあきらめきれず、源之助、伝兵衛、金次をともなって桟橋へむかっていった。

そして、停泊している船について見てまわった。大型船は二艘だが、いずれも磐城平藩の雇い船であった。
そのほかには二、三百石級の中型船が見えるが、このていどの船では東廻り航路を乗りきるのは困難である。まして奥方や母公を乗せられぬ。
伝馬船が何隻ももやっていた。沖ちかくに浮かぶ大型船と陸との荷の揚げおろしに行きかする艀船である。
ひとわたり見まわって、桟橋からひきあげようとしたとき、
（……？）
前方の伝馬船の中で荷の雨覆い用の大きな敷布がうごいているのに百次郎は気づいた。
船の中に人影は見えぬ。それなのに敷布がしきりにうごいている。
百次郎は立ちどまって、じっと見つめた。
伝兵衛も源之助もそれに気づいて、顔を見合わせた。
「何ですか、あれは」
源之助が小声でいった。敷布の下に生き物がもぐりこんでいることはまちがいない。
「取りおさえろ」
百次郎が小声で命じた。
源之助は無造作に桟橋から、三つ手前の伝馬船へとび乗った。そしてつぎつぎに伝馬船を乗りうつって、例の船へ乗りこんだ。

桟橋にのこった三人は息をつめるようにして見まもった。
源之助は数瞬、様子を見まもってから、敷布に手をかけ、一気にそれを引きはいだ。
かすかな悲鳴がきこえた。
敷布の下には、若い女が身をちぢめるようにしてうずくまっていた。女は旅の装いをしているので、土地の者でないことはたしかであった。
「女、なにをしているんだ」
源之助が声をかけた。
女がおびえながら身をもたげ、首をあげた。
百次郎はその女の白い横顔をながめた。そしておもわず凝視した。
(まさか……?)
とおもったが、まちがいはなかった。
「お蝶じゃないか!」
百次郎の声で、伝馬船の中の女がはじめて桟橋にいる三人に気づいた。
「も百さんっ、百さんじゃないの!」
悲鳴にちかい甲高い声をあげた女は、お蝶にまちがいなかった。
「おまえ、どうしてこんなところに」
ときいたが、すぐには答えはかえってこなかった。
「いろんなことがあったんです」

お蝶は泣きだしそうな顔でとりあえずそういうのがやっとだった。
百次郎もお蝶との奇遇におどろいた。
「どうやって、こんなところにきたのだ」
あらためてたずねると、お蝶はようやくおきなおって、安堵で気おちしたか、胴の間にぺたりとすわりこんだ。
「高砂丸という升屋の天当船で銚子をでて、江名の港に入りました。伊勢町の常陸屋勘兵衛についてきたのです。あぶなく人質にとられるところでした」
お蝶の返事で百次郎はことの経緯を大体読みとおすことができた。
「おまえ、よく逃げだすことができたなあ。おまえを人質にとられては大変なことになるところだった」
百次郎は感嘆を禁じえなかった。
「高砂丸は早朝ここで、伊達藩の人質と護衛の侍たちをのせたほか、見せかけのために荷を伝馬船で積みこんだのです。わたしはみんなの目をかすめ、この伝馬船に必死でもぐりこんで高砂丸から脱出しましたが、用心のために半刻ばかりかくれて様子をうかがってたのです」
百次郎はお蝶の言葉に大きなおどろきをうけた。

白河越え

奥州白河——。

太古、蝦夷の南下にそなえるために、白河の関が関東と奥州の関門としてもうけられた。白河以北はさいはての道の奥（陸奥）。ここから先には遠い異国がある。

そこには昔、中央の政治にしたがわぬ〈まつろわぬ、荒ぶる人々〉が住んでいた。そのためにくりかえし征伐の軍が白河の関をこえて、北へ北へとすすんでいった。

都をば霞とともに立ちしかど
　秋風ぞ吹く白河の関

能因法師が歌ったように、かつては霞とともに春の都を出立しても、秋風が吹くころでなければ陸奥にはたどりつかなかった。

今ではこの地も徳川の幕藩体制にくみこまれ、北端の津軽、南部らの諸藩も江戸への参勤交代をおこなっている。気候は寒冷であるが、新田開発と農業技術の発達によって、仙台や庄内に全国有数の穀倉地帯がきりひらかれている。が、白河以北の地域が〈道の奥〉であることは今も昔もかわりない。

そこから先につづくところは、〈秘境〉といってもさしつかえない。

この関門にある白河藩は、幕府が奥州にたいしてもうけた関所であり、鎮台である。この鎮台の守将こそ、昨年までの老中首座松平越中守定信である。

かつて白河の関があったところは古代東山道であって、現在境の明神があり、奥州街道から一里以上はなれている。

この奥州街道をとおって、今日の昼前、白河城下に入った二人の行商人と女一人がいる。反物類と唐薬をあきなう行商人である。女も荷を背負っており、若いほうの男と夫婦である。

春から秋にいたるあいだ、奥州各地には、関東ばかりでなく近江、上方各地からも反物や薬種をかついで売りにくる行商人の姿がよく見られる。

三人は城下の旅人宿に部屋をとった。百次郎と伝兵衛、お蝶である。

一昨日、わずか四半刻（三十分）ほどのおくれで伊達の人質をのせた高砂丸をとりにがし、とうとう奪還は不可能となってしまった。一行は所期の目的を断念せざるをえなくなり、それと同時に今後あらためて伊達藩への対応をせまられたのだった。

幕府は伊達藩にたいする最大の強みをうしなった。

伊達藩の対応がかわってくることも予想された。幕府も猶予しておられぬ状況にたちいたった。

百次郎は伊達の領国潜入を決行せざるをえなくなっていた。伊達の本国へ潜行し、陰謀の確証をあばき、外様六藩の謀叛をついえさせる工作をおこなわなければならなかった。

源之助も金次も奥州入りを熱望したが、四人の動向は途中まで敵方によく知られている。今後も四人で行動をつづければ、遠からず伊達藩の知るところとなる。

それで二人往って、二人もどることに決した。江戸での伊達の動向をさぐることも大切な任務であった。源之助と金次が江戸をうけもつことになったのである。

百次郎と伝兵衛とお蝶は鮫川ぞいに御斎所街道を十数里のぼって、白河についたのである。伊達領入りをするに先だって、百次郎はぜひとも越中守定信に会っておきたかった。

定信は先月（三月）下旬に帰国して、まだ間もないころである。

お蝶をともなったのは、彼女が奥州の地につうじていて、何かと役にたちそうなことと、夫婦の行商人をよそおって敵方の目をくらますためである。それには白河へ入るまえから変装したほうが効果があるとおもわれた。

「ではちょっと、城下をひとめぐりしてきます」

伝兵衛は宿につくとすぐ、荷をかついででていった。

それから一刻もたたぬ間に、もどってきた。

「連絡がつきました」

伝兵衛はこともなげにいった。

「うむ」

百次郎は内心伝兵衛の早わざに舌をまいた。

「今夕暮れ六つ、越中守様は番士小路から寺小路をぬけて時鳥山を散策なさるそうです。そこでお会いくださるとおっしゃいました。場所の下見はいたしてまいりました」

伝兵衛は白昼白河城に潜入し、本丸へしのびこみ、定信とじかに会話をかわすというはなれ技をやってきたのである。

「越中守様はお達者か」

「血色すぐれ、壮気が体にみなぎっておられました」

百次郎は昨年七月、浴恩園で茶を振舞ってくれた定信の面影へおもいをはせた。定信が先月八年ぶりに帰国したのは、伊達を盟主とする奥州外様六藩の大陰謀を身をもって阻止せんがためである。公職をすべて投げ捨てて、定信は僻遠の白河にもどってきたのだ。

日が暮れかかるすこしまえ、百次郎と伝兵衛は行商の荷をかついで、旅人宿をでていった。

白河の城下は、阿武隈川を背にした城の南方にひらけている。

番士小路は城下の東方にあたり、この小路をぬけていくと八百屋町、東前町がつづき、そこをすぎると寺小路の入口にいたる。この小路の西北方に専念寺、長寿院、永蔵寺、大統寺、山王寺が境内をならべている。

小路に人通りはすくなかった。

僧が二人とおりすぎた。百次郎と伝兵衛とうしろから野良がえりと見える百姓があるいてくる。

やがて小路がきれ、後方に丘陵が見えてきた。麓に鳥居が見える。

「あれが時鳥山です」

伝兵衛がいった。

その麓にあるのが雷神神社である。その境内一帯は見晴しのよいところで、散策などにはもってこいの場所になっている。

「百次郎、ひさしぶりじゃ」

そのときとつぜん後ろから声をかけられた。

百次郎はふりかえって、

「あ……」

声をもらした。

声をかけてきたのは、さいぜんから後ろにいた百姓である。

「越中守様、気がつきませず、ご無礼をいたしました」

百次郎は恐縮し、その場に膝をつき、さらに手をつこうとした。

「この境内の裏に、お城の用地があり、わしが畑をつくっておる。ときたまやってきては、畑の世話をしている」

定信はにこにこしながらかたりかけてきた。軽衫に筒袖、道衣をきている。足もとは草鞋である。どう見ても大名の姿ではない。近習も若党もつれていないのだ。

「殿様が畑仕事を……」

あきれて百次郎がいうと、

「なに道楽じゃ」

定信はそういってわらった。道楽であるとともに、定信の畑づくりには領民への農業奨励の意図があるのはあきらかである。

定信が襲封したのは未曾有の大飢饉が奥州全域をおそった今から十一年まえ、天明三年の秋だった。そのとき定信は藩庫の金をだしつくし、その上幕府から借金までして他領の米を買いあつめて領民たちにわかちあたえ、領内から一人の餓死者もださなかった。

その年伊達藩で四十万人、津軽藩で三十万人の餓死者をだしたのにくらべて、定信の藩政がいかによくいきとどいていたかの証拠である。現在も定信は率先して、農業奨励の垂範をおこなっているのだ。

「越中守様にきびしい下命をこうむりながら、伊達藩の人質をついにとり逃がしてしまいました。合わせる顔もございません。切腹をいたしたとても責めをまぬがれぬところでございます」

百次郎はあらためて詫びを申しあげた。

「伊達は何十年も、いや百何十年もの厄大な年月をついやして幕府への反抗を目論み、策謀をねりあげていたのじゃ。人質の奪還についてもその方法を長年かんがえぬいて、ついに成功させたのであろう。それをふせぐのはよほどの難事じゃ。佐竹の人質についても、ほぼおなじことがいえよう」

定信はそういって逆に慰留してくれた。が、佐竹の人質については百次郎の解せぬところであった。

「佐竹の人質はうばいかえせたのではありませんか」
「一時そうつたわったのはまちがいじゃ」
定信は意外なことを口にした。
「まちがいでございますと？」
「松戸の関所において、長持にひそんで関所やぶりをはかったのは囮だった。本物の人質は商人の女房に身をやつして、そのすぐ後ろにいた模様じゃ。長持抜けでさわぎたつなかを関所やぶりして逃げ去った。囮のまた囮をつかったのじゃ」
「囮の囮……」
「杉村三太夫が追っているが、まだつかまったという情報は入っておらぬ。手おくれであろう」
「左様でございますか」
「相手は知恵をしぼりにしぼりぬいたのじゃ。残念至極だが、後手をふんだのもいたしかたない」
定信は失敗や一時の敗北にこだわりを持つ人物ではなかった。敗北は敗北とみとめたうえで、つぎなる手立を着々とうって、失敗をとりかえしていくまさに将たる器を有していた。
「上杉、南部、津軽らはいかがいたしましたか」
「上杉はべつとしても、ほかの南部、津軽、二本松らはいずれも人質の脱出を決行できなかった。中町奉行の守りが固かったと見るべきだろう。伊達、佐竹が成功したとしても、六藩の足並は確実にみだれる」

定信はそれほど悲観的な見方はしていなかった。
時鳥山の麓をあるきながら定信は言葉をつづけた。
「人質はあくまでも人質にすぎぬ。戦の勝敗はべつのところにある」
「はっ」
「双方の戦力と作戦のいかんで、ほぼ勝敗はきまる。奥州外様六藩がかりに手をむすんだにしても、今までの力ならば幕府に対抗すべくもあるまい」
「今までの力ならば……」
「左様じゃ。伊達が幕府とことをかまえようというのは、これまではなかったなんらかのつよい力がくわわったからだと見るべきであろう。勝敗はその力がどれほどのものかによってきまる」
定信の論旨は明快である。百次郎も異論がなかった。
「これより伊達領内に潜入し、その力がいかなるものかとくと見きわめてまいります」
「うむ」
定信はうなずいた。彼もまた、伊達領潜入の時機を今とみているのだ。
「伊達領潜入をまえにして、一つうかがいたきことがございます」
定信の眸から目をそらさずに、百次郎はいった。
「申してみよ」
「伊達藩のごく内密の重大な情報が以前から越中守様のお耳に入っておるやにうかがわれます。いずこから入りますのか、さしつかえなくばおおしえねがいとうございます」

百次郎は情報の経路ないし源についてきいたのだ。これは極秘を必要とする事柄だ。これを問うことが僭上の極みであることを百も承知であった。

さすがに定信は沈黙した。

百次郎としては、これがききたいばかりに江戸からわざわざ白河まで迂回したのである。

そもそも、伊達を中心にする奥州の外様勢力に不穏のうごきがあると最初に幕府側で知ったのは、定信本人であった。その後もいろいろと重大な情報が定信をつうじて中町奉行にもたらされた。

定信はあきらかに困惑した様子である。

「伊達の領内をな、最上川がながれておる。最上川の支流じゃ。その川からながれてきたというておこう」

定信は沈黙をやぶっていった。

「は……？」

百次郎はただちにはその言葉の意味を理解することができなかった。第一、伊達領内には最上川の本流はもちろん、一筋の支流もながれていないのである。

百次郎はしばし思案をこらした。

「もう一つ、おしえておこう。その最上川の支流から奥州六藩盟約の神文誓紙の写しとおぼしきものがながれてきた。ここまではこんでまいったのは、わしの近習東郷松之助という者じゃが、それは偽物とみえて、花押がなかった」

「連判状……」

「ほうっておけば、最上の支流は水をせきとめられて、川を涸らされるおそれがある」

「左様でございますか」

百次郎はまたかんがえこんだ。六藩の盟約がある以上、連判状があったとしても不思議はなかった。あって当然、なければならぬ。

「今は屋敷の周囲に竹矢来で柵をこしらえられて封じこめられておる」

「命の危険に見舞われておるのでございましょうか」

「そのようだ」

「最上家の庶流とおぼしきその人物、意図はどんなところにあるのでございましょうか。信頼いたしてさしつかえありませぬか」

すこしずつ定信のいうことがわかってきた。

「まだたしかなところはわからん。信頼できるかいなかは、五分五分であろう。若いが、なかなかの野心家と見える。人格、識見、器量、気魄いずれもなかなかながら、油断はできぬ」

「一度会ってみたくなりました」

にわかにその人物にたいする興味をかきたてられてきた。はじめて耳にした人物であるが、重大な鍵をにぎっているようにおもわれた。

すでにほろんだ奥州の名家の血統にも興味をおぼえた。奥州外様六藩にたいして、最上家がどうかかわっているのか、それについても明かしていかねばとおもった。

「その人物の妹が、今わしのところにおる」
「人質ですか」
「その人物がおくってまいった。伊達においておくのがあぶなくなってきたためでもあろう」
「幕府と伊達をハカリにかけているのではありませんか。どちらへころぶかわからぬ危険がございましょう」
百次郎は直感でいった。
「最上左近義季という。伊達藩で二千石食んでおる。腕もあれば、知恵も度胸もある。そのうえ野心もなみなみでない。伊達の手でみすみすころしてしまうには惜しい男じゃ。東郷松之助はしばらくともにくらして、いささか心酔いたしておる」
かつての奥州の有力大名最上家が元和年間に、家中の内紛から断絶になったことは百次郎も知っている。そのころから最上家がかかわりを持っていたのだとすれば、今回の奥州外様の陰謀の起源は、遠く元和のころにまでさかのぼっておこなわれていたことになる。
気の遠くなるような歴史と時の流れを有している。百次郎は奥州が生んだ不世出の英雄伊達政宗へおもいをはせた。
百次郎はさかのぼったにしても、たかだかこの十余年ないしは数十年前からのこととおもっていた。それが大きくくつがえることになる。
奥州にとっては、それがいつかはやらねばならぬ必然性をもった行動なのだということが感じられてきた。

もしこの百数十年以上の経過が本当だとするならば、陰謀の本来の盟主は政宗にいきつくのである。今までの想像をはるかに上まわる根のふかい、また巨大なひろがりをも有する事態であった。
それがわかっただけでも、白河まで足をのばした甲斐は十分あった。
「奥州へ潜入いたし、できるならばこの陰謀の根を断ち切ってまいりたいとおもいます」
百次郎はあらためて申しのべた。
「おまえのはたらきをたのしみにしておる。兄の二の舞いはふむな」
定信は千太郎のことをさりげなく口にした。定信も千太郎のことを知っていたようだ。
「はっ、承知いたしております」
おもわず背筋をただしてこたえた。
百次郎は兄の死にざまをたしかめてくるつもりである。兄の最期の有様をきわめていくことは、伊達の巨大な陰謀をさぐる大きな手がかりになるような予感がしていた。終焉の地をおとずれるだけでも、兄の菩提供養になることであった。
「百次郎、かならず生きてもどってこい」
薄暮がしだいに濃い夕暮れになっていく中で定信はいった。
「きっと生還いたすつもりです」
百次郎は力づよくこたえた。
時鳥山からは白河の北方須賀川、郡山二本松をはるかにのぞむことができる。そのさらに北

方は伊達領である。

佐竹、南部、津軽などはそのもっと北方の地につづくのである。そしてそこは文字どおり本州のさいはてとなる。

毘沙門島

（……！）

丸い視界の中に、かすかに黒いものが見えた。一度それは視界の外に消えたが、すぐに今度は輪郭のよりはっきりした島影が浮かびあがった。

周囲に見えるのは紺碧の海と空ばかりだ。その無限の広がりの中に、くっきりと故郷伊達領の島が姿をあらわした。

「見えたぞ！」

新庄津太夫が望遠鏡から顔をはなすと、腹心の若松秀之進がそれをひったくるようにしてとった。

「見えました。金華山の沖合いのようです」

若松が感きわまった声をあげた。

「毘沙門島だ。まちがいない」

津太夫は航路に自信があったので、確信をもってこたえた。

二人の声をききつけて、甲板に日本人が三人駆けあがってきた。ほかの乗組員らもあわただしく寄ってきた。

毘沙門島は金華山の北北東十浬ばかりの海上にある、五町の広さをもつ島である。

津太夫らの周囲にある顔はいずれも紅毛碧眼、鼻梁の高くとがったオロシア人ばかりだ。彼等は通詞以外は日本語はわからぬ連中だが、言葉の意味はつうじたとみえて、わっと歓声をあげた。

津太夫一行が八百石の藩有船〈陸奥丸〉に乗船して石巻を出航し、オロシアへむかったのは昨年十一月だから、半年ぶりに目的を達してかえってきたことになる。

現在津太夫らがのっているのはオロシアの軍艦ナディア号である。艦長アダム・ラックスマンにひきいられている。

陸奥丸はオロシア領アヤン近海で座礁して大破し、乗組員の大半は波にのまれて行方不明になった。津太夫と若松のほか三人の乗組員がようやくアヤンに漂着し、伊達斉村と片倉小十郎の親書をたずさえ、ラックスマンをたずねてオホーツクさらにヤクーツクを経て、今年の春ようやく首都ペテルブルグに到着した。ここでラックスマンに会い、再会をよろこび合い、歓迎をうけた。

ラックスマンの尽力でエカテリーナ皇帝にも面謁し、斉村と小十郎の親書を手わたすことに成

功した。皇帝は当初は幕府との公式の通商貿易をのぞんでいたが、幕府がそれを希望していないと知って、伊達藩との秘密貿易を諒解したのであった。

ラックスマンと津太夫との話し合いはとんとん拍子にはこび、双方が秘密条約の条項について検討し合ったすえ、締結に合意したのであった。条約締結の場所は、伊達藩牡鹿半島の沖合いにある毘沙門島ときめられた。そしてラックスマン自身が全権大使となって千九百トンの軍艦ナディア号を指揮して、津太夫らをともないオホーツクを出航したのである。

時候は五月の夏である。津太夫と若松のほか村野房太郎、望月安兵衛、柏木重四郎、五人の一行は行きの陸奥丸にことなる偉容をほこるオロシア軍艦とともに故郷にもどってきた。乗組員の大半と陸奥丸をうしなったが、渡航の目的は十分はたしての帰国である。エカテリーナ皇帝から伊達斉村、片倉小十郎への親書と進物も積みこんでいる。

一行はオロシア乗組員らとともに喜びに沸きかえった。島影は徐々に濃く、大きくなってきた。

この海域にはまったくといっていいほどほかの船影は見えなかった。東廻り航路はもっと外洋を航行し、伊達藩領の漁船は古来、毘沙門島附近にはちか寄らぬ習慣があった。危険海域ではないが、地元の船はこのあたりをおそれてちか寄らぬ。

島は瓢のような形をしており、中央部がくびれている。島岸は怪石奇岩がいたるところに屹立、突出しており、容易に船の接岸をゆるさないが、本州にむいた西岸の中央部のくびれた岸辺が入江になっている。そこに天然のふかい洞窟、岩屋がある。岩礁をたくみに避ければ、この入

江に船をつけることができる。

この岩屋の奥に、かつて伝教大師最澄が京都出雲寺安国院において刻んだ毘沙門天像がのちにうつされて安置されたといういいつたえがある。島の名はこれに由来する。

毘沙門天は、十二天の一つ、また四天王の一つで、黄金色の身体、忿怒の相をもつ武神であり、甲冑を身につけ、片手に宝塔をささげ、片手にいかめしく鉾を持つ。須弥山の中腹北方に住し、北方世界を守護している神である。地元民がこの島にちか寄らぬのは、北海の守護神をおそれうやまってのことである。

あやまってちかづいた船は岸から突きでた大石や岩にぶつかって転覆し、波にのみこまれ、ふたたび浮上しないといわれている。島には昔建立された毘沙門堂が一宇あるほかに何もない。むろん住人もいない。

オロシアと伊達藩との秘密条約の場所としてここがえらばれたのは、条約の趣旨からしても紅毛碧眼の異人が人の目にふれることをさけたためである。

ナディア号は毘沙門島へちかづいていった。

「とうとうもどってまいりましたなあ。無事にかえってこれるとはおもっておりませんでしたが」

若松秀之進が感きわまって津太夫を見つめた。

「おれは、十中八九はもどってくるつもりでおった」

津太夫がこたえた。

彼の目的とするところは今後の密貿易推進にあるのだから、往きてもどらずの覚悟では駄目なのである。その後で条約締結をおこなわなくてはならなかった。その意味で津太夫の任務はまだ半ばをおえたばかりであった。

「女川はどうなっているのでありましょう」

津太夫らが昨年出航した十一月の段階で、伊達藩の秘密貿易港は女川にさだめられ、築港の準備が急速にはじめられていた。

女川は牡鹿半島のつけ根の部分にあり、湾内の石巻と反対に、外洋に面している。伊達藩の海の玄関の真裏にあたり、深い入江になっていて、岸の水深もふかく、大型船でも容易に接岸できる。しかも地形は三方を山でかこまれ、一面に海がひらけた密貿易港としてはもってこいの条件にめぐまれている。

入念な実地踏査の結果、女川がえらばれ、工事がすすめられていた。

「順調にはこんでいるならばもう八分どおりできあがっていなければならない。わが藩はなによりも密貿易をいそいでいる。条約さえむすばれれば、港は完成していなくても、とりあえず貿易ははじめられる。条約の締結が先決だ」

津太夫は一昨年来、不撓不屈の頑張りによってとても不可能だとおもわれた難事をつぎつぎにやりとげてきた。その自信が彼をいっそうたくましく、力づよい人間に成長させていた。

「あんな何もないところに外国貿易港ができるとは、まるで夢のようです。はやく見たいものです」

若松は津太夫にしたがって、昨年、金華山、女川、追波、志津川、本吉、気仙沼などの伊達藩東北部の海湾をことごとく踏査し、測量をかさね、女川の秘密貿易港完成予想図まで知悉していながら、それが実現されることがなかなか信じられぬ様子である。

「がらりと様がわりしているだろう」

「伊達がオロシア貿易に成功すれば、佐竹、南部、津軽らもひとしくこれにならうでしょう。六藩連合は実際上はオロシア貿易によってうごきだすでしょうから」

「この貿易が成功すれば、わが藩ははかり知れぬ力をもつことになる。ほかの外様雄藩がだまって見ているはずはない。奥州を中心にしていや応なく天下がうごきだすだろう」

「左様でござりましょう。それなればこそ、わたしどもも決死の旅をつづけてきたわけです」

「このうごきが奥州全域に光明をもたらすことをねがっている。奥州はみずから力をやしなって、生まれかわって自分たちの世界をきりひらいていかなければならない。政宗公がかつていだいた壮大な奥州の夢がかなえられるといいのだが」

津太夫は寒河江兵部から命をこうむっているが、片倉小十郎を信奉する者である。政宗の夢と野望は現在小十郎によって継承されている。津太夫が小十郎を信奉する最大の理由がそれである。

幕府の圧力や天明の飢饉などにびくともしない国づくりをおこなうのが津太夫の理想であった。遠大な理想であるからこそ、彼はどんな艱難にも耐えぬくことができたのである。

「ツダユー、おめでとう。あなたの壮図はついに達することができた。漂流にあらずして、この

国からオホーツク海をこえてオロシアにいたり、皇帝に面謁して故国にもどってきたのはツダユーが最初であろう。あなたはじつに意志がつよく、また運にもめぐまれた偉大な人だ。後の世まで偉人として名をのこすだろう」

ラックスマンが大股に甲板にやってきて、津太夫に握手をもとめた。

「ラックスマン、有難う。好運もさりながら、わたしの旅が成功したのはあなたの大いなる助力があったからだ。あなたには感謝しきれぬくらいの借りがある。伊達藩はラックスマンに感謝しなければならない」

津太夫は日本人としては背丈も肩幅も胸の厚みも十分あるが、ラックスマンと向き合うと、首一つぶんだけ高さがちがう。津太夫は上をむいて、ラックスマンとがっしりと握手をかわした。

「日本人にツダユーのような闊達、英明な人物がいて、わたしは本当に幸いだった。ツダユーがもしいなかったら、オロシアと伊達藩は手をむすぶことができなかったかもしれない。おそらく日本の国にちいさな窓の一つもあけられなかっただろう」

ラックスマンは一昨年、根室、松前、箱館においてさんざん幕府役人の優柔不断な態度に泣かされてきたので、津太夫の積極果断な態度や性格に無上の好感をいだいているのである。

「わたしのほうこそ、ラックスマンに会えてはなはだ幸運であった。もしあなたがいなかったらわたしの旅は成功しなかっただろうし、秘密条約の話もまとまらなかったであろう。今後ともにわが藩とオロシアのためによろしくおねがいしたい」

二人は一昨年いらい、それぞれ国益と立場をことにしながらもおたがいの人物を尊敬し合って

いた。

ナディア号の船足ははやい。旧式の日本船になれた津太夫には蒸気と巨大な帆によって快速ではしるオロシア船の船足にはいまだに目をみはるおもいだ。

毘沙門島の奇怪な島影がまぢかにせまってきた。

津太夫もこの島にちかづくのはこれで二度めである。昨年、出航以前に寒河江兵部とともに条約締結の予定地としてはじめて上陸し、島の内部を踏査したのであった。

岸の岩に外洋の大波が打ち寄せ、音をたててくだけ散る光景には人や船を寄せつけぬ凄絶さがある。海上にせりだした大岩の形といい、山のようにうねる波、飛び散る波しぶきの荒々しさには大自然の威容があった。ちかづいていく島影にはとても船を寄せつける岸は見えなかった。

ナディア号は毘沙門島の北岸をかすめ、やや船足をおとして迂回した。そして船首を左にまげ、船体をゆっくりと半回転させていった。

島の背後へまわると、風景が一変した。岸に突きでた岩々の光景はつづくが、波は湾内をおもわせるようなおだやかさになった。

瓢の形のふくらんだ部分からくびれた所へちかづくにしたがい、波はいっそうおだやかになった。洋上を吹きわたっていた風もやんだ。前回上陸したときにもおどろいたが、これが天地自然の妙なるところだ。

岩や石の隙間をぬって松の木がうつくしい姿を見せている。船はゆっくりと入江に入っていった。外洋から見るかぎりでは、裏側にこんなしずかな入江がひらけているとはおもいも寄らぬ。

一つ目前にたちはだかる大岩の背後へまわると、その先に洞窟が黒い口をあけていた。洞窟には波しぶきが散っているが、その横手に小船をつけられるような岸があった。

「ビシャモン島です。ここでオロシアと伊達藩の条約を締結いたします」

津太夫がいうと、

「ビシャモン島……、サムライの守護神をまつる島ですね」

ラックスマンは敬虔な眼差を島へむけた。見る者をおのずから厳粛な気持にさせるおごそかで不気味な雰囲気につつまれている。

「神聖な島として昔から人々にあがめられ、おそれられており、ちか寄る船はありません。秘密の条約をむすぶにはもってこいの場所でしょう」

ラックスマンばかりでなくナディア号の乗組員らはみな甲板にでて、怪石奇岩におおわれた島に近寄りがたい眼差をむけていた。

「いかにもそれにふさわしい」

「前もって下見なさる意向があれば、わたしがご案内いたします」

津太夫がいうと、ラックスマンはしばしかんがえてから首を横にふった。

「上陸するのは条約をむすぶときで結構です。わたしどもはこの入江で伊達藩の責任者片倉小十郎どのがまいられるのを待っておりましょう」

警戒したわけではないだろうが、ラックスマンはそれを最上の方法とかんがえたようだ。

「ではわたしどもはここでナディア号からおろしてもらい、女川をへて仙台へもどって藩庁に旅

の報告をいたしてまいります。条約締結は一日もはやくおこなわれるようにいたします」

津太夫はラックスマンに自分たちの下船を要請し、小船をおろしてもらった。

「われわれはここに錨をおろして、ツダユーからの連絡を待っていよう。では、幸運をいのる」

握手をかわし、津太夫、若松、村野、望月、柏木の五人は小船に乗りこんだ。海上からあおぐとナディア号の甲板は見あげるばかりに高く、そこで手をふる乗組員らは石ころのようにちいさく見えた。

小船は村野、望月、柏木らが漕ぎ、海上を一路西方めざしてすすんだ。舳先のむかう彼方の陸地が女川である。毘沙門島からは十浬西方にあたる。

途中海上の左手に江ノ島列島（江ノ島、二股島、平島、足島、笠貝島）の島影が見えた。このあたりからようやくぽつぽつと小さな漁船や帆前船が遠くに見えてきた。

さらに漕ぎすすんでいくと北方に出島の四子ノ崎、南方に牡鹿半島の東端寄磯崎がほとんど同時に見えた。四子ノ崎、寄磯崎がいわば女川湾の両門にあたる。

海猫が群をなしてしきりに洋上を翔んだり、水面をかすめている。このあたりに海猫の棲息地があるのだ。猫に似た特有の声がかまびすしい。

小船は湾内に入っていった。湾は相当な広がりを持っている。湾の奥行きは四浬余、湾頭は二つにわかれ、西北に深くくいこんだところに女川のちいさな漁港がある。

風波を避けるによく、水深も十分にある良港であり、漁民数十戸が生計をたてていた。ひっそりとした小さな漁村であった。

船は女川にぐんぐん入っていった。昨年踏査したときとまったくちがう光景が見えてきた。背後の山々が海岸のすぐちかくまでせりだしてきている地形や周囲の風景はおなじながら、港の光景が変貌をとげていた。

「ずいぶんかわりましたね。まちがえてちがう港にきたみたいです」

若松が声をあげた。

「大分工事がすすんでいる様子だ」

港とはいっても以前は貧弱な漁港にすぎなかったが、今は大船が接岸できるよう本格的な波止場づくりがさかんにおこなわれている。以前の面影はなくなっていた。

工事のための大型船が何艘も錨をおろしている。大勢の工事人夫たちのうごきが豆つぶのように見える。築港工事が順調にすすんでいる光景である。

「完成はもう間ぢかとおもわれますが」

「よくここまできたものだ」

測量や港の設計図は津太夫自身がやったものながら、故国にもどってくる早々目のあたりに完成途上の光景を見て、さすがにおさえきれぬ感動をおぼえた。

津太夫の計画では数十戸の漁民たちをそっくり他所へうつして、そこに大きな倉庫を建てならべ、役務にたずさわる役所をもうけ、荷役人夫の住居、いずれはオロシア人の居留地をも建設することになっていた。

女川が秘密貿易港として最終的にえらばれたのは、太平洋岸にあって、なおかつ牡鹿半島の裏

側にあたっていること。人目につきにくく、船の航行もすくなく、良港ながら港としていまだにひらけていないところに最大の理由があった。さらに伊達藩の海の玄関石巻とは一山こした裏側に位置し、その上仙台城下からもちかいこと。陸路からは山をこえなければ女川へ入れない、陸の孤島といった地理的条件。これらが相まって、女川を秘密貿易港と決定するにいたった。

寒河江兵部はみずから月のうち数日は、女川へ足をはこんで工事を督励することになっていた。

津太夫一行の小船が港へむかうと、ただちにむこうから藩の船が数隻水すましのように漕ぎ寄せてきた。彼等ははじめて見るオロシアの小船に奇異の目をむけていた。

「何者だ！」

それは工事の秘密をまもるために、外から入ってくる船をふせぐ見張船であった。

「新庄津太夫だ」

津太夫はみずから名のった。いずれも藩の船手組の者たちであった。

津太夫はこの工事の責任者である。船手組の者や築港にたずさわっている者たちは、津太夫がオロシアにむかって旅だっているものとおもっていたのである。

「どうぞ、こちらへ」

見張船は港へ、津太夫らの小船を案内していった。

にわかづくりの桟橋へ津太夫らは上陸した。工事には千人以上の者がしたがっている。波止場や道路の構築、役所や倉庫の建築などが同時におこなわれていて、力づよい槌音が方々からお

こって活気をはらんでいた。

作事奉行太田政右衛門がでてきて挨拶をした。

「よくご無事でおかえりくださいました。おめでとうございます。工事は当初の計画どおりにはこんでおります。今のところなんの障害もおこっておりません」

という報告がもたらされた。

「むつかしい工事をよくここまですすめてくれた。役目ご苦労に存ずる」

自分が設計したとおりに貿易港ができあがりつつあることを津太夫はよろこんだ。今までほとんど世間に知られていなかった小漁港がにわかに奥州最初の外国貿易地に変貌しようとしている。陸の者からすれば、山をこえたむこうにある陸の孤島に忽然と貿易港が出現することになる。

いずれにしろはじめてのこころみだけに、この成否に伊達藩の将来の運命がかかっているといえた。

地元の漁民たちはそっくり移動しており、彼等が先祖代々住んできた跡形はなくなっていた。

津太夫一行は太田政右衛門の案内で各工事を一つ一つ検分していった。いずれもすこしの手抜きもなく着実にはかどっていた。

ちかい将来、この湾内の港に大型のオロシア船が出入りし、商館ができ、輸入、輸出がさかんにおこなわれる光景を想像すると、まさに夢のようであった。この貿易によって伊達藩が変容し、奥州全体が変貌していくとおもえば、この事業に命をかけたことも悔いはなかった。津太夫は感動を胸に秘めて、工事場を一つ一つまわっていった。

「この月いっぱいには、大体の工事は完了いたす見とおしです」

「みなが一生懸命にやってくれたたまものだ」

「そうおっしゃっていただけると、ここではたらいている者一同大きなはげみになります」

「伊達藩と奥州の将来がかかっている。あと一息がんばってもらいたい」

津太夫は工事場を見おわってから、ふたたび小船にのった。

そして湾内をでて、金華山瀬戸をぬけ、洋上を一路仙台へむかった。

梅雨の明けた五月下旬の朝、牡鹿郡洋上の毘沙門島の西側入江に、竹丸に二羽雀の伊達の家紋を入れた白幔幕がぐるっとはりめぐらされ、大小種々の軍旗が朝日をあび、海の風をうけて美々しくはためいた。

幔幕の中にはにわか仕立ての接待所がもうけられ、緋毛氈をしきつめ、金屏風をたてまわし、その左右には家紋を入れた紫の幕がかかげられた。その前に床几がいくつもならべおかれ、中央に伊達藩八代目藩主斉村、白石城主片倉小十郎の両巨頭を筆頭に、寒河江兵部、鈴懸主税助、遠藤対馬守らの奉行が顔をそろえ、近習、近臣たちがしたがっていた。

幔幕の外には馬廻、鉄砲組、槍組、弓組らが緊迫した雰囲気のうちにひかえている。新庄津太夫は寒河江兵部のかたわらに立ち、そのうしろに若松秀之進が立っていた。

五つ半（午前九時）をまわったころ、ナディア号が轟然と十一発の礼砲を打ちはなった。そし

て短艇が何隻もおろされ、入江にむかっていっせいに漕ぎ寄せてきた。

短艇は赤い地色に青いななめの十文字、右上に王冠と黒い鳥をえがいたオロシア国旗をひるがえしている。

白と黒の海軍の制服を着て、銃剣を日の光にきらめかした乗組員がぞくぞく短艇から上陸してきた。艦長ラックスマン、参謀長ニコルソン、副官ラボノフスキーらの首脳は軍装し、長剣をつるし、将兵たちをしたがえて威風堂々と上陸してきた。

乗組員らは幔幕の片側に伊達藩士らと相対する位置に整列し、銃剣をささげ持った。ラックスマン、ニコルソン、ラボノフスキーは幔幕の中に入り、伊達藩首脳らとむかい合う床几をしめた。

通詞が何事かいい、津太夫がそれにうなずきをかえし、ここにオロシアと伊達藩との秘密条約の締結がはじまった。オロシア側には通詞が二人おり、伊達藩側は津太夫がその役目にあたった。

オロシア側は秘密条約の条項として、まずオロシア船が寄港した際の食糧、水、薪炭などを要求、さらに伊達藩側の輸出品として金、銀、銅、ならびに前海鼠（いりこ）、干鮑（ほしあわび）、鱶鰭（ふかのひれ）、昆布（こんぶ）などの俵物（たわらもの）をのぞんだ。

これにたいして伊達藩側は絹織物と薬品類、荒物類等の品々をのぞんだが、これはあくまでも附随した要求である。本当にのぞむ輸入品目は武器、弾薬であった。

日本は長年におよぶ鎖国のためにこれらの開発がまったくおくれていた。最新式の武器、弾薬

は伊達藩がもっとも手に入れたい品であった。

四つ半（午前十一時）ごろ、条約の調印がラックスマンと片倉小十郎とのあいだでおこなわれた。これによって伊達藩は画期的なあたらしい時代に入っていくことになった。

調印をおえてから、双方はおたがいに贈物を交換し、さらに交歓にうつった。伊達藩側が用意した煙草、茶、菓子がだされ、こころづくしの料理がつぎつぎにだされた。

そして一刻ばかりの後、双方は小船と短艇にのって毘沙門島をひきあげた。

夕刻ちかく、今度はラックスマンがナディア号に伊達藩首脳をまねいて晩餐（ばんさん）をおこない、つつがなく交歓をおえた。

ライフル銃

津太夫は暁に目ざめた。

目ざめる早々身のひきしまるような気持をおぼえ、井戸端へでていった。

有明の空にはまだ月と星がのこっていた。早おきの下男や中間（ちゅうげん）、若党たちもまだおきだしていない。

津太夫は夜着をぬぎ捨て、下帯（したおび）一つの裸になった。着衣の上からでは目だたないが、裸で見る

とたくましい筋肉が体にみちている。うごくたびに筋肉の盛りあがりがきわだった。

彼の強靱な精神力はこのきたえぬいた肉体によって維持されているといってもいい。桶に水をくみあげ、肩からかぶると、気持のよい水音とともに体の芯までひきしまり、こころも緊張していった。

何杯か水をあび、体をぬぐおうとしたとき、背後に人の気配がした。

ふりむくと、まだ夜気ののこる暁のなかに、人影がにじんでいる。

「お香か」

女房が立っていた。めとってから今年で五年めである。

「おはようございます」

「もう起きていたのか」

「はい」

かすかに顔をほころばせて、お香は手拭いと真あたらしい下着をさしだした。自分はもうはやばやと着がえをすまし、顔や髪もととのえている。

(お香は朝顔の花のようだな)

ほころんだ顔を見てそういいかけたが、おもいとどまった。奥州人気質としては、女子供にやたらなほめ言葉をあたえるのを柔弱としてさげすむ傾向がある。

「知っていたのか」

手拭いで体をふきながらたずねると、

「昨日、寒河江兵部さまがお立ち寄りになり、今日のことをうかがいました」

おもいも寄らぬことを聞いた。

「そうか、お奉行が……」

そんなこまかいこころづかいを見せる人だとはおもっていなかった。五年になるとはいうものの、津太夫は四年まえは藩主について江戸にでており、一昨年は根室、松前に潜入し、昨年は秘密貿易港の選定のために東北部の海岸を踏査、測量し、さらにオロシアへ渡航するといった任務に明けくれていたために、実際にお香とともにくらした年月は二年にみたない。

つづけざまに至難な任務を命じていることを、兵部は多少気にしているのかもしれぬ。そうおもうとふだん政務に忙殺されていて想像のできぬ兵部の人柄がしのばれた。

「ご成功をおいのりしております」

お香はややかたい表情で津太夫を見つめた。

「うむ、うまくいけばいいとおもっている」

自然な言葉が口をついた。

お香はそれ以上のことはいわず、井戸端からしずかに去っていった。津太夫の朝の仕度をととのえるためである。

津太夫は自分の部屋にもどって着替えをおえ、床の間に置いてある木箱をとった。

箱の長さは約一間。フタをあけると、黒く冷たい光をはなつ長い銃身と特異な発火装置をもつ西洋銃がおさめられていた。

しばし見入ってから、津太夫はそれを取りだした。ずしりとくる銃の重量感が、今日の津太夫の責任のおもさをかたっているようであった。

この国でながいあいだつかわれ、見なれてきた火縄銃とはいささかのちがいがある。火縄をもちいて発火させる銃ではないので、火縄挟みのような附属物はなく、燧石式の発火装置がついている。火縄銃にくらべて、床尾の長いのが外形の特徴である。

この銃はラックスマンから津太夫が記念としておくられたものである。そのほかこれと同種同型の小銃がエカテリーナ皇帝から伊達斉村へ十丁献上された。

今日はこの西洋銃の試射演武が藩主、重臣たち臨席のもとにおこなわれる。試射演武をおこなうのは津太夫と若松秀之進である。二人はペテルブルグにおいて軍隊の教官からあつかい方をおしえられた。

射撃法のちがいは発火装置のちがいにつきる。火縄式が燧石式になっているだけだから、呼吸さえのみこめば、火縄式をあつかえる者ならば十分こなせる道理である。津太夫がおそわったのは射撃法というよりは、発火装置の理論と火薬弾丸の性能、製法についてであった。

津太夫はこころみに銃をかまえ、庭先に銃口をむけ、ねらいをつけた。引金をひくと、

カチッ

かわいた音がして発火装置がこころよく作動した。火縄銃が伝来してからすでに二百五十年以上がたっているが、わが国では鎖国の影響もあって、銃や火薬の研究、発達は江戸初期いらいほとんどおこなわれなかった。

ところが西洋ではすでに火縄式の発火装置はすたれて、燧石式にとってかわられていた。これは引金をひくと、内装したバネの作用でハンマーが回転し、火打石が火打金に激突し、両者のあいだの火花が火皿の上におちる仕組みである。

これによって西洋では小銃の射撃技術があがり、威力もいちじるしく増大し、水にぬれて使用不能になる心配もなくなった。一部では戦争の実体まで変えてしまった。

第二のちがいは、銃身の内面が今までなめらかな円筒でつくられた滑腔銃であったのにたいして、この西洋銃は内面にライフル（らせん状の線条）がきざまれている施条銃であった。ライフルの発明によって射撃精度と飛距離がいちじるしくあがったのである。

日ごろより一刻（二時間）ほど早く、津太夫は近習一人と若党一人を供にして登城した。そして辰の刻（午前八時）前には若松とともに馬で大橋をわたり、武家屋敷の区画をぬけた。

さらに城下の大路を駆け、瑞鳳寺の麓を迂回し、広瀬川ぞいにはしりつづけた。そのあとを若党が例の鉄砲をかついで尻っ端折りではしってきた。

右手前方に大年寺山の丘陵が見えてきたあたりで、馬の足をゆるめてすすんだ。その先の川原が伊達藩の射撃場になっている。

広瀬川の下流に朝日がのぼっている。

川原に白い幔幕が張りめぐらされ、番士たちの姿があちこちに見えてきた。試射演武にはまだ時間があるが、すでに仕度はできているようだ。

今日はものものしい警備がしかれそうである。

「来客はそろうでしょうか」
若松が馬を寄せてきてきいた。
「支障がおこらぬかぎりくるだろう。もう一昨日あたりからお城にはついている」
今日臨席するのは、藩主や重臣たちばかりではないのである。藩主の賓客が立ち合うことになっている。
それも一人や二人ではない。十人をこえる賓客があつまる予定なのである。そこに今日の試射の目的があった。
津太夫と若松は馬をおり、幔幕の中へ入っていった。
津太夫と若松を見た者たちは、いくぶん顔を緊張させた。
「新庄さま、ご大役ご苦労にぞんじあげます」
「大儀にござります」
声をかけてくる者たちにたいし、津太夫は、うむ、うむとうなずき、笑顔をかえした。
今日の試射演武は津太夫にとってそう難儀なことではなかった。彼も若松ももとから鉄砲にはすぐれた腕前を持っていた。
新式の西洋銃とはいっても、射撃法にそうちがいがあるわけではない。性能がすぐれているだけに、コツさえのみこめば火縄銃よりもあつかいやすいのである。
問題なのは今日の試射演武がもつ意味である。これによって重大なことがきまる。
そういう意味で、津太夫も若松も失敗は絶対にゆるされなかった。

津太夫と若松はまず試射場をじっくり検分してあるいた。川原とはいっても、きれいに整地され、周囲三方は松や杉などの並木でかこまれ、一方は川の流れである。
標的は弓の的とほぼ同種のものである。円形で中央部が黒く塗られ、その周囲に輪が何重にもえがかれている。
距離はおよそ半丁先におかれている。これくらいの距離なら、ねらいをはずす心配はない。
「や、見えてきました」
若松にいわれて見ると、城下のほうからぞくぞくと騎馬がやってくる。歩行でくる者たちの姿も見えた。
警固の侍たちに厳重にまもられた一行がやってきた。藩主斉村、片倉小十郎、寒河江兵部、それに一門、一家、一族、宿老らの重臣がつぎつぎに到着した。
それにややおくれて、今日の賓客たちが姿を見せた。
兵部がその賓客たちを彼らの床几に案内していった。佐竹、南部、上杉、津軽、二本松、奥州外様雄藩の家老たちである。
佐竹藩からは藩主の叔父佐竹義方と執政の疋田斎が姿を見せ、南部藩からは家老南部大和守、大賀頼母、上杉からは国家老千坂太郎左衛門、江戸家老直江五郎太夫と新藤修理助がわざわざ足をはこんでいる。上杉の国元米沢では、藩主上杉治広が六藩連合に反対する前藩主鷹山と重臣竹俣当綱を城内三の丸に幽閉してしまうという荒療治をおこなっていた。津軽藩からは執政山科監物と津軽出雲守、二本松からは重臣丹羽誠左衛門が来会していた。

彼等のうちの何人かはすでに昨年、晩夏の一夜、江戸の伊達藩下屋敷で顔を合わせていた。が、江戸以外でこのような顔ぶれがそろうことは前代未聞のことといえた。

この中でもっとも意気軒昂たる藩は藩主義和の若き奥方を江戸屋敷から脱出させることに成功した佐竹藩である。すでに他藩の動向にかかわりなく、伊達とともに起つことを力づよく表明していた。

藩主が前藩主と重臣を幽閉し、二頭の政治を整理した上杉でも六藩連合の意志はかたく、内政面においても前藩主鷹山につらなる人脈の粛清が着々とすすんでいた。

さらに盟主伊達が藩主奥方と母公を江戸から回収することに成功し、挙兵寸前の情勢にあることから、他の外様諸藩はおのずからその勢いにひきずられていた。伊達をのぞく五藩が伊達にひきずられる根本的理由は、元和のころ政宗の主唱で六藩が盟約した連判状が存在するからである。連判状が存在するかぎり、伊達はこれを強迫的材料につかうこともできるのだ。

賓客たちの前にエカテリーナ皇帝から斉村におくられた西洋銃が披露された。津太夫は賓客たちのまえにすすみでて、その燧石式ライフル銃が従来の銃とことなることをわかりやすく説明した。

「オロシアでは火縄のない銃がつかわれますのか」

「火縄のない銃がどうして火を発し、弾丸を打ちだすのであろう」

「不可思議なことじゃ」

佐竹義方と疋田斎が驚嘆して、まず疑問を口にした。この両人ばかりでなく、賓客たち一同がおなじ疑いをいだいていることはたしかであった。

「オロシアばかりでなく、西洋の国々ではすでに二百年以上も前に火縄銃はもちいられなくなり、もっぱらこの式の銃がつかわれています」

彼等は津太夫がみずから船を駆ってオロシアへ渡航し、エカテリーナ皇帝に面謁したことをきいて、さらに驚嘆した。

「弾丸も、こんな形のものをつかうのか」

「信じられん」

つぎの質問はそれであった。

一同は銃の弾丸はみな球形鉛玉でなければならぬと信じていた。それ以外のものは見たことがなかった。ところが彼らの前にだされた弾丸は鉛製の長弾である。

「左様でございます」

津太夫は、ライフル銃にあっては銃腔のらせん状の溝から回転しながら発射される弾丸は長弾でなくては効果がなく、そのために命中精度がいちじるしく向上する理由を説明した。このライフル銃はもう二十年以上まえからエゲレスで発明され、ほとんどヨーロッパ全域に普及しているのであった。

一同は長年の鎖国の弊害が武器や弾薬の発達をいちじるしくおくらせ、国力の低下をもたらしたことにいたくおもいをよせなければならなかった。

「では、これから実地に試し撃ちをいたしてご覧に入れます」

寒河江兵部の言葉で、津太夫と若松はそれぞれ銃と弾薬を手にして、幔幕の外へでていった。

真夏の太陽が川原に照りつけている。川面は陽光をあびてギラギラとひかっている。新庄津太夫の体はすでにじっとりと汗ばんでいた。

若松を見ると、額に汗をかいていた。日が高くなったら、焼けつくような暑さになることが予想された。

川原をわずかに風が吹きわたっている。斉村や小十郎さらに賓客たちが川原の見物席にならんだ。

「お仕度はよろしいか」

進行の役目にある鉄砲組隊長関伴左衛門が声をかけてきた。

津太夫と若松は射撃位置へゆっくりとすすんだ。標的は川原の彼方にある。

津太夫と若松は三間ほどはなれて立った。二人の背後に見物人たちはいる。

津太夫は標的をじっと見つめた。二個の標的はさきほどのところにはない。さらに半丁先、都合一丁先にうつされていた。

標的ははるか先にちいさくかすんでいる。日の光の中で点のように見えた。

「遠すぎるのではないか」

「あれほど遠くては、新庄どのの腕をもってしても……」

見物席からどよめきの声があがった。今までの火縄銃では飛距離は一丁は十分にあっても、命中させることのできる距離となると、半丁くらいであった。

「今までの滑腔銃ではとても無理な距離だが、ライフル銃なら弾丸がまわりながら飛んでいくので、命中しやすいのです」

寒河江兵部がそれにたいしてこたえているのがきこえた。兵部はオロシア渡りのこの銃が、今までの火縄銃の概念をやぶった威力にみちた新式銃であることを五藩の家老たちに十分わかってもらいたいのだ。

「用意っ」

関伴左衛門が白旗をふりあげて号令した。

津太夫と若松は火薬と弾丸をつめ、ねらいをつけた。照門と照星の先にちいさな標的をとらえ、指を引金にそえた。そして待った。

「撃てっ」

の声とともに白旗がさっとふりおろされた。

一瞬、呼吸をとめ、しずかに引金をしぼったと同時に、轟然たる銃声が川原になりわたった。

その瞬間、津太夫はたしかな手ごたえをおぼえていた。

「用意っ」

ふたたび関伴左衛門の声があがり、津太夫も若松もあらたに銃を装塡した。

「撃て！」

銃声が再度川原の空気をふるわした。手ごたえをふたたび感じた。

数回おなじことをくりかえし、そのたびに銃声がひびきわたった。都合八回津太夫は射ちは

なった。

手ごたえを十分感じていたので、自信はあった。

やがて、鉄砲組の者が二つの標的をはこんできた。どよめきが見物席からおこった。

「お見事にござります」

関伴左衛門が標的を見くらべていった。

津太夫の標的には八発中七発が命中しており、そのうち五発が中心部周辺をつらぬいていた。

若松のは六発命中しており、やはり拍手と喝采をあびた。

「新庄、ご苦労。上出来だった」

寒河江兵部が声をかけてきた。

「五藩のご家老たちにわかっていただければ」

「十分わかったはずだ。みな目の色がかわっておった。効き目は十分あったであろう。今日これから毘沙門島へわたって、ご家老たちをラックスマンに引き合わせるつもりじゃ。津太夫、通詞をたのむ」

兵部はかさねて津太夫に役目を命じた。ナディア号は今日まで毘沙門島の入江に錨をおろしており、ラックスマンは五藩の家老を待っているのだ。

そのあと、さらに五藩の家老たちを女川へまねき、秘密貿易港としての機能をとっくりと見せることになっていた。そのほうの案内も津太夫が命じられていた。

ナディア号が毘沙門島から錨をあげてオロシアへ帰航していった翌日、津太夫は昼ごろ下城して、兵部の屋敷へむかった。

一昨年以来の津太夫の重大任務はこれでようやく一段落したことになる。が、肩の荷がおりたわけではなかった。女川港はまだ完成を見ていないし、今後おこなわれていくオロシアとの貿易がどうはこんでいくか、見まもっていかなければならなかった。

そればかりでなく、伊達藩そのものが現在、運命の岐路に立っていた。今が、幕府への態度を最終的に決定する切所であった。今日、兵部の屋敷にまねかれたのも、そのための秘密の談合がもたれるのである。

大橋をわたろうとしたとき、むこうから商人ていの男がやってきた。なかなか恰幅のいい四十年輩の男で、大店の主人のようなおちついた雰囲気を持っている。

橋詰のところで視線が合った。見たことのない顔である。

おたがいにさりげなく視線をはずしたが、なんとなく気になった。津太夫はまっすぐに大橋をわたりはじめた。

その男はまがって、やはり橋をわたりだした。橋の下から広瀬川の瀬音がきこえてくる。

橋をわたりきると、右手に重臣屋敷が立ちならぶ。真正面に大手門が偉容を誇示している。御用商人が政庁へ出むいていくのかとおもった。

津太夫は大手門の手前の兵部邸の玄関に入った。

その男もつづいて入ってきた。ふたたび視線が合って、どちらからともなく黙礼をかわした。

（仲間だな……）

とこのとき直感した。

玄関を入ると、近習の早見清右衛門が顔を見せていた。

「新庄様、どうぞ」

声をかけられ、客間へむかった。

「原田様、こちらへ」

例の男が早見からそう呼ばれていた。

（あの男か……）

原田勘兵衛という名の武士が長く江戸に潜行していることを聞いていた。その男はもう何年も常陸屋という米問屋をやりながら、江戸市中の情報を伊達藩にもたらしていた。江戸市中の二ヵ所に火をはなって大火をおこし、伊達や佐竹の人質を国元へにがすため捨て身のはたらきをおこなったのも彼である。

そういう男が仙台へひきあげてきているのだから、江戸の状況はいやが上にも切迫したところへきているのだ。

客間へ入っていくと、先月江戸からもどってきた公用人鈴懸主税助がすでにきていて、兵部と話をしていた。鈴懸は江戸屋敷を脱走したお鶴の方と天祥院の囮となって中町奉行の目をくらまし、その足で奥州入りしたのである。

大願寺の別当で、蔵王山伏の越家蔵王坊も姿を見せていた。彼もまた金剛坊とともにお鶴の方と天祥院を無事栗橋の関所を通過させ奥州へおくりとどけるための囮となった。蔵王坊は兵部や鈴懸とややはなれたところにすわり、腕をくんで黙想している。

津太夫と原田勘兵衛は鈴懸のむかい側にすわった。

しばらく待つと、

「遠藤様がおいでになりました」

早見の声とともに、遠藤対馬守昌信が入ってきた。伊達藩には現在、兵部と鈴懸のほかに三人の奉行がいるが、遠藤はそのうちの一人で、藩の〈財用方〉奉行に任じている。遠藤は兵部の前にすわった。

これで片倉小十郎の命をうけて、奥州の六藩連合を実際にうごかしている面々がほぼ顔をそろえた。

「一ノ関殿がまだ」

津太夫がいった。今一人、重要な人物が欠けているのだ。

「一ノ関は今日はこぬという連絡が入った」

兵部が一同につげた。

「あの人物は、この席にくわわらぬほうがよろしいのではないか」

このとき勘兵衛がすかさずいいだした。

「一ノ関になにか心配でもあるか」

兵部がたずねた。

「わたしははじめから、あの人物を信じてはおりません。みな様方はどうか知りませぬが」
勘兵衛はおもいきったいい方をした。
「わしはそんな心配はいたしておらん」
「そうでありましょうか」
「わしは信じておる」
「一ノ関殿のために、ここまでそだててきた大事が万一くずれるようなことがあっては……」
勘兵衛と兵部とは意見のくいちがいを見せた。
「ま、今日は一ノ関のことはおくとしよう」
兵部はいい、
「ともかく今日、ご一同にあつまってもらったのはほかでもない。オロシアとの秘密貿易がうごきだし、伊達藩はあたらしい形勢をむかえたので、今後のことについておのおのがたにかんがえがあればきいておきたい」
と一同を見わたした。
すでにこの運動がはじまったときから、その目的の大綱はさだまっている。政宗いらいの夢と野望を実現することに、伊達藩は百五十年もの歳月を要してきた。
幕府を相手に戦わず実現することができれば最上。戦って成功しても、上出来の首尾。
戦わずして実現しなければ不可。戦って失敗するも不可。
「もうもどり道はござらぬ。前へすすむしかない。われわれがこれからえらぶべきは、戦って勝つか、それとも戦わずして勝つかの二つに一つでござろう」
鈴懸がいいだした。
「左様」
兵部は力づよくうなずいた。
「戦って勝つ準備をしながら、その上で戦わずして勝つ策戦を根づよくこころみるべきではないか」
「いかにも左様」
「六藩が連合し、さらにオロシアの力を借りれば、幕府をたおすこともできるであろう。だが、そうなればこちらとて怪我を負うことはまぬがれぬところ。あまりな大怪我をいたしては、勝ちを無意味にしてしまう」
「そのとおりだ」
兵部は再度うなずいた。
「戦わずして勝つには、奥州が結束して強い力を見せ、幕府に取引きをせまるのがよい策だとおもわれる」
「どういう取引きをもちかける？」
「幕府とても、今は往時の力も威信もめっきりおとろえている。奥州すべてを相手に戦をするだけの金も意気もないと見る。戦はなんとしても避けたいところでござろう。力を背景にして取引きを持ちかければ、ことと次第によっては応じてくるかもわからぬ」

鈴懸は江戸家老という立場で、幕府と伊達、幕府と奥州との力関係からかんがえをすすめていった。

津太夫の見るところ、兵部は鈴懸のかんがえを今日のところは腹蔵なくきだしたい様子である。

「取引きはややもすれば、相手に策を弄する機をあたえることになりかねぬ。一つまちがえると危険をまねく」

「それは、こちらに乗じられる隙があればのことでござろう」

「相手は？」

「いうまでもなく、越中守」

すでに幕閣の職をしりぞいた定信を鈴懸は名ざした。

きいている一同もこれには大きくうなずいた。彼等はみな定信が本気で役職を辞したとはかんがえていないのである。幕閣の実質的な総帥はいまだに定信だとかんがえていた。

「一度は取引きをこころみるべきだろう。片倉様はすでにその用意をなさっておるかもしれぬ」

兵部もいった。

「すでに幕府は出陣命令を関東以北の譜代大名へだしておるかもしれません。幕府とても和戦両様のかまえでございましょう」

このとき勘兵衛がすかさず口をはさんだ。

伊達藩としても、幕府の軍勢の出陣にたいしては当然むかえ討つ準備をおこなっていた。

「わが藩は三万四千の家臣を擁す。佐竹一万、上杉八千、南部、二本松各五千、津軽二千で計六万四千。これに部屋住みの二、三男、若党らをくわえれば優に十万の軍勢をもよおすことができる」

といいながら、兵部は関東以北の大図面を畳の上にひろげた。その図の朱は外様、墨は譜代で画きわけられ、各藩の動員兵力が書きこまれている。

「これに対する奥州の譜代は、会津一万五千、白河五千、鶴岡七千の二万七千が主たる兵力だ。これに群小の譜代がくわわっても二万九千。さらに関東の譜代を総動員したとして約七万だろう。総合計で約十万の軍勢になる。兵力だけでいっても十分にたたかえる。これに東海、中部の大名の軍をくわえたとしても、奥州六藩が地元の利をいかせば、勝算は断然我が方にある」

兵部は各大名領に書きこまれた家臣数を読みあげていった。

「これにオロシアから新式の武器弾薬がぞくぞく入ってきましたら、武力においてはるかに幕軍をしのぐことができるであろう」

鈴懸がいいそえた。かつて、織田信長のもちいた火縄銃が最強をほこるわが国伝統の武田の騎馬軍団を粉砕して、戦国史のながれを一挙にかえた例がある。両人の言葉は数字上の優劣にすぎないが、あくまでもこの数字が実際の戦力の基礎になっているのだ。

「幕府の軍勢がむかってくる進路は、奥州街道、浜街道、さらに羽州街道。この三つの口を完全にふさいでしまえば、幕軍といえども容易には攻めこんでまいれまい。いずれ白河あたりが、攻防の切所となるであろう。越中守が老中筆頭の職を辞して領国にもどった理由はそこにある」

兵部は図面の上で白河を指さしていった。ここの攻防によって戦の勝敗がほぼ決定されるといっていい。いわば白河が天王山となる。一同それには異論のないところだ。

対幕府の戦略戦術については、一ノ関三郎兵衛がぬきんでられてあたっている。彼は山鹿流軍学の免許皆伝を得ているばかりでなく、幕府の内情についてもくわしく知るところがあった。それだけに兵部の信任を得てここまで枢要の地位にのぼったのだが、内部からはとかくの目で見られていた。

無縁寺

赤石百次郎は奥州山中に足を踏み入れて、二日めをむかえていた。

奥羽山脈は陸奥と出羽とを東西真っ二つに分断する背骨であり、奥州の屋根である。北は陸奥の北端八甲田山からおこり、南の会津山岳地帯までつづく。

百次郎は昨日、仙台から作並をへて、奥羽の屋根へ単独で分け入った。関山峠をかすめて、寒風山、白髪山、楠峰をこえて山中で一夜をあかし、今朝船形山へ入っていた。

山腹からのぞむと、北方へむかってはるかなる蒼穹の下、奥羽山脈の峨々とした尾根がはてしなくつづいている。百次郎がめざしているのは、船形山山腹明神沢にある長吉の小屋である。

昨日、関山峠から楠峰へいたるあいだに炭焼や猟師からきいて、長吉の小屋が明神沢の一角にあることがわかったのである。十年以上もこの山中で猟師をつづけているので、彼の名は猟師たちのあいだでも知られていた。

この一帯は山鳥ばかりでなく、鹿、熊、猪、兎、狐、狸などの猟場である。朝から何度か猟師筒のひびきをきいた。そして三人の猟師に会ったが、いずれも長吉ではなかった。

昼間四つ半ごろ、とうとう明神沢にでた。沢の西側の山腹に丸太小屋が見えた。

長吉の小屋だ、とすぐにわかったが、百次郎はただちにちかづこうとはしなかった。沢の湧水のところに寄ってたっぷりと喉をうるおし、一丁ほどかなたの小屋をながめた。小屋は斜面にへばりつくように建っている。おそらく長吉が一人で建てたのであろう。

奥州の深い山地に十年以上も打ち捨てられたままになっている中町奉行同心の境遇と心情に、しばしおもいをはせた。場合によっては、この先十年、二十年、あるいは死期をむかえるまで、このまま打ち捨てられるかもしれなかった。

伊達が天明三年いらいの策動を再開しなければ、長吉はなんの役目をはたすこともなくむなしく奥州の土になっていたかもしれぬ。仙台城内に潜入し片倉小十郎をねらって失敗した孫七は、あるいはまだしも幸せだったのかもしれぬとおもった。

すると、おもいはおなじく奥州に潜入し、そのまま異境の露と消えた兄千太郎のことが脳裡にうかんだ。兄が消息を断ち、生命をうしなった奥州に自分もおなじ任務を背負って潜入してきたことに、ふかい感慨をおぼえた。兄の魂が自分を奥州にまねきよせたのかもしれぬとおもった。

百次郎が白河から伝兵衛、お蝶とともに仙台領へ踏みこんだのは、すでに昨四月であった。仙台城下錦町にある旅籠町の裏通りにある旅人宿〈ほてい屋〉に百次郎とお蝶は夫婦づれの行商人に身をやつして宿をとり、行商に託して城下の様子をじっくりとさぐっていた。

こうした場合あせってうごきはじめると、かならずその筋の者たちの目についてしまうのだ。余裕をたっぷりとればとるほど、後のはたらきが楽になる。できるなら、一年か二年くらい住みついたうえで隠密活動をおこなえば効果的な仕事ができる。

伝兵衛はおなじく向いの旅人宿〈大黒屋〉に行商人として宿をとっていた。そして仙台城下をほぼ見きわめたうえで、長吉をさがしに山へもぐったのであった。

やおら立ちあがって、百次郎は沢のゆるい斜面をのぼっていった。杉、松、楢、樫などが生い茂っている。夏草をふんでちかづいていった。

間口、奥行いずれも二間くらいの、丸太でくんだ小屋である。半間幅のしっかりとした出入口がついている。

今時刻、長吉は猟にでていて小屋にはいないだろうとおもった。いなければ、小屋の中で長吉のかえりを待つつもりであった。彼に会うのがたのしみだった。

百次郎は小屋の前に立った。しばらく様子を見てから出入口をひいた。案外かんたんにあいた。

中は半分が土間で、のこりは床敷きである。長年一人住まいをつづけている猟師のくらしぶりが如実にうかがえた。

土間には猟でえた獲物などがおかれ、床敷きの間には囲炉裏が切ってあり、自在鉤がさがっている。ただそれだけの簡素な小屋である。

中へ入ろうとして、一瞬、百次郎はおもいとどまった。背後で何者かうごく気配がしたのである。

「うごくな」

ふりかえろうとした背中にむかってするどい声があびせかけられた。

相手が銃口で自分の背をねらっているのが感じられた。

百次郎の懐中には短筒が秘めてあるが、火縄に火を点じていないので、急場の用にはたたぬ。

しばし不動の姿勢をとった。

「何のために人の小屋をのぞく。おぬし、行商人ではあるまい」

つづいてけわしい言葉があびせられた。

「長吉という人をたずねてきた」

背をむけたまま百次郎がおだやかにいった。

沈黙がながれた。

「おれには知り合いはいない」

ややあってから相手がこたえた。

「あんたが、長吉さんだね」

相手の疑いに斟酌しないでいった。

「あんたが沢の水で喉をうるおすのを見ていた。おれはあんたを知らん」
百次郎はゆっくりとふりむいた。
四十年輩の猟師が猟師筒をかまえている。敵地の中で自然を相手に長い年月生きぬいてきた動物的な精悍さが感じられた。きびしい警戒の目がひかっている。次第によっては引金をひきかねまじき様子だ。
「杉村三太夫どのをおぼえているか」
問うと、男の表情があきらかにうごいたが、警戒はすこしもゆるめなかった。
「どうして杉村さまを知っている」
「かつて杉村どのがやっていた任務を、今わたしがやっている」
そういって百次郎は懐中から、千住で杉村からわたされた手拭いをとりだしてひろげた。
男は三本杉をえがいた手拭いにじっと見入って、ようやく警戒心をといた。
「おれは大野木長吉だ。杉村さまもお奉行も、もうおれのことをわすれていたのではなかったのか」
「わたしは中町奉行与力、赤石百次郎だ」
というと長吉の顔にあきらかな反応があらわれた。彼は百次郎の顔を凝視してきた。
「赤石、百次郎……」
「うむ」
「赤石千太郎さまの……」

「弟だ」
「ううむ……」
長吉は今度はうなってかんがえこんだ。
「兄の身がわりをつとめている」
「そうか、運命だな」
長吉はしばし過去をおもい、さらに現在にたちかえってきびしい顔になった。
「孫七が死んだのを知っているか」
「この春、片倉小十郎をねらって失敗した者がいる。おそらくそれが孫七だろう」
「おれがどうしてここにきたかわかるか」
長吉はかすかにうなずいた。
「なにか、つかんでいるな」
「猟の獲物を仙台の城下へ売りにいくことがある。そして今でも昔ながらにいろいろ情報をさぐっている。長年の習性はかわらぬものだ」
「きかしてほしいな」
「伊達藩がとてつもないことをやっている。おれはそれをこの目で見た。幕府はすみやかに手を打たなければ、手おくれになる」
毅然とした顔になっていった。
百次郎と長吉は小屋の中へ入って、囲炉裏を前にすわった。

「牡鹿半島の女川に、伊達藩は途方もない抜け荷港をつくった。相手はオロシアだ」

百次郎は長吉の言葉で脳天を鉞でぶち割られたような衝撃をうけた。

「オロシアとの抜け荷か……」

百次郎はあとの言葉をうしなった。

一昨年、蝦夷地根室にオロシアの軍船がとつぜん来航し、開国と通商をもとめてきて天下をおどろかしたことをおもいだした。伊達藩はこのオロシアの軍船と、どういう方法でか交渉をもったとかんがえるべきであった。幕府が拒絶し、オロシア軍船が帰航していったことでこの件が落着したとかんがえていたことがあやまりだったのだ。

今まで霧の中にかすんでいた伊達の陰謀の輪郭がようやくくっきりと見えてきた。謎がほとんど一気呵成にとけた。伊達の陰謀の規模の大きさと広がりがあきらかになった。なんと、オロシア貿易が伊達藩の切り札だったのだ。

鎖国という歴史上の観念にとらわれていたために、今まで想像がつかなかった。完全に盲点をつかれた気がした。

これに拠って、伊達藩は奥州の外様五藩と同盟をむすんでいたのだ。伊達藩の本当のおそろしさを今あらためておもい知った。

「おどろいたようだな」

百次郎はうなずいた。

「女川に大きな港をつくるため、城下でひそかに人夫をつのっていた。おれはおかしいと見て、人夫になって女川へゆき、港づくりにくわわったのだ。だから間違いはない。おれは三ヵ月人夫としてはたらいて、隙を見て逃げだしてきた。石巻に匹敵するくらいのどえらい港ができた」

「……」

もう一度百次郎はおどろかねばならなかった。

長吉に会えば伊達藩の秘密がなにかつかめるとはおもっていたが、こんなとてつもない情報を長吉がにぎっているとはおもいもよらなかった。さすがこの地に十一年もひそんでいた中町奉行同心だけのことはあった。無駄にすごしていたのではなかった。

伊達藩が企図しているものは抜け荷というより、もっと大々的規模をもつ貿易のようだ。かつて藩祖政宗が企図したヨーロッパ諸国との通商貿易に範をとったものだとおもった。

「よかったら、女川へご案内いたします。それを見ればきっと赤石さまはおどろくでしょう。オロシアの船がすでに入港したのも見ていますよ」

「そこまですすんでいるのか」

「江戸からおれをたずねて誰かやってくるとおもっていた。それで船形山にもどっていたんですよ」

長吉は打ち捨てられても、任務だけはきちんとつとめていたのだ。百次郎はここに中町奉行同心の性根を見たおもいがした。

「ぜひ女川へ案内してくれ」

秘密港である以上、見張りや警戒はきびしいだろうと予想したのだ。

長吉は囲炉裏に薪をくべ、干した山鳥や鹿の肉を焼きはじめた。獣の肉は口にしてはならぬことになっているが、これを食すれば滅法うまいことを百次郎は知っていた。

「山には山の暮らしがある。城下の暮らしをやっては、山では生きていかれない。この肉があれば寒い冬もらくに越すことができる」

そういって長吉ははじめてかすかな笑いを浮かべた。

「苦労をしたもんだな」

「もし赤石さまがたずねてきてくれなければ、おれはここで朽ちはてることになったでしょう」

「杉村どのやお奉行がいるかぎり、そんなことはないはずだ」

いいながらも、百次郎はもし自分が長吉の立場であったら、今日まで忠実に任務をつづけてこられたかどうかかんがえてみた。

肉が焼けてきた。脂のこげるこうばしいにおいが小屋の中にひろがった。

長吉は百次郎のために肉をとってさいてくれた。

躊躇なく百次郎はそれを口に入れた。禁断の美味に二人は舌つづみを打った。

「孫七とは会っていたのか」

「年に一、二度は顔を合わしていましたよ」

「孫七は勇敢な中町奉行同心だった。不運でさえなければ、片倉小十郎をたおしていたところだ。古来、英雄、傑物といわれた者はひとしくつよい運にまもられていたものだ。片倉小十郎もその例にもれない」

「おれがやったにしても、うまくいったかどうか」

「話はかわるが……」

百次郎は長吉にじっと視線をそそいだ。

「赤石千太郎について探索してわかったことはないか」

ずっと長いあいだ澱のように胸の中にしずんでいたことをたずねた。いつかは自分自身で解明にのりださねばならぬことだった。昨年七月の定信辞任にはじまる伊達の事件がもしおこっていなかったら、百次郎は兄の最期の状況をさぐりに奥州路をたどっていくはずであった。

長吉の視線が一瞬、虚空に浮いた。彼のこころにわずかな迷いが生じたのだとおもった。

「仙台城下で最期をおとげになったことは、ほぼ間違いないとわかりました。以前赤石さまがひそんでおられたとおもわれる場所のちかくに、〈直参の士ここに果つ〉ときざんだ文字を見つけました。おそらく素姓を知られて、死がせまったとき、無念のおもいをその文字にこめたのでありましょう」

それは以前杉村からきいたこととおなじであった。

「何にきざまれていた？」

「楓の幹に小柄でほりこんだ文字だとおもわれました」

「場所は鶴ケ谷だな」

「そうです。鶴ケ谷の、無住の寺の楓の幹に」

「わたしはいってみたが、見つからなかった」

「赤石千太郎様からは、伊達陰謀の重大な証拠のありかをつかんだ旨のしらせが江戸につたわったのを最後として一切音信がとだえ、消息がわからなくなりました。杉村様と奥野、それからわたしが潜伏場所をひそかにたずねましたときにはすでにおそく、その文字だけがのこっておりました。赤石様は廃寺に虚無僧として住みついていたのです」

鶴ヶ谷は仙台城下東北の地域である。

百次郎は先月、鶴ヶ谷の廃寺をさがしあてたが、境内にその九文字をきざんだ楓の木はなかった。

「兄が、伊達の陰謀の証拠のありかを……」

百次郎は今はじめてきいたことだった。

「赤石様はそう確信なさっておりました。ところがそのときには敵の手が身ぢかにせまっていたものとおもわれます」

「証拠というなら、連判状か？」

「おそらくそうだとおもいます」

六藩が同盟することになれば、まずおこなわれるのが神文誓紙の連判である。

「兄がひそんでいたとおぼしき廃寺は今も無縁寺としてほとんどそのままの姿でのこっていた」

「一口でいうと、とても無惨な寺です。天明の飢饉のときに死んだ多くの無縁仏があの寺に埋葬されています。一人一人埋めきれなくて、大きな穴を掘ってそこに死体をつぎつぎに投げこんでいったそうです。今でも城下の者たちは気味わるがって、あの寺にはあまりちか寄らぬようです」

「兄もきっと、あの寺で死んだのだろう。隠密が敵地で死ぬには無縁寺こそふさわしい」

「今一度、あの寺をたずねてみる気はありませんか」

「もとよりそのつもりだ」

百次郎はもう一度そこをたずねて、兄のためにこころばかりの塚なり、墓石などをおいて菩提供養をしてやりたかった。それと九文字をきざんだ楓の木を再度さがしてみたいとおもった。杉村や長吉が見たのなら、今でもあるはずだからだ。

「これから山をおりましょう」

十一年間ねむりつづけていたものが勃然と目をさまし、長吉をつきうごかしているようだ。

「長吉」

ここではじめて百次郎は呼び捨てた。

「もうおまえにとっても、この小屋はいらぬだろう」

「はいっ」

長吉はやや態度をあらためた。初老にさしかかった隠密の眼がかすかにうるんでいるのを百次郎は見てとった。

翌々日の午後——。行商人のいでたちの百次郎と城下に獲物を売りにおりてきた猟師の姿の長吉は錦町から東北方の鶴ヶ谷へむかった。

二の森というところをすぎると、人家がめっきりすくなくなって、風景がかわってきた。田

畑のあいだに、農家がまばらに見えた。

そこからややいくと与兵衛沼、大堤沼、小松島沼などの沼がいくつもひろがっている。

鶴ケ谷はその先にあった。森や林の多いところだ。秋になると鶴の群れがわたってきてこの地で冬をこすために、この地名がおこった。

森や林のあいだに沼がある。その一つ菖蒲沼のほとりに、無縁寺があった。無住になってから三十年以上たつといわれている。

くずれかけた山門をくぐると、杉の大樹が参道の両側に鬱蒼とたちならんで、しずけさのうちにも荒れはてはいるが、荘厳な雰囲気を感じさせずにはおかぬ。百次郎が先月伝兵衛とともにおとずれたところである。

参道はゆるやかな勾配をもっている。のび放題の孟宗の竹藪もある。軒がかたむいたり、壁のくずれた無住の僧房や塔頭のようなものがほとんど原型にちかい形でのこっている。その中には旅の虚無僧や乞食坊主が住んでいるところもある。

夕暮れがちかくなったためか、境内はうすぐらい。沼や谷をわたってくる風が肌にひんやりとここちよいほどに吹き寄せてきた。

〈無縁塚〉と読める石碑や卒塔婆があちこちに立っている。天明三年の年月が入っているものがある。

「わたしがきたのは十一年ぶりです。天明のころ、この寺の境内は浮浪者の群れでみちみちていたといわれています」

長吉は感慨ぶかげにあたりを見まわした。

奥州は地理的、気候的にいって飢饉の被害をうけやすく、各藩政においても飢饉への対策は大きな題目であった。

天明三年の飢饉は全国的なものであったが、奥州の被害はもっとも大きく、奥州全域で百万をこす餓死者がでた。伊達藩は囲い米を放出したり、お救い小屋を城下にもうけたりしたが、焼け石に水だった。

城下までくればなんとかたすかるだろうと一縷の望みをいだいて郡部の者たちが着のみ着のまま食い物をもとめて仙台城下にあつまってきたが、その期待はまったく裏切られた。そうした者たちが城下はずれの無住の寺で雨露をしのいでいたのである。

「その連中の多くは木の実や草の根などを食べ、それが尽きるとついにはおたがいの肉をも食い合ったそうだな」

そうおもって無縁塚や墓地などを見ると、さすがに鬼哭啾々たる気持におそわれた。死者の呪いの声や呻きがきこえてくるようだ。境内には、いまだ成仏しきれぬあまたの魂が恨みをこめてさまよいつづけているのかもしれぬ。

方丈の裏手の雑木林の中にある僧房へ長吉は近づいていった。

林の中をあるきまわったあげく、

「ない」

長吉はいった。

「たしかにこのあたりにあった楓の幹に、九文字がきざんであったのだが……」
いいながらさがしあるいたが、見つからなかった。
「なくなっています。どうしてでしょうね」
疑念をあらわして長吉はいった。

連判状

八木山の峰に日がおちると、大年寺山の丘陵が急に暮色につつまれてきた。
奥州とはいっても、夏の日ざしは猛暑である。
日がおちるとともに風がでてきた。山頂から吹きおろす風が裾野の暑気をはらった。
最上左近の屋敷は高さ二間余の竹矢来できびしくかこまれている。竹矢来の周囲には見張りが要所をかためていた。
屋敷の中はほとんど一日中ひっそりとしている。
長年最上家につかえてきた近習、若党、下男、女中たちのうち大半はすでに姿を消した。逃げたのではなく、左近が彼らを説得して暇をあたえ、藩庁の役人にきてもらって身柄を竹矢来の外へだしたのである。

以来、屋敷の中には腰元の咲江と四郎太、五郎作兄弟の若党がのこるだけになっていた。
居間に横たわり、眠りをとっていた左近がゆっくりと身をおこした。このところずっと、左近は昼間眠りをとることにしている。
夜安閑とねむっていては、命をおとす危険があった。
四郎太も五郎作も昼間交代でねむっている。夜は曲者の侵入にそなえて見張りをしていた。
これまで数度、左近の命をねらう刺客が夜間屋敷に侵入をはかった。
左近、四郎太、五郎作がその刺客に応じ、一度は斬りたおし、そのほかはことごとく撃退していた。
「そろそろ、客がまいってよいころだが」
前回刺客を追いかえしてから、もう十日以上たっている。
「まことに糞蠅のようにうるさいやつらです」
こたえたのは四郎太である。
「こちらが油断するころを見はからって性懲りもなくやってくる」
左近は眉宇をくもらせた。
うるさいばかりではすまぬ相手だ。伊達山岳党がくりだしてくるえりぬきの蔵王山伏だけに、すこしでも気をぬけば、こちらが命を断たれてしまう。今まで何度もその危険をくぐりぬけてきたのだ。
「今度の客はかならず生け捕りにしてやりたいものです」

四郎太は二十一歳で、五郎作は十九歳の若者である。祖父の代から最上家につかえ、父親は左近の説得で、ようやく今年の三月竹矢来の外へでたのである。

兄弟とも子供のころから武芸をみっちり左近にしこまれ、きたえられてきた。今でも早朝の一刻（二時間）と午後の一刻はたがいに木太刀で打ち合う猛稽古をくりかえし、屋敷内の矢場へでて弓を引いている。竹矢来で屋敷をかこまれる前までは、毎日川原を馬で駆けていた。

「生け捕りはとても無理だ。それよりもまずこちらがやられぬよう、こころがけるべきだ」

左近は兄弟の若さゆえの一本気を気づかった。

一昨年いらい、左近は先祖伝来の巻物一軸によってお家再興の野心をいだき、伊達藩と幕府双方を相手に虚々実々の対応をしてきたが、ことは所期の志どおりにははこんでいなかった。次第によっては、伊達藩と幕府を手玉にとって、その両者を秤にかけるつもりが、事態はそのように推移しなかった。

伊達藩はわずか千石の加増をもって左近をあしらおうとした。

一方の松平定信は左近からの情報と交換にいろいろ約束をあたえてくれたが、所詮それは手紙のうえのことにすぎぬ。紙上の約束がどれほど確実なものであるか、左近には不安がつきまとっていた。幕政を指図する定信ほどの者がそうやすやすと左近のおもいのままにうごくとはおもえなかった。

けれども伊達藩がほぼ公然と幕府への異心をあらわすにいたって、左近は伊達藩への影響力をほとんどうしなってしまった。

暮色が濃くなってきた。屋敷周囲の雑木林の中の泰山木や朴の木の純白な花が夕闇の中に消え入りかけている。

蟬の鳴き声がさかんになってきた。

屋敷の雨戸をとじた。母屋の入口は玄関と勝手口の二ヵ所である。

左近は脇差をさし、大刀をかかえて玄関の間にすわりこんだ。その横に弓と矢筒がたてかけてある。玄関の戸口はひろくあけはなってある。

勝手口には四郎太が弓矢の備えをしてひかえた。

こうして夜があけるまで、刺客の来襲にそなえるのである。

屋敷の敷地は約千五百坪。その中に母屋、長屋、厩、土蔵、物置がたっている。周囲には雑木林がひろがり、庭には池がある。植込みや、石垣、木戸、塀、垣根などはいっさいもうけてない。

以前には十数人の男女の家来や使用人がいたが、今は主従四人に、馬が稲妻を入れて三頭のこっているだけだ。

左近は刺客の来襲をただ手をこまねいて待っているばかりではなかった。脱出の機会をうかがっているのである。

左近の生きる天地は寸土といえども伊達藩領にはなかった。ここを脱出し、松平定信の懐にとびこむ以外にもはや道はなかった。

とびこむ土産は彼自身が持っている。昨年十月、松之助に託した神文誓紙の写しは花押のない

偽物であった。

本物の写しは以前同様、文机の足の中におさまっている。そこには神文誓紙の在りかがしるされているのである。

この連判状こそは奥州六藩の陰謀の由来と実体をあかすなによりの証拠である。

これがあるかぎり、定信が懐をひらいてむかえ入れてくれる自信があった。名門最上家が、将来直参旗本として生きていく道がひらけるのである。

丑の刻（午前二時）がちかくなったころ、背後にかすかな物音がきこえた。

「咲江」

左近は背後にむかって声をかけた。

「はい」

咲江がしずかに姿をあらわした。彼女は夜着をきていない。

「寝てないのか」

咲江がちいさくうなずいた。

「寝なければ明日にこたえよう」

咲江は今朝からずっと平常どおりの仕事をしていた。

「とても寝てはおれません」

「おれも四郎太も、昼間寝ている」

「わたしもお昼寝をさせていただきました」

これは嘘だとわかっていた。

「戦には女は足手まといだ。おきていてくれても役にはたたぬ」

なまじな説得では咲江はきかぬとおもってそういった。

「咲江がおきているとはおもってくださいますな。わたしには夜なべの針仕事がございます」

咲江は左近の腹を読んでいた。

咲江の家は先祖代々最上家につかえている。彼女は今年二十歳で、今まで何度も縁談があったが、すべて自分でことわってしまった。

咲江の心中を左近は知っている。それを重荷だとおもったことはあるが、ちかごろは彼女の意のままにまかせていた。

左近が死ぬときは自分も死ぬときだときめているのだ。

（余計なことだ……）

と左近はおもっているが、これも説得できぬことがわかっていた。

払暁のころ、咲江は一刻ばかりやすんだようだ。

「客はこなかったな」

朝、四郎太と顔を合わせてそういったとき、咲江はもうおきて朝餉の仕度をしていた。

朝餉をおわったころから、雨が降りだした。

「今夜はどうかな、客はくるだろうか」

雨に濡れる庭を見ながら左近はつぶやいた。目下の関心といったら、そのことしかない。四郎

太も五郎作もおなじである。

竹矢来を結いまわされてからは、外部との接触を断たれてしまった。左近にはそれがいちばん痛手であった。

伊達藩やほかの奥州外様諸藩の動向がよくわからぬ。定信とも連絡がとれない。幕府の対応の仕方もつかめなかった。目と耳をふさがれてしまったにひとしいのである。

「今まで、雨の日は一度もきたことがありません」

四郎太がこたえた。刺客がおそってきた夜の情況を彼は仔細におぼえているのだ。

「だからといって、今後もそうだとはかぎらぬ」

左近がいうと、四郎太はうなずいた。

遠雷の音が何度も雲間からひびいてきた。

仮眠をとって夜の襲撃にそなえた。

夕暮れちかく、急に蟬しぐれが降りだした。雨があがったのだ。

山の端に夕虹がかかっている。左近は現実をわすれて一瞬、はなやかな虹のきらめきに見とれた。

山の緑も冴えざえといきづいている。

夜のおとずれとともに、大年寺山の空は金銀の砂をまいたように星がかがやきだした。あざやかな月がかかっている。夏の月は出がはやい。

厩からきなれた稲妻の鳴き声がきこえた。稲妻は佳い月をながめると、かならず一度はそれにむかって声をあげるのだ。

山の夜は不気味なほどしずかである。夜はしだいに更けていった。

この夜も、左近と四郎太、五郎作は交代で玄関と勝手口をかためていた。

子の刻（午前零時）をまわったころ、左近は尿意をおぼえて厠へたった。

手水場の水をつかったとき、庭の池の水面が月光にかがやいているのが見えた。

（佳い月だ）

感嘆のおもいで見つめたとき、すっと水面を白いものがかすめた。

（……！）

水面には屋根の甍と軒がうつっている。白い影はそこをすべるようにかすめたのである。

にわかに左近の五体に緊張感とともに旺盛な戦闘意欲がみちてきた。敵だ、とみとめたのである。

敵はいつしか屋敷内に侵入し、屋根の上にあがっているのだ。

「四郎太、五郎作っ、出合え！　屋根に曲者だ！」

左近は屋内に呼ばわった。

すぐにその声に応じる気配がおこった。玄関には四郎太、勝手口には五郎作がいる。二人は弓をとって矢をつがえた様子である。

白い影がむかった玄関口へ、左近ははしった。

四郎太は弓を引きしぼり、外へむかってかまえていた。

左近は弓矢をつかんで、玄関口から外へ飛びだしていった。
大屋根の甍に白い浄衣をまとった山伏が二人、軒端に一人それぞれ手弓を手にして下をうかがっていた。
「四郎太、五郎作っ、表にでよ！」
呼ばわって、左近は泰山木と朴の木の樹間に身をかくし、弓に矢をつがえ、手前にいる山伏にねらいをつけた。
そのとたんに、山伏が浄衣をひるがえして大屋根の上を疾走した。はしりながら手弓を引きしぼっている。
矢をはなつと同時に、山伏が屋上から高々ととんだ。
ほとんど同時に、左近が矢を射はなった。
弧をえがいて飛んでいた山伏が途中からまっさかさまに墜落し、地上にたおれた。宙空で、左近のはなった矢に胸を射ぬかれたのである。
山伏のはなった矢は左近の頭部をかすめて、泰山木の太い幹につきたった。
山伏は二、三度身をもたげかけたが、力つきてうごかなくなった。
四郎太が玄関先に、五郎作は庭にとびだしてきた。二人はそれぞれ物陰に身をかくし、弓を引きしぼった。
それに反して、屋上の山伏は身をかくすところがどこにもない。月光の下に身をさらし、一時進退に窮した。

左近は二人めの獲物をねらって矢をつがえた。
シュッ
同時にするどい音がして、手弓の矢が足下につきささった。
大屋根を山伏が駆けた。地上をはしるような身の軽さだ。
それをねらって左近は射はなった。弓弦の音をのこして矢はとんだが、わずかにそれた。
もう一人が月光をあびて降棟にすっくと立っている。
つぎの矢をつがえたとき、山伏は降棟にまたがって一気にすべりおりてきた。いかにも修行なれした荒技であった。
あっとおもったときには、もう山伏は宙へとんでいた。月光の中に白い影がおどった。
山伏は左近がひそむ樹間の目前にとびおりた。
「おのれ！」
左近は弓矢を捨てて、大刀をぬきはなった。
「覚悟っ」
山伏も一声おめいて、柴打ちを真っ向から振りおろしてきた。
左近は大刀を円弧をえがくように山伏めがけて水平にふるった。
どちらも微妙な差で体をかわし、つぎの攻撃にうつった。
柴打ちはつづけざまに左近の頭部、顔面をねらって荒々しく打ちおろされた。
左近はことごとくはずし、樹間に身をひいた。

その一瞬、がきっと大きな音をたてて柴打ちが泰山木を打ち、幹に深くめりこんだ。
同時に左近の大刀が下からすくい上げた。十分すぎるほどの手ごたえがあった。
「うっ、ううう」
山伏の呻きがきこえた。大刀は山伏の脇腹から胸へ深々と食いこんでいた。致命傷であることは歴然としていた。
「小癪な……」
ひくい声をもらしつつ、山伏はどっと前のめりにたおれた。
「四郎太、五郎作！」
闇にむかって、左近は声をはなった。
「殿っ」
四郎太の声はすぐにかえってきた。
「五郎作っ」
もう一度呼んだが、五郎作からは声がもどってこなかった。
左近は庭へむかってはしった。
「五郎作が……」
四郎太の声がきこえた。
左近と四郎太は庭から裏口のほうへまわった。そこに五郎作がうずくまるようにたおれていた。

「殿、兄者、無念だ。頭と腰をやられた……」
すでに虫の息になっている。四郎太が五郎作をかかえおこしたが、前頭部を断ち割られて血を大量にながしており、もはや回復ののぞみはなかった。
「五郎作っ、しっかりしろ！」
四郎太がさけんだが、
「兄者、おれはもうだめだ、殿を……」
いいつつ五郎作は兄の懐の中でこと切れていった。
左近は呆然とその場に立ちつくした。
四郎太の嗚咽がきこえた。

大年寺山は青葉山や八木山の峰つづきの東南端に位置する山である。ここは仙台城の南を扼する要害の地であり、室町時代にはその頂上ちかくに茂ケ崎城があった。
時代がくだって、伊達藩四代目藩主綱村のとき、黄檗宗大年寺が創建された。
最上左近の屋敷がある大年寺山の東北の麓からかなりはなれた南の麓に、〈東桑宝窟〉と揮毫した額をかかげた山門があり、その背後に石段をまじえた坂道の参道が長々と山中につづく。その先の山腹をきりひらいて、鐘楼、仏殿、法堂、庫裡をそなえた大伽藍がひろがっている。
伽藍の背後には綱村以降、吉村、宗村、重村までの歴代藩主の墓所がある。墓所のさらに背後は杉や松、櫟、楢などの生いしげる峰となる。

梅雨のあがった一日、背に大きな竹籠をかついだ地元の者たちが三々五々この参道をのぼり、峰へ入っていった。梅雨明けを待ちかねた人々が蕗を刈りにきたのである。

蕗はこの地の名物で、酢の物にしたり、甘煮にしてたべる。

夏草や夏木立の中を分け入って、蕗を刈る人々は奥へ奥へと入ってゆく。峰をこえ、反対側の山腹をくだり、竹矢来でかこまれた最上左近の屋敷のちかくまできて、見張りの番士たちに追い散らされる者もいた。

梅雨明けから数日たった夜、闇にまぎれて三人の男が広瀬川の川原から大年寺山の麓へ、音もなくちかづいていった。

夕暮れの一時、卵色をした月がのぼった。が、月は宵に入ったころから雲間をでたり入ったりしつづけていた。

三人はやがて、ひそかに最上左近の屋敷にちかづいた。

竹矢来の出入口には見張番所がもうけられ、夜間といえども明りをともして見張りがつづけられている。

三人は見張番をさけて、足音をしのばせ、番所の背後へまわった。

「番士の数はぜんぶで二十人くらいのものです」

ひくい声でいったのは、伝兵衛である。

「うむ」

うなずいたのは百次郎だ。

二人の後についてくるのは大野木長吉である。長吉だけはつかいなれた猟師筒をたずさえている。

この三人にお蝶をくわえた四人は錦町のほてい屋と大黒屋にひそみ、仙台城下の様子を探索しつつ、大年寺山の左近を救出すべくずっと機をうかがっていたのである。

左近は昨年まで、定信の重要な情報源であった。定信が老中を辞任したのも、左近から伊達藩の極秘情報をつたえきいたことがきっかけとなった。

左近がまだ定信に明かしていない重大な情報があるはずである。百次郎はそれについて興味があり、知りたかった。

左近救出の件は定信から命令をうけていた。このままの状態で放置しておいたら、いずれ左近が伊達藩の手によって抹殺されることはあきらかであった。

これまで百次郎は何度も左近の屋敷のすぐそばまで接近し、屋敷の様子や見張番の状態について偵察していた。蕗刈りの者に変装して屋敷の背後にまわったこともあった。ほとんどあらゆる検討をしたうえで、今夜の決行となったのである。

常識的には、きびしく竹矢来でかこまれ、二十人前後の番士に見張られた屋敷から左近をつれだし、城下を脱出することは至難といえる。だが、やりよう如何によっては、不可能ではないはずである。

三人は夜陰に乗じて、屋敷の背後にまわった。

背後は深い雑木林にかこまれている。その中へ入っていった。

このあたりには見張番の姿が見えぬ。竹矢来の高さは二間余である。竹を組み合わせてあるので、よじのぼれば向う側へ入りこめるが、鳴子がつけてあるから、揺らしたり、重みがくわわれば、たちまち騒々しい音を発する。

竹矢来に触れずに、向う側へおりなければならぬ。

「伝兵衛、わかるか」

闇の中でいった。

「しっかりと目星をつけてあります。恰好の枝ぶりの松がありました」

闇の中から自信にあふれた声がかえってきた。

伝兵衛はしばらく雑木林の中をあるきまわっていた。

「見つかりました」

ふたたび声がきこえた。

「ぬかるな」

「大丈夫です。退き口をよろしくおねがいします」

「わかった」

「では」

伝兵衛は懐中から鉤縄をとりだした。

月は今、雲間に入っている。伝兵衛はほのかな星明りをたよりに松の枝をあおぎ見た。

三間ほどの高さのところに、真横にのびた太い枝がある。伝兵衛はその枝にむかって鉤縄を投

じた。

鉤は枝にしっかり食いこみ、巻きついた。

伝兵衛は縄をぴんと引っ張って手ごたえをたしかめた。そしてその縄尻をしっかりとつかんで後方へさがっていった。

距離を目測し、ねらいをつけ、十分反動をつけて、おもいきり地を蹴った。

縄は松の枝を中心に大きく半円を描き、伝兵衛の体が虚空に高々と浮いた。もっとも高く浮いたところで縄をはなし、軽々と竹矢来の中へおり立った。見事に成功だ。

伝兵衛はそれから闇の底をはうようにすすみ、母屋へちかづいていった。

伝兵衛の姿が闇の中に消えるのを見て、百次郎は伝兵衛から借りておいた忍び刀をぬきはなち、竹矢来に寄っていった。そして木下闇にひそみつつ、竹と竹をむすんでいる縄を鳴子を揺らさぬよう一つ一つ丁寧に切りはなしていった。

その後、長吉が青竹を一本ずつ音をたてぬように引き抜いていった。間もないうちに、竹矢来が幅半間くらいにわたって抜きとられた。

一方、伝兵衛は屋敷の内外へ注意をはらって、ひとまず母屋の縁側の床下へもぐりこんだ。

鉤の手にまわると手水場があり、その先に厠がある。手水場のちかくまできて、しばらくそこにひそんだ。

ミミミミ……

指で鼻をつまみ、夜更けて庭木などにとまって鳴く夜蟬の鳴き音をだした。

ミミミ、ミミミミ……

もう一度鳴いてみせて屋内の様子をうかがった。

しばらくたつと、しずかな足音がきこえ、何者か厠に入った。それから手水をつかう音がした。

ミミミミ……

こころみにまた鳴いた。

「最上左近だ。そのほうは」

頭上の闇からひくい声が降ってきた。

「江戸からまいった中町奉行の手の者……」

喉の奥でつぶやくように伝兵衛はいった。

「中町奉行だな」

「左様にござります」

伝兵衛は先日蕗刈りにいった際、左近の屋敷のちかくから、中に石をつつんだ手紙を母屋内に投じたのだった。近日中に中町奉行の救助隊が屋敷におもむく旨を投げ文にしるしておいた。

中町奉行の存在を左近は東郷松之助からきいているはずであった。

「姓名は？」

「中町奉行与力赤石百次郎がお屋敷の外にまいってお待ちいたしております。わたしは配下の同心山室伝右衛門と申します」

「左様か、しばし待つよう」

そういって左近の足音が遠ざかっていった。

待ったのは、すこしの間であった。

ふたたび足音がもどってきた。左近は脱出の準備をすでにととのえていたものと見えた。

「伝右衛門、脱出の手順は……」

ひくい声がきこえた。

「屋敷の裏手の竹矢来をやぶってあります」

「その先は」

「大年寺山の麓の先、広瀬川の岸に船を用意してございます。船にて城下を脱出いたし、袋原までまいります。そこから先は馬で白河へ」

「なかなか」

「お供の人数は」

「若党一人だ、四郎太と申す。腰元はここにのこしておいても、よもや命はとられまい」

「では最上様」

とうながしたとき、急に見張番所のほうでざわめきがおこった。そして、提灯や龕灯の明りが騒然と闇の中にいくつもうごきだした。

「最上様、お早くっ、見つかった模様です！」

伝兵衛は切迫した声をあげた。

「よしっ、いくぞ」
左近の声と同時に、雨戸が一枚、中から蹴たおされた。
左近と襷がけをした若い若党が一人庭先へ飛びおりてきた。が、そのときはやくも、おめき声とともに見張番所から多くの明りが屋敷内に乱入してきた。
「しまった！」
伝兵衛はうめいた。
仕方なくとっさの対応にでようとしたとき、
「見張の者どもはわたしが引きうけます。みなさま方は脱出口へ」
四郎太が太刀をぬきはらってそういった。
「一人では無謀だ」
左近がとめたが、
「大切なのは殿のお命です。殿さえ生きておられれば、最上家再興の望みはありましょう。お早く」
断乎とした声で四郎太がうながした。
「四郎太、おまえ！」
「殿、おさらば。かならずご無事で、最上家を」
いうや四郎太は地を蹴って、無数の明りにむかって敢然と突進していった。四郎太のおめき声が闇の中を圧した。

太刀を打ち合う壮烈な音がひびいた。おめき声はつづいた。
「最上様、こちら」
伝兵衛は左近をうながした。
はしり去る一瞬、屋敷の中にのこる女の白い顔が伝兵衛の眸に映じた。
伝兵衛は疾った。左近もはしった。
左近は一度だけふりかえった。まだ四郎太のおめき声と太刀打ちのひびきがきこえた。
「四郎太、すまぬ」
伝兵衛ははしりながら左近の言葉を耳にした。
百次郎と長吉が今やおそしと待っていた。
伝兵衛と左近は前後して竹矢来をすりぬけた。そして必死に麓を駆けおりていった。ゆるい勾配の坂道をはしりくだった。
麓から川原までは十丁ばかり。月と星が照る中を四人は懸命に駆けた。
追いすがられたときは、百次郎と長吉が踏みとどまって、左近と伝兵衛を逃がす手はずになっていた。
駆けに駆けた。川原にいたる道をまっしぐらに疾走しつづけた。
広瀬川がちかづいてきた。船をおいた目じるしの竿が月光の下に見えた。
川は黒い光をたたえてながれている。
「伝兵衛、たのむぞ」

百次郎がいった。
ひきうけました、と力づよく伝兵衛はこたえた。
「赤石殿、かたじけない。礼を申す」
左近がはしりながらいった。
「最上様、ご無事で白河へ」
百次郎がそれにこたえた。
「さらば！」
「きっとご無事で」
伝兵衛と左近が船に乗った。
百次郎と長吉は岸にのこった。ほんのわずかな間の邂逅にしかすぎなかったし、月明りの中でしか見なかったが、百次郎はこの名門の末流の公子につきぬ哀惜と痛切な同情をいだいた。
伝兵衛はすばやく竿をとって、巧者に船をだした。
船は流れの中へでていった。揺れながら流れに乗った。
そしてたちまち船は闇の中へ没していった。
広瀬川は東南へむかってくだり、城下の外、袋原で名取川に合流する。船をそこで乗り捨てて、馬で奥州街道を名取、岩沼とくだって白河へむかうのである。
馬は袋原にかねて周到に用意してあった。

出陣

寛政六年盛夏六月九日、将軍家斉はいよいよ奥州および関東の譜代大名にたいして、奥州征討の軍令をくだした。
会津藩松平、白河藩松平、磐城平藩安藤、中村藩相馬、鶴岡藩酒井、棚倉藩小笠原、福島藩板倉、新庄藩戸沢、三春藩秋田、水戸藩徳川、佐倉藩堀田、川越藩松平、小田原藩大久保、忍藩阿部、関宿藩久世、笠間藩牧野、土浦藩土屋、館林藩松平、高崎藩松平、宇都宮藩戸田などの諸大名が第一次出陣命令をうけた。そして征討軍の総大将には白河の松平定信、副将には水戸の徳川治保と会津の松平容頌が任じられた。
進発は六月十七日とさだめられた。
幕府が征討令を発したのは、寛永十四、十五年の島原の乱における天草征討の軍令いらい百五十余年ぶりのことである。
討つべきは奥州外様六藩、伊達、佐竹、津軽、南部、上杉、二本松の連合である。伊達をのぞく外様五藩は各自さまざまな紆余曲折をへながらも最終的には先祖が誓約した連判状の趣旨どおりに、決起することがさだまったのである。

各藩の首脳が仙台に鳩首して謀議をはかり、密約をむすんだ。

それより先に伊達斉村、片倉小十郎の至急の要請をうけたオロシア第一回の貿易船ニコライエフスク号が毘沙門島をへて女川に入港し、千挺の燧石式ライフル銃と弾薬が輸入されていた。そのときさらに千挺の同銃の買いつけ予約がおこなわれた。このあらたな千挺は佐竹、津軽、南部、上杉、二本松より買いつけの要請があったものである。

外様六藩は幕府軍の出陣態勢にたいしてただちに対応した。津軽、佐竹、南部など奥州北部の大名は軍勢をぞくぞくと南下させはじめた。

伊達も軍勢の半数以上二万を南へすすめ、南方の守り白石城に入城させた。そして白石城から丸森、金山、駒ケ嶺、坂元など南方領界にちかい館へ随時兵を出動できる態勢をしいていた。

伊達自慢の〈四十八館〉はそれぞれ守りをきびしくかためた。さらに幕府水軍にそなえて、石巻港と塩竈港に守りの軍をおいた。

米沢藩上杉も南方会津藩松平、北方鶴岡藩酒井との境界ぞいに軍勢を集結させて、守備をかためた。

外様六藩のうち最南端に位置する二本松藩丹羽家の対応がいちばんむつかしく、微妙であった。

丹羽家の祖は織田信長の重臣として高名な長秀である。信長の死後、豊臣秀吉にしたがって加賀前田に肩をならべる越前百万石を領した。ところがその子長重がわずか十二万三千石に減封され、さらに関ケ原役において西軍にくわわったために改易された。

けれども長重はその後白河十万石として復活し、子光重が二本松十万石に就封し、現在にいたっているのである。

天明の大飢饉によって、同藩では九万の領内人口が六万五千に減った。耕地も荒廃し、作柄も極端におち、藩主長貴は重臣成田頼綏を執政に起用し、藩政改革をおこなわせた。成田頼綏は領内に稲作を指導し、特産物の生産を奨励して、万古焼、紙、畳表、串柿などを開発した。さらに文武を奨励し、倹約につとめ、現在藩財政をかろうじて立てなおす途上にあった。

二本松藩は地理的にいって、外様六藩の最前線に立つことになった。もし二本松藩が幕軍の先制攻撃にあってもろくもくずれおちるとなると、その北に位置する上杉も伊達も雪崩現象をおこす危険があった。

幕府から二本松藩へ懐柔の手がひそかにのびることも懸念された。これは合戦の常道としてもかんがえられた。

そこで片倉小十郎は白石城から五千の伊達勢を二本松城へおくりこみ、前線を強化するとともに、幕府方への寝返り防止策をとったのである。二本松藩そのものを伊達藩の前線基地化したともいえる。

伊達領においては、仙台城に藩主斉村が総大将としており、事実上の最高指揮者片倉小十郎は白石城にあって、伊達藩の実戦部隊を掌握していた。新式のライフル銃千挺は白石城に配備され、南方へむけて筒口をそろえていた。

仙台城下も六月中旬に入ったころから、臨戦態勢に入った。城の石垣や土塁の修築がしきりに

おこなわれ、武装した将兵たちがさかんに城を出入りし、大筒や弾薬がはこばれ、慶長の大坂陣いらいの合戦気分が横溢した。仙台城が築城いらいはじめて敵軍勢をむかえ討つことになるかもしれぬ。

馬場や矢場、射撃場では陣鼓やほら貝をならし、実戦さながらのきびしい訓練を毎日くりひろげ、城下の民の心胆を寒からしめた。伝令の馬はしきりに城内へ出入りした。

領内の出入りの改めがきびしくなった。城下の商人町ではやくも店をとじ、大戸をおろしてしまうところもあらわれた。店をたたみ、一家そろって田舎へひっこんでしまう商家もあった。

その反対に武具屋、鍛冶屋、博労などがにわかに繁昌しはじめた。城下の目ぬき通りばかりでなく、各表通りや裏通りまで、防火のための用水桶がおかれ、砂や土を盛りあげた。

女や子供たちは昼間以外は戸外に姿を見せなくなった。

懸念されたとおり、米の値段が日を追ってじりじり値上りしはじめ、米とともにほかの食糧品がいっせいに値上りをみせた。

錦町の旅籠街も日々あわただしい雰囲気につつまれ、幕軍の密偵の潜入をおそれて宿あらためがおこなわれるようになった。

錦町の旅人宿〈一万坪〉でお蝶は一度宿あらためをうけた。お蝶が仙台に潜入してから、約二ヵ月がたっている。はじめは〈ほてい屋〉に百次郎とともにいたが、前月から一万坪に居をかえていた。

錦町には旅籠から木賃宿、博労宿までふくめると、百軒以上の宿屋がある。仙台はじめ奥州の

諸城下には関東やさらに上方からも長期間行商に入りこんでいる者がおり、そうした連中はおなじ宿に定宿するのが普通である。

お蝶は一万坪の宿帖には、

江戸大伝馬町駿河屋番頭

徳兵衛　五十一歳

女房　せん　四十二歳

と書いてある。これはほてい屋にいたときもおなじである。

徳兵衛は百次郎の偽名である。百次郎は変装によってすっかり五十一歳の行商人になりきっている。

お蝶も変装させられて、四十二歳の年齢がふさわしい顔かたちにかわっていた。少量だが白髪のまじったかもじと目尻に小皺を入れただけで、二十歳ちかくも老けてしまった。

百次郎のほうは根っからの行商人になりきっている。呉服反物、太物、古着などを入れた風呂敷包みを背にして朝早くでかけて、日がくれるころ宿にもどってきた。それが彼の日常になっていた。ときにはお蝶がつき合って、夫婦つれだって行商にあるくこともある。

お蝶は百次郎と奥州へ潜入して、はからずも〈夫婦〉になった。旅人宿の宿帖に名を二つならべて夫婦と書くのさえ夢のようなよろこびだったのに、二人は世間向けに夫婦として振舞う必要があったのである。

相手方の探索をくぐりぬけるためには、夫婦になりきらねばならなかった。お蝶は天にものぼ

るここちであった。正式にはなれぬ夫婦だが、百次郎の任務のうえからお蝶はとうとう念願だった女房になれた。

命をかけた仕事にも、恐れることはなにもなかった。百次郎と一緒なら死んだっていい、それこそ本望だ、というおもいがお蝶にはあった。自分が中町奉行の与力か同心になったつもりである。

磐城の江名で高砂丸から必死の脱出を決行したことが、百次郎との劇的な再会につながった。百次郎が中町奉行与力という耳なれぬ職務の直参だったのはまったく意外だが、とまどいをおぼえたのは最初の一日だけだった。百次郎自身は以前とちがったところはすこしもなかった。以前とかわらぬ百次郎を見て、お蝶は安心した。

お蝶は心底、百次郎の女房のつもりで毎日をおくっていた。宿をほてい屋から一万坪にかえたのは、万一をおもんぱかったからである。

この日、お蝶は市中へ行商にでて、昼ごろ肴町の一膳めし屋に入った。入口ちかくの床几に腰をおろすと、すぐ後から入ってきた中年の客がお蝶のはすむかいの床几にすわった。

その男がときたま気障りな視線をむけてきた。

（いやなやつだ）

とおもってお蝶は視線をそらしていた。

行商焼けのした四十女ふうに容貌をやつしてはいても、ちかくからよく見れば、地顔の器量はかくしきれぬ。

女一人とみて隙をねらっているのだろうと、勝手にかんがえた。てっきり腰つきや胸のふくらみをぬすみ見しているものとおもった。

「ねえさん、火をもってたら、借りたいのだが」

男が煙管をとりだし、煙草をつめて声をかけてきた。

「生憎ですけど、煙草はやりませんので」

にべもなくいってやると、男は店の小女から火を借りて煙草を吸いだした。

「ねえさん、どちらからきたんだね」

しばらく間をおいてはこばれてきた膳のものに箸をつけながら男がいった。

「江戸です」

今度はやや切口上に返事をした。

「やはり、江戸か。そうおもったよ」

馴れなれしく男は言葉をつづけた。

「顔にでてますか」

よせばいいのに、と自分でおもいながらたずねてみた。

「勘でわかった」

ほめ言葉のつもりでいっているようだ。

お蝶が箸をつかっていると、

「商い物は？」

ふたたびたずねてきた。
「ご多分にもれない呉服、太物、古着の類いです」
「大変だな」
「亭主が一緒ですから」
「夫婦での商いか、それならいいな」
といって男はわらったが、目がすこしもわらっていない。お蝶は気味わるさをおぼえた。
「夏は江戸よりも、存外陸奥のほうが暑いようですね」
なんとなく気になって、お蝶も声をかけた。
「今がいちばん暑いときだよ。あと半月もすれば楽になるんだが。ところでいつまでここに」
きかれて、お蝶は返事につまった。いつまでいるかはわからない。事態のなりゆきによる。
「それは商いの出来しだいです」
と誤魔化して、早々に昼餉をすませ、店をでた。
あるきだしてから、
(何者だろう……)
といぶかしんだ。
その後も、その男のことが気になってしかたがなかった。妙に脳裡にこびりついていた。
夕刻、一万坪にもどった。
百次郎は宵になったころ、やっともどってきた。そのあいだ、お蝶はいろいろなことを思案し

ていた。
「ね、百さん、以前から不思議におもってたことがあるんだけど」
百次郎が無事にもどってきた安堵で、ついお蝶は以前の情人のころのような言葉つきにもどった。
この二ヵ月、百次郎が夜無事に宿にかえってくるまで、心配でいたたまれなかった。奥州に入ってからは、二人きりでいるときでも、念のために夫婦の間柄の言葉をかわすようにしていたのである。
(いってみろよ)
百次郎が目顔でうながした。
「常陸屋勘兵衛は江戸でどうして、わたしにちかづいてきたのかしら。勘兵衛はわたしと百さんとの仲を知っていてちかづいてきたんだとおもうけど」
高砂丸にのって勘兵衛の正体をはしなくも知ったときから、その疑問はずっとお蝶の脳裡にひそんでいたのである。
伊達藩の諜報活動にたずさわる重要人物だから、百次郎についてしらべあげ知悉していたのだろうとかんがえていたが、それは伊達藩の諜報能力を少々買いかぶりすぎている。幕府の中できえごくかぎられた者しか知らぬ中町奉行について、伊達藩がそれほどくわしく知っているとはかんがえられなかった。
「たしかに勘兵衛は、はじめからおれとおまえの仲を知ってたようだな」

「どうしてでしょうね」
「おれも、それをずっとかんがえてきたんだ。今だにかんがえつづけてる」
「勘兵衛は百さんをさぐるためにわたしにちかづいてきたにきまってますよ。そしてわたしを道づれにして奥州へひきあげることも作戦どおりだったんです」
「そうらしいな」
お蝶と百次郎のかんがえは一致していた。
「伊達藩では百さんのことを、何年も前から気づいてたんでしょうか」
「謎だ。そこをときあかさなければならない」
うめくように百次郎はいった。彼にもそこが不可解だった。
お蝶もなにか複雑なカラクリがひそんでいるのではないかとおもった。
「……」
「もし、その謎がときあかされたら、伊達藩についてさらに別のことがわかるかもしれない」
「伊達藩ではなにもかも知っているのかもしれませんよ。気味がわるくなってきました」
お蝶はおそろしそうにかんがえこんだ。

「宿あらためだ」
そういって町奉行所の役人たちが一万坪に入ってきたのは、百次郎とお蝶が宿で夕餉をおえた直後だった。

一万坪では階下に客間が四つあり、二階に五つある。百次郎とお蝶は階下のいちばん奥にいた。
長吉はべつの旅人宿におり、白河へ左近をおくりとどけてもどってきた伝兵衛もまたべつの宿をとっている。
「お宿あらためでございます！」
一万坪の主人清七の声が百次郎のいる部屋にもきこえた。町奉行所役人がいきなり客間に踏みこんでくるまえに、清七が気をきかせたのである。
百次郎とお蝶は顔を見合わせた。今からじたばたしてもはじまらぬ。
「おせん、おちつけ。おれたちには何もあやしまれる節はない」
百次郎はそういった。
「はい、徳兵衛さん、わかりました」
お蝶がわらってこたえた。
待つほどもなく役人たちがあらわれた。
「あっ……！」
先頭にたって部屋の中に入ってきた男を見て、お蝶がおもわず声をあげた。
男の視線もお蝶をまっすぐにとらえた。
今日の昼間、一膳めし屋ではなしかけてきた男ではないか。
入ってきたのはその男を入れて四人である。その男は御用聞きで、あとの三人が町奉行所役人

のようだ。大勢で手分けをして方々の宿をあらためてまわっているのだ。
「やあ、昼間のねえさんだな、これは奇遇だ」
男はお蝶を見ていった。
今度も顔はわらっているが、目だけはわらっていない。奇遇なんかではないのだ。
「ずいぶんご丁寧なおあらためではありませんか。伊達さまのご城下では下あらためもやるんですか」
お蝶は持ち前の負けぬ気でいった。
今日の昼間、お蝶はすでにねらいをつけられていたのである。
「ねえさん、本当に江戸からきた行商人か」
男がたずねた。
「わたしの家内ですが、なにかご不審でも……」
百次郎は下手にでてきいた。役人というのはどこの者でもこちらが高っ調子ででれば、かならずカサにかかった態度にでてくるものだからだ。
「女房だけじゃない。不審はあんたにもあるんだ」
町奉行所役人が百次郎をにらみつけていった。
「滅相もありません。わたしどもにどんなご不審が」
一応百次郎はしらばくれた。が、シラを切りとおせるものではないと判断していた。
「それはおのれがいちばんよく知っているだろう」

「おもいあたる節はなにもありません。なにかの勘ちがいでは……」
百次郎がいうと相手はあざわらった。
「だったらおもいあたる節をおしえてやろう。これから町奉行所にきてくれ。たっぷりとおしえてやるから」
百次郎は相手の出方をうかがいつつ、この場を切りぬける方法をかんがえていた。こういう場合のことは、奥州に入ったときからつねに予想していた。いくらかの準備とこころがまえはいつもしてある。
「いやだと申しましても、腕ずく力ずくで引ったてていかれるでしょう。仕方がありません。町奉行所へまいりましょう」
百次郎はそういって、ひとまず相手を安心させた。
「観念したか」
例の男がいった。
「とんでもありません。町奉行所でわたしともども罪科のないことの証しをたてるつもりです」
いいつつ百次郎はお蝶に目で合図をおくった。
「そういうことになれば結構だがな。正体が露見して処刑をうけることのないようにしろよ」
「仕度をいたしますので、少々お待ちになってください」
いいつつ百次郎は手行李と胴乱がおいてある箪笥の前へいった。
お蝶も押入れをあけて、仕度をととのえた。

短筒は肌身はなさず懐におさめている。残念だが、早合から弾丸と火薬をつめ、火縄に火を点じる暇がないので、短筒はつかえぬ。刀は箪笥の後にかくしてある。

百次郎は手行李をあけた。鶏の卵が数個入っている。鶏の卵はいちばん簡便な食べ物である。

百次郎は卵を二つとりあげた。

役人たちがなにをするのかといぶかしんだ。

その一瞬、百次郎は卵一つを彼らの面前にむかって投じた。

轟音が炸裂した。と同時に白煙がもうもうと噴きだし、たちまち部屋中に充満していった。

「こやつっ」

「はかったな、逃がすな！」

「つかまえろ！」

混乱の中で役人たちは口々にわめいた。けれども胆をぬかれたうえに、白煙で目をやられ、さらにたちこめる煙に巻かれていった。

百次郎はもう一つ投げつけた。ふたたび轟音と白煙がおこった。

「見えんっ」

「追えっ、逃げたぞ」

「襖と障子をあけろ！」

百次郎が投じたのは〈鳥の子〉と呼ばれる煙玉である。忍者などがこういう場合につかう非常用の隠し武器だ。鳥の子紙をのりばりして張り子の玉にし、その中に焔硝と発煙剤がつめてあ

る。

かねての打ち合わせどおり、お蝶は脱兎のごとく部屋をぬけだし、廊下を駆けて、宿の庭をとおり、裏口から脱出していった。

百次郎は箪笥の裏から刀をとりだし、役人たちが右往左往しているのを尻目に庭へとびだし、おなじく裏口から逃げた。

一万坪の裏口周辺は木賃宿や博労宿が密集するところで、路地、横丁、裏道、ぬけ道が網の目のようにとおっている。

百次郎は脇目もふらず、せまい道を右に左にはしりぬけた。

彼の前をはしるお蝶の姿が見えた。道はこみ入っているが、何度もこころみにくぐりぬけたことがあるので、迷いもなかったし、袋小路に入ることもなかった。

百次郎はやがてのうちに、〈日の出屋〉という宿の裏口ちかくにでた。ここに伝兵衛が宿をとっている。

ところが、裏口の前までいってみると、周囲に大勢人がでており、騒々しい雰囲気がたちこめている。おだやかならぬ気持でちかづいていった。

「何があったんでしょうか」

心中の動揺をかくして、さりげなくたずねてみた。

「宿あらためと捕り物があったようです」

となりの宿から様子を見にでてきた男の客がこたえた。

「つかまりましたか」
「どうですか、相当はげしい斬り合いがあったようです」
「そうですか」
「幕府の隠密だとか」
「よく見つけたもんですね」
「隠密じゃあ、ころされたって仕方がないでしょう」
相手がいうのをきいて、百次郎はうなずいた。隠密であることが露見した以上、たとえ公儀が派遣したものでも、どんなころされ方をしても文句はいえぬ。それが隠密の宿命である。
（よもや……）
伝兵衛の身の上をおもんぱかったが、今はどうすることもできぬ。不安がいっぱい胸のうちにおこったが、幸運をいのるしかなかった。
百次郎はそこを去って、さらに一丁ほどはなれた〈野中屋〉という宿にちかづいていった。そこに長吉が逗留しており、お蝶はそこへひとまず逃げこむ手筈になっていたのである。
だが、ここにも不用意にはちかづけぬ。
（お蝶は大丈夫だったろうか）
（長吉は無事か……）
こころをくばりながら、用心ぶかく裏口へ接近していった。
（……？）

勘がひらめいた。ここもなんとなく気配がおかしい。
人がでており、野中屋のほうをうかがいながらひそひそと話し合っている。日の出屋とおなじような不穏な気配が感じられた。
うかつにちか寄っては、百次郎自身もあぶない。
いったんその場をとおりすぎ、表口のほうへ用心ぶかくちかづいてみた。こちらにも人々が遠まきに寄りあつまっている。
「どうかしましたか」
たずねてみた。
「大騒動がありましたよ。幕府の隠密が宿の客に化けてひそんでたそうです」
老人がこたえた。
「その者は？」
「逃げだしましてね、まだつかまってないようですよ。早くつかまってほしいもんです」
老人は憤りをこめていった。
百次郎はその場をはなれるしかなかった。お蝶の姿は見えなかった。
さすがに不安がこみあげてきた。一万坪、日の出屋、野中屋三ヵ所の隠れ場所があらいだされ、ほとんど同時に踏みこまれたのだ。伊達藩の捜索の輪がちぢみつつある。
百次郎は城下の闇の中をしばらくさまよい、それから鶴ケ谷へむかった。錦町の隠れ場をおそわれた場合、鶴ケ谷へおちのびる約束をしてあった。

鶴ケ谷

奥州街道、水戸街道に雲霞のごとく幕府の軍兵がみちた。旗を押したて、幟をなびかせ、関東の譜代大名の大軍勢は北へ北へとすすんでいく。

炎暑の中の行軍であった。藩主みずから軍装をこらし、馬にのって家老、重臣以下の将兵たちをしたがえ、一路奥州へむかった。関東北部に領土をもつ諸大名が途中から行軍にくわわるため、北へゆけばゆくほど、軍勢はいっそう大きくふくれあがり、街道からあふれんばかりとなってすすんでいく。

炎天下におもい具足をつけて進軍するので、馬上汗みずくとなって行軍を指揮しなければならなかった。

先頭の軍勢が白河や勿来の両関にちかづいても、後尾の軍勢はまだ江戸にあった。総軍十万をこえる軍兵が奥州征討にむかったのである。

かつての坂上田村麻呂、文室綿麻呂、あるいは前九年、後三年の両役における源頼義、義家の征夷軍、豊臣秀吉における奥州征討軍が、ここに再現されたのである。

街道沿いの本陣、脇本陣をはじめとする旅籠や寺院、神社も旅宿の軍勢でごったがえした。あふれた軍勢は宿場はずれで野営することになる。

沿道の領民たちは農繁期のまっさかりに道中伝馬の助郷にかりだされた。領民たちのなげきははかり知れなかった。

幕軍の進軍中は各宿場における旅人の宿泊はもとより、奥州街道、水戸街道は通行さえできぬ状態がつづいた。

沿道の城下や宿場では、いっさい火を焚くことを禁じられ、商売のできぬ店も多く、幕軍が通過しおわるまで店をとじつづけていなければならなかった。そのほか多種多様な軍令が洪水のようにだされて、領民たちは息をひそめるようにしてひたすら大軍が通過するのを待った。

加賀藩前田、尾張藩徳川、津藩藤堂、彦根藩井伊などの親藩、譜代、外様を問わぬ諸雄藩にたいして、七月朔日の進発を期して第二次の出陣命令がくだった。幕府は関東ばかりでなく、東海、中部、北陸、上方の諸大名までも動員して奥州征討の意気と決意を天下にしめしたのである。

第二次出陣命令で、さらに約十万の軍勢が奥州へむかうことになった。幕府は圧倒的な大軍を動員して、奥州外様六藩の足並みがまだそろわぬうちに、一気に勝敗をきめてしまおうという作戦である。

ひた押しに大軍をすすめ、白河の攻防の拠点を蹴ちらし、上杉、二本松、南部、佐竹、津軽の諸藩には目もくれず、まず伊達藩を全力でもって叩きつぶしてしまう。同盟の中核伊達藩さえ打ちのめせば、ほかの五藩はたたかわずして分断、降服させることができると踏んでいた。けだ

し、これは戦略上の正攻法といえた。

幕府のこの戦略を、伊達藩もいちはやく見ぬいていた。白石城の片倉小十郎は、力押しに寄せてくる幕府の大軍勢を前にして、必勝不敗の戦略戦法をねりあげていた。

小十郎景家は今年五十一歳、景綱からかぞえて九代目の片倉家当主であり、白石城主である。白石城はいうまでもなく、伊達藩の南の守りである。

その守りを伊達藩最大の重鎮である片倉家の当主は、慶長七年いらい約二百年間連綿とつとめてきた。そして今、はじめてその役目の真価を問われようとしている。

そのうえ伊達藩の最高指導者として、伊達藩ばかりでなく奥州外様六藩の運命を双肩になっていた。政宗がいだいた奥州の理想と野望は百五十年後の景家によって、今ようやく実現されようとしている。

小十郎はさいぜんから黙然と目をとじていた。

彼の前には、仙台から足をはこんできた寒河江兵部が腕をくみ、両者のあいだにひろげられた奥州、関東の図面をにらんでいる。

「この戦は絶対に負けられぬ。よし勝てぬとしても、負けはならぬ」

小十郎の胸裡にはすでに必勝不敗の戦略戦法が浮かびあがっていた。奥州軍と幕軍が正面から衝突し総力戦をまじえれば、白河の攻防が勝敗を決することはあきらかである。

しかし、もしそういう展開になった場合、勝者、敗者ともに大きな打撃をこうむることは覚悟しなければならぬ。しかも勝敗を決するために、半年あるいは一年をついやすとしても不思議ではない。

小十郎はできればこういう戦はさけたいとおもっている。

「長びいてはこちらに不利、むこうに有利でございます」

小十郎の意中は兵部にも察することができた。いかに新式の兵器を有するとはいっても、長期戦になっては幕軍を相手にするのはくるしい。

「できるならば短期決戦、即戦即決でいきたい。わが方が勝つ方法はおそらくこれしかない」

「それには緒戦において大勝利を得て、連戦連勝しなければなりません。その方略がございますか」

兵部が難問を発すると、

「ある――」

小十郎は兵部の予想を裏切って、力づよくこたえた。

兵部はだまった。小十郎の答えをうながすための沈黙であった。

「まず緒戦に局地戦をえらぶ。そして無理をしてでもこれに大きな戦力をそそぎこみ、先手をとって疾風迅雷のように急襲し、圧倒的に敵をたたくことじゃ」

小十郎がいっているのは、いうところの電撃作戦である。

「そして……」

と兵部はその先をたずねた。

「そして、和平交渉に持ちこむ。相手は緒戦の大敗北に意気消沈し、自信をうしない、和平に応

じてくることは疑いない。新式銃の威力を、誇大にいいひろめることも必要じゃ」

小十郎は自信をもっていいきった。

「かんがえられる最上の作戦でございましょう。たとえ戦に勝とうとも大量の血をながしましては、意味がありません」

小十郎は昨今にいたってこの作戦をかんがえたのではないはずである。小が大を制する策戦はこれしかない。六藩同盟にたちあがったときから、すでにこの策を胸中に秘めていたはずだ。

オロシア渡来のライフル銃を千挺まで白石城にはこばせたのは、緒戦の先制攻撃に大勝利するためである。しかも開戦に先だって、小十郎はすでに和平交渉を念頭に入れていた。それは双方がともにたたかい、ともにたおれることをおそれたためである。

「兵部だったら、まずどう攻める」

小十郎が問うた。

図面に見入って兵部はしばらくかんがえた。

「会津松平、でございましょうか」

兵部はおもむろにいって、図面上の猪苗代湖のあたりを指さした。

会津の北方は上杉であり、東北は二本松である。白石城はそのさらに東北にあたる。

小十郎はうなずいた。

「上杉、伊達、二本松の軍勢をもって先手をうって怒濤のごとく会津領へ侵入し、全力をあげて会津城を攻めおとす。幕軍は主力を白河におき、会津は手薄になっておる。ライフル銃千挺でつ

るべ撃ちすれば、堅固の城といえどももちこたえられまい」

「左様でございましょう。会津藩松平中将どのは幕軍の副将でございます。副将の城がおちましては、幕軍の意気はおとろえるでしょう」

「ライフル銃の威力がこの戦のきめ手となる。幕軍はこの銃の威力のまえに手も足もでまい。ただ驚嘆し、あれよあれよといっている間に敗退するであろう。長篠の合戦における武田軍をおもいうかべるといい。練り雲雀の例があろう」

小十郎は自分の戦略に万全の自信を持っているようだ。十年来あたためつづけてきた秘策だともいえよう。

「開戦の時期は？」

「はやいほうがいい。先手必勝、幕府の大軍が奥州に勢ぞろいするまえにたたくべきだ。上杉の家老直江どの、二本松の執政成田どのと明後日、会談いたす。兵部もそれにくわわるよう」

「はっ、かしこまりました」

兵部は小十郎の戦略に異をとなえるところはすこしもなかった。危惧するところもなかった。

白石城には小十郎の手勢五千に、仙台から派遣された二万の軍がくわわって、いつでもどこへでも出陣できる態勢にある。

白石城は阿武隈川の支流白石川にのぞむ丘陵にある。本丸はその頂きにあり、堅固無類な石垣と土塁でかこまれ、北東に枡形門（表門）がひらかれ、東南に裏門があって三の丸へつづく。二の丸は本丸の西方に土塁によってかこまれ、三の丸は本丸および二の丸を取り巻くように高い土

塁でかこまれていた。

南の搦手のほうに南の丸があり、二の丸の西方に西の丸がある。そしてこれらの城郭をとりかこむように沼の丸、巽曲輪がもうけられ、侍屋敷が隙間なく配置されていた。

幕府の一国一城令にも例外としてみとめられ、陪臣の居城としては全国に稀なる三層櫓をもうけた堅固な三段の城である。

この城に拠って、小十郎は天下二十万の軍勢をささえ、翻弄しつくして、幕府を相手に奥州の〈意志〉をつらぬく気でいた。

千挺のライフル銃を装備した伊達の鉄砲隊は秘密兵器として城内にかくされていた。

仙台城下から東北に一里半、鶴ケ谷の菖蒲沼に蓮の花がひらいた。四月の菖蒲にかわって、池の面は蓮の葉でうずまり、そのあいだに白や紅の花がきそうように咲きほこっている。

松沼、中堤、北堤、丸沼など鶴ケ谷一帯の沼々にも同様の風景がひろがっている。

鶴ケ谷は鶴と蓮との名所であった。かつては仙台城下ばかりでなく、その時候になれば領内各地から見物の客があつまってきたものである。

ところが今では、鶴の時季にも蓮のころにも人があつまってくることはない。

過ぐる天明の大飢饉で何万人もの飢餓の民衆がここに群集し、最後にはたがいの肉を千切り、食み合う地獄の世界を現出し、白骨を累々とかさねていらい、人々がおそれてちか寄らなくなった。けれども蓮の花は毎年季節をたがえず、六月半ばを過ぎたころにはかならず沼や池をいろどっている。

廃寺無縁寺の境内の池にも、蓮の花がひっそりと咲いている。天明のころ、この池にも何十体もの白骨がしずんでいた。

池のほとりにひっそりと立って、蓮の花に見入る六部姿の女がいる。お蝶である。

天蓋こそかぶっていないが、白木綿の着物に白い手甲、脚絆をつけ、鈴をかけている。六部は法華経六十六部を一部ずつ全国六十六ヵ国の国分寺に奉納してまわる行脚僧である。

お蝶は錦町の一万坪で虎口をのがれていらい、六部姿に変装して、無縁寺の無住の僧房に住みついていた。寺の住職も、供養にくる参詣人もなく、隠れ場所にはもってこいのところであった。

お蝶はしばしたたずんだ後、池のほとりをはなれ、かつての方丈へちかづいていった。この方丈には、今では乞食が何人か住みついている。

お蝶は方丈の裏手の雑木林へ入っていった。かつて、〈直参の士ここに果つ〉の九文字をきざんだ楓の木があったというあたりである。

この雑木林の中にも、以前は白骨があちこちにちらばっていたといわれている。林の中は下草におおわれ、蔦類もはっていてあるきにくい。

お蝶は一つの目印をさがして前方へすすんだ。

とある木の切り株があり、そこに人の頭の倍くらいの大きさの石がおいてある。鶴ケ谷にきてから、百次郎が墓石のつもりでおいた石であった。

切り株はどうやら楓のようである。百次郎はそこを兄の墓地に見たてて、ときたまきては香花をたむけていた。

お蝶もときどきここにきて、そっと手を合わせてかえるのである。

百次郎が兄の跡をついで中町奉行与力になった経緯のあらましはきいていた。百次郎が生涯嫁をもたぬという気持もなにかわかるような気がした。

お蝶は切り株と石の前にたって合掌し、百次郎の任務がなんとかとげられるよう祈願した。そして雑木林をでてきた。

方丈の裏をとおり、かつての本堂の附近まできたとき、参道をあゆんで一人の武士が本堂へちかづいていく姿が見えた。

参詣人とはめずらしいことだとおもって、お蝶はその人物に視線をそそいだ。なにかしら気になる風情が感じられたのだ。

その瞬間、お蝶はおもわず足をとめた。

（百さんっ！）

お蝶はおどろきの声をあげそうになった。

あまりにも百次郎とよく似ていた。声をあげなかったのは、百次郎が現在乞食坊主の姿をしており、けっして侍姿などしていないことがわかっていたからである。

お蝶は自分の目をうたがった。容貌、骨柄は百次郎とそっくりだが、年齢はやや年嵩のようだ。背丈も肩幅もほとんどかわらない。見たところでは、かなり高位高禄の侍である。

胸の鼓動が早鐘のように鳴りだした。体の血がはげしくまわりだした。

お蝶は食い入るようにその侍を凝視した。見れば見るほどよく似ている。あるき方まで似ている。

侍は本堂の前に立ち、しばらく合掌していた。

お蝶は凝視しつづけた。

（まさか！）

途方もない想像が浮かんで、背筋がつめたくなるようなおもいにうたれた。

お蝶は自分の尋常でない想像を否定した。そんなはずがないからである。お蝶は棒立ちになってその場をうごくことができなかった。

侍の合掌はやまぬ。長い合掌がつづいている。

何をとむらい、供養しているのであろうか。飢饉のとき、この寺で餓死していった肉親か知人でもいるのだろうかとおもった。

ようやく侍が合掌をおえ、顔をあげた。

そして参道をひきかえしてきた。

お蝶との距離がちぢまった。

侍が視線をむけてきた。

お蝶はたじろがず、眸をかえした。

（……！）

（……）

こみあげてくるものがいろいろあった。何かいわねば、と必死でおもった。このまますれちがい、わかれてしまっては重大なことが終世わからぬままにおわってしまう。

「百次郎さま……」

自分でもおもいがけぬ言葉が口をついた。

その侍の顔にけげんな色が浮かび、ついで驚きがかすめた。

「百次郎さま」

お蝶はもう一度いった。

相手はお蝶を正面から凝視してきた。顔から足先までながめてきた。

百次郎とくらべると、やや眸が暗い。苦悩の翳が顔貌をおおっている。

「わしは一ノ関三郎兵衛と申す」

侍がゆっくりと口をひらいた。

澄んでいるが、しずんだ声だ。

「一ノ関三郎兵衛さま……」

「左様、伊達家臣じゃ」

鬱然とこたえた。

「さようでございましたか。お人ちがいをいたしまして、とんだ失礼を申し上げました」

「百次郎というのは、その方の何にあたる？」

「いえ、お人ちがいでございました。申しわけありません」

「左様か」

一ノ関三郎兵衛と名乗った男は、そのまま参道をあるき去っていった。

お蝶はその姿が消えてなくなるまで、その場に立ちつくしていた。

男の声がそのまま耳の中にのこっている。お蝶には感じるものがあった。声音が百次郎とそっくりであった。暗闇で声だけきいたら、百次郎と区別ができぬだろうとおもった。

もし百次郎がこの人物と出会ったなら、どうするだろうとかんがえた。

（黄泉の世界から死んだ千太郎がもどってきたのだろうか）

さいぜん想像したことが、ふたたび胸のうちによみがえってきた。お蝶はややもするとその想像にのめりこんでいきかけた。

（そんなはずはない）

お蝶はまたその想像を打ち消した。

北海の守護神

海上はまだ暗いが、東天に明星がまたたいている。暁にはまだ少々間があった。

船はその海上をすすんでいる。十石積みの漁船である。

櫓をこいでいるのは伝兵衛で、乗っているのは漁師をよそおった百次郎と長吉、東郷松之助である。昨日、牡鹿半島から大漁でにぎわう金華山へわたり、朝のはやい漁師たちの出漁にさきだって、手ごろな漁船を一隻ぬすみだして金華山港をでたのであった。

船は一路北北東へむかってすすんでいる。洋上を土用東風が吹きわたっている。目ざすは毘沙門島である。

海猫もまだ眠りからさめていないとみえ、あのかまびすしい声はきこえない。

松之助が定信の伝言をつたえに白河から鶴ケ谷にやってきたのは一昨日だった。最上左近は先月五月大年寺山をからくも脱し、伝兵衛にみちびかれてようやく白河へ逃げおちていた。

その左近が先だって、ようやく自分から定信にたいし全面的にこころをひらき、例の最上家につたわる巻物を披露し、さらに神文誓紙の写しの末端の余白部分を蠟燭の火であぶって見せた。

この神文誓紙を連判状といたし、毘沙門天の腹中に蔵しておくもの也

以上の文字がやがてうっすらと紙面に浮きあがってくるのを定信は確認した。松之助はそれを百次郎につたえるために、危険をおかして伊達領に潜入してきたのであった。

長吉は、金華山の北北東十浬の沖合に毘沙門島と名づけられた島があることを知っていた。古来、そこは北海の守護神をまつる島として、附近の者たちもおそれ敬ってちか寄らぬ海域であった。

その島のいずこかに、伝教大師最澄がみずからきざんだとつたえられる毘沙門天像が安置されていることも、長吉はかねてきいていた。

百次郎の兄千太郎が伊達陰謀の証拠のありかをさぐりあてたというのは、そこにちがいなかった。

それで一行四人は漁船を駆って毘沙門島へむかったのである。

海上の東天がこころもち白みはじめた。もう暁がすぐちかくまできている。

伝兵衛の櫓さばきは力づよく、着実である。毘沙門島まで半分ちかくきていた。

波はさほど荒くなかった。一行は海上のしずけさをひたすらねがっていた。荒波に会えば、このていどの漁船など木っ葉のようにあしらわれてしまう。

四人はほとんど無言であった。

百次郎は千太郎のことをおもっていた。兄ははたしてこの毘沙門島まできたのであろうか。それともくる以前に無念の死をむかえたのであろうか。

いずれにしろ連判状のありかをここまでさぐりあてた兄は、中町奉行与力としてなみなみならぬ力量の持ち主だったといえる。

百次郎は中道にたおれた兄の遺志と職責をついで、ついに陸奥の孤島にせまっていた。感慨胸にせまるものがある。あとわずかで奥州百五十年の野望と陰謀を証拠だてる連判状を手にすることができるかもしれぬ。

じっとしていても胸のふるえるような興奮におそわれた。

「明けてきましたね」
松之助が行く手の洋上を見つめていった。
東天が徐々に白み、灰白にかすんでいる。
船中の四人の影がぼんやりと浮かんできた。だが、まだ海の色の判別はつかぬ。
やがて……、暁の洋上に、うっすらと島影が見えてきた。
「あれが足島だとおもわれます」
長吉は海上の図絵をしらべてきていた。足島は江ノ島列島の南端に位置している。
「伝兵衛、大分きたな」
百次郎は伝兵衛をねぎらった。
このたびの任務では、伝兵衛の船漕ぎの腕に何度もすくわれている。
伝兵衛はうなずいて漕ぎつづけた。
「伊達の軍船や見張船に気をつけろ」
明けてくれば、それへの注意もおこたることはできぬ。
伊達の水軍もすでに臨戦態勢に入っている。発見されれば、銃撃をあびせてくるのは必至である。
こちらの漁船にはそれに応ずるだけの備えはなかった。漁師をよそおいぬくしか方法はないのだ。
ただ伊達の水軍は幕府水軍の北上にそなえて、石巻、塩竈以南に軍船を集結させている。した

がって伊達海域とはいっても、金華山以北の警戒と防備はかなり手薄になっていた。
奥州軍と幕軍との戦端はすでにひらかれていた。昨月（六月）末の未明、約五千の上杉軍がとつじょとして米沢街道を南下し、檜原峠をこえて会津領に攻めこんできた。
会津松平勢は北方をきびしく警戒していたが、それは伊達の白石城と、伊達の前進基地化した二本松城への守りであった。それがあまり予期せぬ米沢街道からの敵襲をうけて、もろくも前線の守りを突破された。
上杉軍の指揮は家老直江五郎太夫がとって、電光石火会津領を侵略していった。
松平勢は防戦につとめたが、一度後手をふんだ態勢をたてなおすまでの力はなく、意気あがる上杉軍の敵ではなかった。松平勢は各所の戦いで敗れ、ずるずると敗走をつづけた。
会津藩主松平中将容頌は急遽、白石と二本松へそなえていた軍勢を上杉軍へむけたが、怒濤のごとき敵勢をくいとめることは困難だった。
さらにその隙をついて、二本松城から伊達の精鋭一万五千と二本松勢三千が会津領へ押しだしていった。これまた各地の戦線で会津松平勢をうちやぶって、破竹の勢いで進撃した。
幕軍は先手をとられた劣勢を必死で挽回すべく、白河街道、会津西街道、磐城街道などからさかんに諸大名の援軍をくりだし、会津へ進発させていた。
奥州軍の緒戦における電撃作戦はまず成功したといえる。両軍の士気は奥州軍がいちじるしくまさっており、幕軍のほうにははやくも厭戦気分さえただよいはじめていた。
「漁船が見えます」

伝兵衛が漕ぎながらいった。

船は今、足島の東方を通過していた。暁の洋上はるかに、ちいさな船影がいくつも見えた。いずれも地元の沿岸漁船らしかった。

こちらの船をあやしむ船とてない。

しばらくいくと、さらに大きな島影が視界に入ってきた。江ノ島列島中最大の江ノ島である。その前面に、漁船とおぼしき十数隻の船がたむろするのが見えた。

「ただの漁船でしょうか」

気になると見えて、長吉が遠望しながらいった。

「よもや、伊達の水軍ではないだろう」

松之助が口をはさんだ。

今は詮索に手間どっている場合ではなかった。百次郎は船を目的地へむかってすすませた。

伊達の注意は今、会津攻略戦にあつまっている。自国の内懐ふかくにある毘沙門島への警戒など、そうきびしくやっているはずがなかった。

伊達の領海内ふかくとびこむには、今が絶好の時機だったのである。

江ノ島がやがて遠くにかすんでいった。

伝兵衛の船を漕ぐ手はすこしもおとろえていない。力づよく目的地へむかってちかづいていった。

海上の夜気がすっかり消え、払暁をむかえた。

波はいくぶん高くなってきた。風もやや強さが増した。船の揺れがくわわった。

船は波浪をきってすすんだ。

海上にぽつんと黒い点のようなものが見えてきた。

「毘沙門島だ！」

はじめに長吉が声をあげた。

「うむ！」

百次郎も毘沙門島だとみとめた。みじかいうなずきの中に大いなる感動をこめた。

松之助も感慨の声をはなった。

伝兵衛だけは無言で、ひたすら漕ぎつづけた。

海猫の声がきこえはじめた。群をなして空に舞い、水面をかすめて飛んでいる。

このあたりに船は一つも見えぬ。毘沙門天の怒りをおそれてちかづく者がないという伝説を裏づけている。

毘沙門島はしだいにちかづいてきた。ごつごつとした島影が見えた。

「その名にふさわしい島の形だ」

百次郎は第一印象を口にした。

島の周囲の怪石奇岩がはっきりと見えてきた。そのあいだから松の巨木が雄渾に幹や枝をのばしている。

大石や岩が打ち寄せる波をこばんではじきかえしている。絶海に孤立した島というにふさわし

い。

一行は毘沙門島を正面に見て、しばし息をのんだ。船がちかづくにつれ、風もつよく波も荒くなった。

「ちかづけますか」

長吉が心配した。

「まわってみよう」

伝兵衛はこたえて、船を大きく右へ旋回させた。

荒々しい島の光景はそのままつづいている。海猫が不気味な声をたてている。明けはなたれた空が、見上げる絶壁の岩の上にのぞいた。

「おそろしい島ですね」

松之助が正直な感想を口にした。

「漁船がちかづかぬというのも、うなずける」

長吉も同感のようだ。

船は島の周囲をまわった。

ところが西側へまわったとき、一転して景色がかわった。島の形が中央でくびれており、くびれたところに波しずかな入江がひろがっていた。

「つけられますよ」

「あそこから上っていけるな」

自然の妙というほかはない。島の表と裏が極端なちがいを見せている。

船は入江へむかってちかづいていった。

入江に、船影も人影も見えぬ。

「気をつけて見ろ」

百次郎は念のために注意をあたえたが、かわった様子はなかった。入江の中は風もなく、波もいたっておだやかだ。

伝兵衛はゆっくりと船を入江の中へ漕ぎすすめていった。

百次郎は用心のために一応短筒を装塡し、火縄に火を点じた。

長吉も猟師筒に装塡し、火縄の仕度をした。

入江は遠浅ではなく、格好の岩場がひろがっている。

船は岩礁をさけて、岸へ接していった。

まず長吉が岸へ飛びうつった。

つづいて松之助、百次郎の順であがった。

伝兵衛は船をつけるところをさがし、最後にあがってきた。

「何があるかもしれぬ。誰がひそんでいるかもわからぬ。十分注意しろよ」

百次郎は先をいく松之助に警告した。

松之助はうなずいてすすんでいった。

「わたしが見張りにのこっていましょう。万一ということがあるかもしれません。そのときはこ

れでお知らせします」
そういって長吉は猟師筒をかかえて岩場にのこった。
「おやっ」
先頭をいく松之助がそのとき声をあげた。
「洞窟がある」
伝兵衛がそれに応じた。
百次郎も島へあがる反対の方角に、高さ一間半くらいの洞窟がぽっかりと黒い穴をあけているのを見つけた。洞窟の入口ちかくだけには白い波しぶきが散っている。
百次郎は瞬間にひらめくものがあった。
(洞窟の中に毘沙門天が……)
伝兵衛もおなじことをおもったようだ。
「あの洞窟ん中じゃありませんか」
一行は一度島の高台へあがって、おりてきた。
島はおよそ方五町の広さである。とくに島の東側は外洋から吹きつける強風と打ち寄せる大波で、祠をもうけるようなところはない。
一行は洞窟へむかった。伝兵衛が船の龕灯をかかげて、先頭にたった。
波しぶきをさけて、洞窟の入口に立った。
奥からひんやりと肌につめたい風が吹き寄せてきた。入口から数間くらい先まで水がきてい

る。
明りをたよりに、一行は奥へすすんでいった。
足もとはすべりやすいし、洞窟の天井からときに水滴がしたたりおちている。気をくばりながら前進した。
そのとき前方で、奇妙な音がした。
一行が身がまえるとほとんど同時に、すさまじい羽音のようなものをたてて驀進してきたものがある。それも一つや二つではない。同時に五つ六つくらいのものがおそってきた。
「伏せろ!」
百次郎はさけぶとともに足下に身をかがめた。
伝兵衛もおなじ姿勢をとっていた。
松之助はそれが自分の顔をかすめた瞬間、
「蝙蝠だ」
といって腕ではらい、叩きおとしていた。
蝙蝠の群は羽ばたきの音をたてて、洞窟の天井を飛びかった。
蝙蝠にはするどい爪をもった長い前肢がある。この爪で木の枝や岩にぶらさがる。これで顔をやられたら、ひどい怪我を負うことになる。
一行はしばらく様子を見て、ふたたびすすんでいった。
やがて、龕灯の明りの中に、古色蒼然たる祠が見えてきた。

「あった！」
「社だっ」
伝兵衛と松之助がほとんど同時に感激と興奮の声をあげた。
厳粛な雰囲気の中にちいさな鳥居がたっていた。その奥にやや小ぶりな神殿がある。
三人はしばし長い歴史を秘めた神殿のまえに棒立ちになった。
「ここだ」
「毘沙門天の像があるはずだ」
三人は鳥居をくぐった。
神殿は洞窟の天井すれすれにつくられている。扁額がかかげてあるが、長い年をへて古び朽ちかけており、文字を読みとることはできなかった。
祭神はいうまでもなく、北方世界を守護する神、毘沙門天である。
「扉をあけろ」
百次郎が命じ、伝兵衛が手をかけた。きしみながら扉がひらいた。
一同は眸をじっとすえた。
毘沙門天像があらわれた。背丈は約五尺。忿怒の形相をあらわにし、甲冑を身に着け、左手に宝塔をささげ、右手に鉾を持ち、たけだけしく北方をみすえて佇立している。
その忿怒に一同は射すくめられた。荘厳な雰囲気におしつつまれ、身のひきしまるものをおぼえた。

（これが、伊達の北海の守護神だ）
伝教大師最澄がみずから精魂こめてきざんだ像だ……、と百次郎は厳粛なうちにかんがえた。
伊達六十二万石と奥州の安泰のために、悪魔退散、怨敵退治の祈願にこたえるべく、この岩屋から北の涯ての海に睨みをきかしているのである。
「毘沙門天をあらためてみろ」
百次郎は伝兵衛に命じた。
「はっ」
伝兵衛ほどの剛の者が、この一瞬わずかながらためらいを見せた。
おもむろに伝兵衛は二、三歩すすんだ。そして敬虔に礼拝し、合掌してから毘沙門天に手をふれた。
指先でこつこつとたたいて、その音をきいた。数ヵ所たたいていくうちに、あきらかに内部が空洞になっている響きがした。
伝兵衛が確信のこもる眼差を百次郎へむけた。
百次郎は無言でうなずいた。
伝兵衛はふたたび毘沙門天へ手をかけた。そして力をこめると同時に、像が腹部から真っ二つに割れた。
見ている百次郎と松之助はおもわず息をのんだ。毘沙門天の腹部にぽっかりと穴があいている。

まず伝兵衛が深さ一尺余、直径四、五寸の空洞部分をのぞいた。百次郎もちか寄って見た。松之助ものぞきこんだ。

龕灯が照らした穴の中には底が見えた。何も入っていない。

「ない」

伝兵衛はひくく声をもらした。そして底の下に二重の細工がほどこされてないか仔細にさぐってみたが、さらなる仕懸はなかった。

「どうしたことだ」

「空っぽじゃないか」

一同は期せずして呆然となった。百次郎は伝兵衛と顔を見合わせた。

「たしかにここにあったんだ。長い年月この穴の中にしまわれていたことは間違いない」

百次郎はそう確信した。

「何者かがぬすみだしたのだろうか」

うめくように松之助がいった。

「そうかもしれぬ。だがおれは、左近どのが逃亡したために連判状のありかがもれるのをおそれて、伊達藩が他へうつしたのではないかとおもう」

百次郎はいった。

「きっとそのとおりでしょう」

伝兵衛が同意した。

百次郎は体の中から力がぬけていくのをおぼえた。伊達の野望と陰謀の根源ともいうべきものが、こちらの手に入らず、忽然と消えてしまった。無念さがこみあげてきた。大魚を寸前のところで逃がしたおもいだ。

「せっかくありかをさがしあて、ここまでたどりついたものを」

松之助も声をおとした。

「伊達が、見つけられるまえに場所をうつしたんだ」

伝兵衛はいった。

「あの連判状が伊達の手にあるかぎり、今回だけでおわらず、今後もかならず奥州に騒ぎがおこるだろう。こちらへうばいとらねば、後世においても奥州はしずまらぬ」

百次郎は痛憤をおぼえた。千太郎もおなじおもいであの連判状のありかをさぐり、ついにさがしあてながら、無念の死をむかえたものとかんがえられた。

伝兵衛はむなしく毘沙門天像をつなぎ合わせて一つにもどした。

ダーン

そのとき一発の銃声が洞窟の外からきこえた。その音で三人は一時に我にかえった。

「何事かおこった！」

「変事出来だっ」

そういうときの合図に長吉が猟師筒を撃ちはなったのだ。

「引きあげろ」

百次郎はそう命じ、一同はただちに引きあげにかかった。
「伊達の船がちかづいたんでしょうか」
「そんなところだろう。間に合えばいいが」
三人は龕灯を持つ伝兵衛を先頭にして、必死のいそぎ足でもどっていった。
半分以上きたとき、入口に立つ長吉の姿が見えた。
「伊達の船がやってきます。蔵王山伏たちが乗っています」
長吉が入口からさけんでいる。
「蔵王山伏め……」
百次郎はうめいた。急場にのぞんで、又しても連中が立ちはだかってきたのだ。
伊達山岳党は幕軍との戦いに南へ出陣していると百次郎らは予想していたが、はずれた。よりによって、もっとも足場のわるいところに宿敵をむかえてしまった。
「江ノ島附近にいた漁船に山伏たちが乗っていた模様です。船の数は四隻、それに山伏が数人ずつ乗りこんでいます」
長吉がさけんだ。
二十余人の山伏をたった四人でむかえうたなければならなかった。しかもこちらには銃が二丁しかない。どういう作戦がたてられるかどうか、百次郎はとっさに思案をめぐらした。
すぐには妙案が浮かばなかった。伝兵衛と松之助にもなさそうだ。絶体絶命の窮地となるかもしれぬ。

「どういたしましょうか」
伝兵衛が作戦をたずねた。
「まず入江へでることだ」
百次郎はそうこたえたが、そのときもまだ敵にどう対処すべきか作戦がなかった。
三人はいっせいに洞窟をとびだした。
長吉は岩陰にかくれて、前方を見やっている。
入江にむかって四隻の船がいっせいに舳先をそろえてちかづいてきた。距離はまだ半町ほどあった。
乗りこんでいるのは白い浄衣をまとった、まぎれもない蔵王山伏たちだ。しかもおどろくべきことに、船には櫓が左右についている。いわゆる二丁櫓だ。二人で同時に漕いでいるのだから船足がはやい。
逃げるにも逃げられぬ。百次郎は心中でうなった。
百次郎は漕ぎすすんでくる四隻の船に眸をこらした。
長吉は猟師筒をかまえている。
「長吉、猟師筒で何人の敵をたおすつもりだ」
百次郎がいうと、
「三人や四人はたおせるとおもいます」
長吉はむきになってこたえた。

「おれだって、三人や四人はたおせるだろう。だが、のこりの敵はどうするんだ」
そういうと、長吉は沈黙した。
百次郎は敵の船をなおも凝視しつづけた。
船は快足でぐんぐんちかづいてくる。山伏たちははやくも手練の手弓をとりだしている。
「長吉、いいか。ようく見ておれ」
百次郎は岩陰にひそみ、短筒を前方へかまえた。そして櫓に眸をすえた。
船尾のちかくについている櫓ベソと櫂についている櫓チンが結合して櫓がうごかされる。しかも櫓の上部に櫓綱がついていて、船床にしっかりとむすばれている。櫓はいうならば船の命だ。櫓綱は文字どおり命綱である。
百次郎はぴんと張った太さ一寸ほどの櫓綱にねらいをつけた。
櫓綱が静止する瞬間をねらって、引金をしぼった。
ダーン
銃声がひびきわたった。
先頭の船の右側の櫓綱が切れて、櫓ベソと櫓チンがはずれてしまった。櫓をうしなえば、たちまち船は航行不能となる。
とっさには修理もきかぬ。船中の山伏たちの動揺ぶりが目にうつった。
だが、そこは二丁櫓の強みだ。
「長吉、もう一丁をねらえ」

百次郎はいいながら弾ごめにかかった。
ダーン
まぢかで長吉の猟師筒が発射された。
(見事!)
百次郎は心中で声をあげていた。
先頭の船の左側の櫓綱がきれた。ついにその船は両方の櫓をうしなった。
あとは潮の流れと波のまにまにながされるしかない。一隻がはやくも脱落した。
そのとき、海上からはなたれた無数の手弓の矢が生き物のように島岸に飛んできた。が、四人とも岩陰に身をかくしているので、一矢もあたらなかった。
ダーン
ふたたび百次郎が撃ちはなった。
と同時に、つぎの船の右側の櫓綱がはね飛び、櫓が海上にながれた。
ひきつづいて、長吉が二発目をはなった。
これも見事におなじ船の左側の櫓綱をとばしていた。
両人とも絶妙の狙撃術だ。島岸で伝兵衛と松之助の嘆声があがった。これではやくも二隻が戦線を離脱した。
それでも矢はひっきりなしに飛んできた。すこしでも岩陰から体をのりだせば、手弓の餌食になるおそれがあった。

しかもあとの二隻は距離が約四半町にまでせまっていた。乗っている山伏たちの形相まで見えてきた。

彼等は仲間の二隻をうしなったことでいっそう闘志をかきたて、はげしく手弓を射はなってきた。それぞれ正確に狙いをつけて射はなってくるので、矢は岩陰にひそむ四人の体すれすれに飛んだ。

百次郎は三発目を撃ちはなった。が、わずかに狙いがくるって、櫓綱の端にあたった。

すかさず長吉が、おなじ櫓綱をねらって撃ち、見事に断ち切った。

ダーン

装塡しなおした百次郎が撃ちはなって、左側の櫓綱も切った。

これで三隻の船が離脱した。

これまでに離脱していった船は方向をうしなったままいたずらに波間にただよっている。乗り組んでいる山伏たちは躍起になっているようだが、なす術がないのだ。

のこった最後の一隻が猛然と入江に突入してきた。

時間との競争である。山伏二人が力のかぎり櫓をこぎまくり、胴ノ間の三人はつづけざまに手弓を射ちはなってきた。距離は約十間。

長吉が撃った。

つづいて百次郎が撃った。

いずれも櫓綱に命中して、着岸すれすれで、船はあえなく航行不能となった。絶望の悲鳴がきこえた。

それを見て伝兵衛は岸につけてある漁船へはしりこんだ。

百次郎も長吉も松之助も岸辺をはしった。三人はつぎつぎに船へ飛び乗った。

これから後は伝兵衛の独壇場である。きたえぬいた腕で漁船を漕ぎだしていった。航行不能になった四隻を尻目に悠々と沖合へでていった。

白河会談

奥州軍と幕軍との戦況は、当初の形勢が今もってかわらなかった。緒戦の電撃作戦の成功がいまだに戦況を奥州軍の優勢下においていた。

幕軍は形勢の挽回をついに今まで達成できなかった。

奥州軍は会津藩松平をねらい討ちにしたことが功を奏した。上杉、伊達、二本松の諸軍勢は白河へむかうと見せて、会津攻略に戦力をかたむけた。

鶴岡藩酒井勢の布陣にたいしてはほとんど見むきもしなかった。徹頭徹尾幕軍の副将会津中将の首をしめつける作戦をおしすすめた。しかも速攻につぐ速攻であるから、大軍勢をほこる幕軍としてはかえってそれへの対応がおくれた。

白河街道、会津西街道（南山通り）から幕府の援軍が大挙会津へおくりこまれたが、会津城は奥州軍にかこまれ、形勢わるく、日々憂色を濃くしていた。

幕軍にとっては、会津の攻防さえしのぎとおせば、加賀藩前田、尾張藩徳川、津藩藤堂、彦根藩井伊……などの東海、中部、北陸、上方の雄藩の大軍がこぞって奥州に到着する。そうなれば、一気に形勢を逆転させる可能性があった。この大軍は目下、東海道、中仙道、奥州道を大挙北上してきていた。

奥州軍はこの大軍が白河をこえるまでに会津攻略を完了しておきたいところであった。

七月上旬も後半にかかった一日の昼下り……、奥州軍の事実上の総大将片倉小十郎の居城白石城に、格式高い三丁の乗物がわずかばかりの供をしたがえて入城した。

出むかえたのは片倉小十郎、寒河江兵部、鈴懸主税助らの伊達藩首脳である。兵部も鈴懸も開戦とほぼ時をおなじくして、伊達藩の南方の押え白石城に詰めていたのであった。

三丁の乗物ははるばる京都から長い道程をへてやってきた。光格天皇がさしつかわした武家伝奏勧修寺経逸と左大臣鷹司政熙の弟鷹司輝熙と鷹司家の諸大夫志摩部右衛門の三人が乗物の主である。

伊達家と鷹司家とは姻戚関係にある。鷹司家の先代輔平の妹が七代伊達藩主重村の弟にとついだ。

片倉小十郎は天皇の使者三人を本丸書院にむかえて、平伏した。本来ならば、三人の使者は仙台城に伊達藩主斉村をおとずれるべきである。ところが天皇の御意を一日でもはやく伊達藩首脳

につたえたいという意図から、使者はまず白石城に片倉小十郎をたずねたのであった。

小十郎は当代における、奥州方第一の人物といわれる者ながら、身分は一介の陪臣である。使者をむかえて小十郎が深々と平伏したのは当然なのであった。

その小十郎にたいして勧修寺経逸と鷹司輝熙は奥州の静謐と天下動乱の防止のために幕軍との講和を早急に実現するよう下命してきた。

小十郎はこのたびこころならずも光格天皇の宸襟をなやましたことをふかく詫びるとともに、奥州六藩がやむをえざる事情によって幕府に楯をついた経緯を申しのべ、使者の趣きをすみやかに実現する努力をおこなう旨をつつしんで返答した。

前月戦端がひらかれた当初から、伊達をはじめとする奥州六藩は幕府からいろいろな手立による調略や懐柔をうけていた。しかしそれらはいずれも水面下の工作であって、今回のような公式使者の訪問や打診ではなかった。

幕府も奥州軍も建前をべつにすれば、領土を焦土と化する全面戦争はさけたいところであった。条件次第によっては、休戦講和を受け入れる土壌は十分にあったのである。そこに、天皇の和睦の使者を受けたのだ。

幕府にも、光格天皇の使者がおとずれたという。

和睦会談に双方とも否やはなかった。

会談は盂蘭盆明けの一日、白河城においておこなわれた。

白河城は、大昔、結城親朝が白河に城をきずいて小峰城と名づけたのにはじまる。結城氏の子

孫の代に豊臣秀吉に所領をうばわれ、白河城は一時蒲生氏郷の支配下におかれた。その後寛永四年、丹羽長重が白河十万石に封じられ、幕命によって、石垣、堀などを増築し、城の規模を拡大していらい、榊原、本多、奥平……と藩主がかわり、寛保二年、松平定賢が越後高田から十一万石で入封したのである。

定賢の子定邦が八代将軍吉宗の二男田安宗武の子定信を養子にむかえて現在にいたっている。

定信は老中を辞任し、白河にもどってきてからは抜本的な藩政改革にうちこみ、文武を奨励し、質素倹約と忠孝をすすめ、農業重視の政策に打ちこんでいた。

ところが定信がただ白河藩政改革のために帰国したのではないことは、近ごろでは知る者は知っていた。定信は奥州の不穏の動静をいちはやくとらえて、それに対処するために白河にもどってきたというのが真相だった。

盂蘭盆会の中日。白河城本丸に、松平定信と老中松平伊豆守信明、本多弾正忠籌、戸田采女正氏教、太田備中守資愛の面々がそろった。明後日にせまった奥州六藩との会談にそなえて急遽江戸から馳せ参じ、打ち合わせがおこなわれた。

その席に百次郎と最上左近が呼ばれていた。百次郎と左近は陪席し、伊達藩の内情などについての諮問にこたえた。

この席では伊達とオロシアとの秘密修交通商条約の件が話題の中心となった。その秘密条約の内容をつぶさに知る者はいないが、百次郎は長吉に案内されて見てきた女川の秘密貿易港の実態をありのままに一座の面々につたえた。

女川は秘密貿易港として完成し、すでにオロシア船が入港し、輸出入の取引きがはじめられていた。女川港にはオロシア人の臨時居留地とオロシア商館、倉庫などができあがっており、秘密貿易にたずさわる役所がもうけられ、道や橋なども築構され、さらにこの地に人を寄せつけぬため関門や見張番所が水上陸上双方にそなえられていた。

そして今後オロシアとの貿易が拡大される見通しのもとに、第二、第三の商館や巨大倉庫を建築するための準備が着々とすすんでいるのだった。

新庄津太夫という有能にして勇敢な人物が対オロシア貿易の開発にあたり、これを不屈の努力で成功させたことを百次郎は一同につげた。

今、会津軍を恐怖のどん底につきおとしている伊達の新式銃がオロシア渡りの西洋銃であることは説明の要がなかった。

「このたびの戦は幕府と、伊達を中心とする奥州六藩のたたかいとみるだけでは十分でない。伊達の後ろにオロシアがついていることを深くかんがえねばならぬ」

定信がいった。

名宰相定信にしても、伊達の背後にオロシアが存在することを知ったのは、今年五月に入ってからのことだった。

鎖国日本という概念にとらわれすぎて、海外の事情にうとかったのが、定信の一つの誤算であった。定信は領国をじかに奥州と接しているだけに、奥州についての知識に不足はなかった。奥州の貧困と、太古から征服されつづけてきた苦悩の歴史についてもある程度の理解をもってい

た。

それだけに奥州を御する方法についても、定信はかなりの自信を持っていたはずである。だから定信は自分が拒絶したオロシア使節と伊達藩が手をむすんだことに驚きと、ある種の敗北感をいだいたのだった。あえて欧州の一大国オロシアとの貿易をのぞんだ伊達藩の首領片倉小十郎の見識と勇気にたいして、衝撃をうけた。

伊達にたいするつよい恐怖が定信のうちにめばえたのは、それからだった。

その恐れは単なる戦力についての比較だけではなかった。もし泥沼の総力戦にひきずりこまれた場合、戦費は厖大な額に達する。

もし一年がかりの長期戦になった場合、幕府の戦費だけでも、天領八百万石からの一年間の収入をすべてそそぎこんでも足りるかどうかだ。オロシアの後押しによって戦がさらに一年のびれば、幕府は二年間の総収入をついやすことになる。これは事実上、幕府制度の崩壊を意味するのである。

幕府の金蔵に無尽蔵に黄金がねむっていた慶長、元和のころならば、おもいのままに天下の軍勢をうごかし、一年が二年でも三年でも戦をつづけることができた。だが、幕府の金蔵が底をついた今では、毎年の収入の中から戦費をさし引くしかないのだ。

長期戦など幕府財力からしても到底できることではなかった。その上、幕軍が奥州六藩と長期戦をつづけているあいだに、もし西国、九州などで雄藩が起ちあがれば、幕府の崩壊は簡単である。

定信は以来ずっと、苦悩の日夜をつづけていた。

彼は浴恩園にいたころから、すでに伊達をはじめとする外様六藩にたいして、手をつくして調略をすすめていた。表立っては老中松平信明らに奥州六藩への強硬態度をとらせる一方、水面下ではさまざまなつてを駆使してそれとは裏腹な懐柔策までとった。

京都所司代堀田大蔵正順に命じて、朝廷からの和睦講和の斡旋をも摸索させた。その朝廷への斡旋の依頼がこの六月いらい、おもいのほかとんとん拍子にすすみはじめた。

定信は松平信明に命じて第一次奥州出陣命令をくださせる一方、同時に和睦交渉にも積極的にのりだした。

朝廷が斡旋への態度を見せはじめたのは、そのころ伊達藩からも朝廷にたいして和睦の斡旋をもとめる使者がひそかにつかわされてきていたからであった。敵味方の双方が兵の出陣を積極的におこなうと同時に、隠密裡に和睦交渉に乗りだしていたのである。

盂蘭盆明けの昼下り。白河城本丸庭園玉泉園に片倉小十郎と寒河江兵部、さらに陪席として一ノ関三郎兵衛がむかえ入れられた。

この日、奥州への関門の地白河の空は雲ひとつないまでに晴れあがっていた。いまだ残暑の候ではあるが、新秋の緑があざやかで、吹く風にはことのほかさわやかさが感じられた。

本丸背後にのぞむ関山と那須連峰もくっきりと山容を浮かびあがらせていた。玉泉園はその関山と那須連峰を借景として、定信自身がつくらせた自慢の庭園である。

庭の中心は四季湖と名づけた大きな池である。この周囲に松、吉野桜、楓、梅、藤、菖蒲などを植えて四季のたのしみとし、松虫、鈴虫、うぐいす、駒鳥などをはなって興をそえ、山水の美をひきたてている。池の中心に弁天島が浮かび、そこに双葉亭と呼ぶ離れ屋敷がある。

この日、本丸の玄関から玉泉園の入口まで白幔幕が張りめぐらされ、玉泉園において幕府と奥州六藩の和睦会談がはじまった。

会談に先だって、片倉小十郎と寒河江兵部、一ノ関三郎兵衛が主人役定信に案内されて庭園を散策し、風光をゆっくりとたのしんだ。それがおわってから賓客の三人は弁天島へわたり、双葉亭に入った。

今日ここには主人役の定信と松平信明のほかは城中の士といえども、玉泉園に足をふみ入れることを禁じられていた。陪席者として百次郎一人だけが定信にしたがって亭内に入ることをゆるされた。双方とも、陪席者をふくめて三人対三人の会談になった。

百次郎は紋付小袖、麻上下、白足袋姿で定信と松平信明にしたがった。

そして双葉亭の玄関で賓客をむかえたとき、百次郎は三人目に入ってきた人物をみとめて驚愕のあまり、一瞬、息がとまりそうになった。

相手もまた百次郎にひたと眸をむけてきた。

百次郎は体を呪縛されていくような衝撃に打たれた。

双方はしばし無言で、相手を見つめ合った。

(兄上っ!)

百次郎はその言葉が口の奥までかかった。場所柄をかんがえ、やっとの思いでその言葉をのみこんだ。

他人の空似というにはあまりにも似すぎている。死んだ兄が黄泉の世界からもどってきたような錯覚をうけた。

相手の眸も百次郎におとらぬ驚きをあらわしていた。

(まちがいない)

百次郎は確信した。

わかれていらい十一年の歳月がたっているが、血をわけた兄弟をまちがえるはずがなかった。一ノ関を名乗る男は千太郎である。

ぶるっと胴震いがおきて、にわかに激情がこみあげてきた。おどろくべきことである。兄は死んでいなかったのだ。そのうごかぬ証拠が目の前にある。

今までこんなことを一度として想像したことはなかった。千太郎の過去をたずねて奥州を旅しようとかんがえたときも、それは兄の死を確認し、死にざまをすこしでも知りたいためであった。

そのとき、

「伊達家臣、一ノ関三郎兵衛と申す。本日は何とぞよろしく」

百次郎が口をひらくより先に、相手が機先を制した。

(ここでは何もいうな、後で……)

と千太郎の目はいっていた。

（わかった、兄上）

百次郎は驚きがさめやらぬまま、ひたと相手を見すえて、目でこたえ、

「直参赤石百次郎にござりまする」

といった。兄の声をきいた感激にうたれていた。

しかし兄が敵陣営の中枢にいる驚きが感激以上の衝撃で百次郎をぶちのめした。敵陣営中に千太郎が相当大きな立場をしめていることが察しられた。

（どうしたことだ、これは？）

百次郎は兄にではなく、自分にたいしてその疑問をむけた。

お蝶が鶴ケ谷で自分と酷似している人物と出会ったといったのは、本当の兄だったのだ。お蝶からきいたとき、百次郎は千太郎だとは予想もしなかった。

兄は任務や家族を捨て、幕府を裏切って、その代りに敵方でかなりの地位を得たようだ。信じがたいことだが、それは本当だ。

定信は十一年まえのことであるから、千太郎の顔を知らない。信明も知らぬ。

千太郎は小十郎と兵部にしたがって弁天島を見わたす座敷に入った。その座敷は縁側でかこまれている。

小十郎が藩主斉村からの進物を定信と信明におくり、さらに定信が小十郎と兵部へ贈物をして会談ははじまった。

双方は約一間半の距離をおいて向い合った。この距離の近さが、会談を成功させる可能性を秘めていた。

「このたび天子様のご宸襟をなやまし、天下万民に不安とおそれをあたえたことは幕府政治をあずかる者としてまことに苦衷にたえない」

と信明がおだやかに口火をきって会談はすすんだ。

「それはわたしどもとても同様で、できるものならばすみやかに事態をおさめたいものとかんがえおります」

小十郎もやんわりと受けて、会談はなごやかなうちにはやくも軌道にのった。

「天下の民は戦いをのぞんでいない。わたしものぞんではおらぬ。おたがいに立場こそちがえ、世に戦乱をひきおこし、かつての戦国の世をここに再現することは、まことに愚の極みと申すべきもの」

定信の言葉が会談をひっぱった。

百次郎は定信と信明のやや斜めうしろにすわっていた。

千太郎は小十郎と兵部からややさがってひかえた。

すなわち、百次郎と千太郎は対角線上に向き合っていた。

千太郎がこの会談に陪席しているのは、伊達藩の対幕府外交顧問のような立場にあるためであろう。百次郎は伊達藩の現地の内情をもっともくわしく知る者としての立場からである。とはいえ兄弟が敵味方にわかれて、幕府と奥州との重大会議に陪席するとは皮肉とも、予想外ともいえ

る異常なりゆきであった。

百次郎は会談中、一度として千太郎へ視線をむけなかった。千太郎も百次郎のほうに注意しなかった。

が、双方会談に没入しつつも、神経をとぎすまし、ひそかにおたがいを観察し合っていた。

兄が伊達藩側へ寝返ったことは驚異以外の何ものでもないが、このことが判明したために、百次郎にとって今まで謎だったいくつかの事柄が解きあかされた。

伊達藩が幕府の内情、とくに中町奉行の活動についてくわしく知っていたことは当然の道理であった。常陸屋勘兵衛がお蝶にちかづいたことも、この筋をたぐればすぐに納得できることだった。

百次郎は兄がどうして、家族や任務、身分まで捨てて伊達へはしったか、その理由をしきりにかんがえつづけた。いくつかの理由を脳裡に浮かべたが、納得できるものはなかった。

いったん捕われの身となって、死をもっておどされた場合もかんがえた。が、そうだとしても格別な事情がないかぎり、中町奉行与力はみずから死をえらぶはずである。

中町奉行与力はみなそのように教えこまれている。それくらいのことがやってのけられぬ者はいない。まして兄はもっとも筋金の入った与力だった。

(兄の身の上に何が……?)

兄の人生を一変させた原因とはどんなことだったのか。思索しつづけたが、謎はいささかもとけなかった。

この謎をときあかすのは、千太郎に直接問いただすしかないとおもった。千太郎の口からどのような言葉がでてくるか、興味がつきなかった。

兄が今どんな心境でこの場にいるのか、百次郎にはとてもはかりがたいことだった。

会談は核心にちかくすすんでいた。

「伊達ばかりでなく、ほかの奥州五藩もいたずらに幕府との戦いをのぞんでいるわけではありませぬ。当方では、戦いはもっともおろかな手立だと重々承知いたしております」

小十郎が時機をみてきりだした。けれどもこれは、古来、戦いの命令者がいかなる場合にも口にしてきた言葉である。そのままは受けとりがたい。

「伊達どののほうは、場合によっては兵を引かれる意図もおありか?」

信明がすかさずきいた。

奥州の側にいかような論理と大義名分があろうとも、幕府にたいして兵を挙げた以上は天下の謀叛人である。その謀叛の当事者を老中がどの付けで呼んだ。

「戦争は当方ののぞむところではありませぬ。戦はおのれの血をもって相手方の死をあがなう残酷なものです。これほどおろかで悲惨なことがこの世にありましょうか。できるならば兵火兵乱をおさめて、幕府にたいして和平をのぞんでいる次第です」

小十郎はそういったが、定信も信明も素直にはうなずかなかった。今度の兵乱はあきらかに伊達のほうが企図し、仕掛けてきたものだという認識があるからだ。

しかも伊達はそれを藩祖政宗のころからくわだてようとしていたのである。伊達の悲願あるい

は大望といってもさしつかえない。

「奥州諸藩の意中をありのままにおきかせねがいたいものだが」

信明が問うた。

「奥州には遠い昔、蝦夷が住まいいたしておりました。まつろわぬ、さいはての異国でございました。が、繰りかえし中央から征服をうけて、今では蝦夷の国とは申せなくなりました。われわれもみなさまがたとおなじ国の者ながら、国の有様を申せば、白河から北の奥州諸藩と関東以西の諸藩とのあいだに大層なへだたりがあるのはあきらかなことでございましょう」

小十郎は、さかのぼって太古からの奥州についてのべはじめた。

定信はだまってきき入っている。

「それで」

「奥州は陸つづきながら、本来中央とはべつの国とかんがえたほうが歴史上、地理、地形上からいっても至当ではないかとおもわれます。奥州には奥州の風土と気候、そこに住まいいたしますわれわれは奥州のこころ、喜怒哀楽をいだいております。これは畢竟、中央に生きていらっしゃるみなさまがたにはお分りねがえますまい。幾世代、この地に暮らし、寒さ、まずしさ、きびしさを身をもってあじわいませぬと納得いただけぬこととおもいます。その奥州の立場、事情がわからずして、いたずらに幕府が力まかせに奥州をおさめようといたしますれば、かならず無理が生ずることがあろうかと存じます」

小十郎は訥々と、しかも気迫のこもった言葉でかたりつづけた。

「すなわち、片倉どのがいわんとするところは……」

信明は会談が小十郎の一方的な調子で押しまくられるのをさまたげるため、話の腰を折って結論にせまった。

「できますことならば、奥州外様諸藩を幕藩体制の中からお切り捨てねがえませぬでしょうか。本来他国とおかんがえいただければわが方としては幸いにございます。一度とっくりとおかんがえなさっていただきたいものです」

小十郎はつとめて下手にでたいいまわしをした。しかしその内容たるやただごとでない。

彼の言葉を裏返せば、奥州独立というおもいきった主張にほかならぬ。幕府の意志に左右されず、まさに奥州が天下独自の道をすすんでいくという宣言である。

小十郎はついに本音をあらわした。衣をぬぎはなって、本性を見せた。

百次郎はふつふつと血がたぎるのをおぼえた。

「奥州を切れと？」

信明がそのとき念押しをしてきいた。

「左様にござります。できることなら、奥州は無きものとお切り捨ていただきとうございます。そういたしますればわれわれは奥州なりの生き方をこれからさがしてまいります。苦難の道をもとめていくつもりです」

このとき、かすかだが定信の顔色がうごいた。言葉こそちがえ、これを謀叛といわずして何と呼ぼう。大胆不敵というはおろか、まことに恐れを知らぬ不遜なる主張である。

「切り捨てれば奥州は独自の国をきずき、切らねば幕府と総力をあげて最後の一兵まで戦うご覚悟じゃな」

定信ははじめてきびしい言葉でつめ寄った。幕府の大黒柱としての言葉であった。

緊張した空気がはりつめた。

「戦はいかなる場合も国土や民をやせ細らせます。血で血をあらい、人をころし、故国の山河を焼きつくします。勝つも負けるも悲惨な結末しかのこしませぬ。奥州六藩、できることなら戦はやりたくございません。ねがわくは、しずかに奥州六藩の行く末をご覧になっていただきとうございます。されど……」

「されど？」

「幕府がどうしてもみとめぬとおおせられるのであれば、いたし方ありません。せっかくの天子様のおすすめではありますれども、おうけ入れいたすことはできませぬ。奥州六藩血みどろになって最後の最後まで天下の軍勢を相手にいたす所存でございます」

小十郎はよどみもためらいもなくいいはなった。ばかりではない。半ば強迫にでたのである。その言葉と態度には、全奥州の運命を背負ってたつ男の気魄と熱気がこもっていた。

小十郎は口にだしてはオロシアのオの字もいわなかった。しかし奥州六藩の不退転の決意の中に、オロシアとの友好同盟、修交通商、武器援助が大きな切り札になっていることは幕府側に十分うかがい知れるのであった。

「左様か、そこまでの覚悟があるならば、あっぱれなことだ。それならば折角だからやってみることじゃ。奥州六藩がどのような国づくりをいたすか、性根をすえて見せてもらいたい」

定信はあっさりと小十郎をつきはなした。

言葉をどのようにかざろうとも、所詮奥州の態度は無条件で幕府からの独立をみとめさせるか、さもなければ全面戦争に突入するかの選択をせまっているのである。無理難題を吹っかけているにひとしい。

「ご覧に入れてさしあげましょう」

小十郎がゆったりと応じた。

奥州六藩はオロシアを切り札として、幕府を強迫し、強請っているのにほかならなかった。

会談は一気に終局へむかってひたはしった。

「存分にやってみよ。だが、念のために一つだけいわせてもらおう。奥州が奥州のために戦うのは、今となっては仕方がない。それだけのいい分もあろう。大義名分もあろう。止めはせぬ。力のかぎりやるがいい。しかし夷狄の力をあてにすることはやめよ。夷狄に乗じられれば、奥州ばかりでなく、天下をほろぼす道につながる。もっとも愚なことだ。肝に銘じよ」

定信が力をこめた言葉をはなった。

その言葉は百次郎の胸にずしりとひびいた。定信の視野と見識がただ徳川幕府の中だけに立っているのではなく、この国全土の上に立ったものであることがわかったからだ。

定信は一昨年、エカテリーナ号によって帰国したコーダユーとイソキチからオロシアの国情をきくことによって、欧州強大国のあいだに海外覇権の野望が渦巻いていることをそれとなく察し

たのかもしれぬ、と百次郎は想像した。

「これからは、いたずらに海外諸国との交わりをとざしていては、おくれをとるばかりです。国をひらき、諸国との交わりをすることによって国が富んでまいります。力もついてまいります。これはおわかりいただけますでしょう。奥州のこれから生きる道もそこにあるとかんがえます」

小十郎が切りかえした。この言葉にも、ある真実があった。

「国をひらくというのは、これからの一つの方法かもしれぬ。しかし夷狄の兵器を買いあさることはやめよ。これをやれば、いずれ夷狄に国を乗っ取られることになる。そう覚悟するがいい。くれぐれも申しておく。夷狄の罠におちいるな。オロシアはわれわれの戦をほくそ笑んで見ているだろう。恥を末代にのこすな。これは前老中としてのいい分ではない。この国に生をうけた者の一人としての言葉だ」

定信はそうしめくくった。

「しっかりと胸におさめておきましょう。しかし、ご老中、前ご老中にはついに、奥州をおわかりねがえませんでしたか……。残念にござります」

小十郎は慨嘆した。

もう定信は口をひらかなかった。

百次郎はここに会談の破局を見た。

兄弟

「百次郎、久方ぶりだ」

その声は拝殿脇の御手洗のほうからきこえてきた。

白河城下雷神神社の境内にはしずかな薄暮がおとずれている。逢魔が時と呼ばれる時刻だ。

その声に百次郎はつい、肉親のあたたかさとなつかしさをおぼえた。

「本当に兄さんか。赤石千太郎なのか？」

百次郎は声のしたほうにむかってさめた言葉をなげた。まさに魔物と出逢うようなここちがしたのである。

背後の時鳥山から爽籟が吹きよせてくる。境内の森から法師蟬の鳴き声が時雨のように降りそそいでいる。

「千太郎だ。おまえの兄貴だよ。こんなところで会うことになろうとは……」

千太郎は御手洗横の千年松の陰から姿をあらわした。

昨日、白河城内の会談のわかれ際に、兄弟はこの出会いを約束していたのであった。

「それはわたしがいうべき言葉です」

百次郎はあくまでも冷やかにいった。

千太郎は苦い笑いでうけとめた。

「しかし、いつかお前がおれの死場所をたずねて陸奥にやってくるような気がしたよ」

「まさか公儀を裏切って、敵方でぬくぬくと生きながらえているとはおもってもみなかった。大層出世をした様子じゃありませんか。これほど目先のきく人だとはおもいませんでしたよ」

百次郎はその言葉に軽侮をこめた。

「出世などしちゃいない。したいとおもったこともない。が、それ相当には、伊達藩はおれを遇してくれている」

「それはあんたが、公儀を裏切った代償じゃありませんか。いちばん卑劣な生き方だ」

「そういわれても仕方がない。それについては、だまってお前の侮りをうけよう」

「そのほかに何かいいぶんがあるんですか」

百次郎はやり場のない怒りといらだちをこめていった。公儀のため、職務に殉じて死んだと信じていた兄がこんなかたちで生きていたとは残念やるかたなかった。百次郎はいまだに自分の気持を整理できなかった。

「たしかにおれは公儀を裏切った。家族も身分も捨てた。けれどもおれは、自分の良心を売っちゃいない。だからこそお前にだって、こうして会うことができるんだ」

「あんたは自分で自分をだましているんじゃないのか。だからおればかりじゃない、定信公の前にだって臆面もなくでられるんだ」

といったが、千太郎の表情はかわらなかった。

裏切るまでの紆余曲折や裏切ってからの心理的な葛藤をへて、千太郎は今では大概のことでは傷つかぬ強靱さを身につけたのだと百次郎はおもった。

「おなみは元気か」

千太郎は話題をかえた。

「捨てた女房でも気になるんですか」

どうしても百次郎は素直にうけこたえができなかった。

千太郎はひろい境内のほうへ百次郎をさそった。参詣人の姿はなく、神官と社務所の者の姿が神殿のちかくに見えた。

「おれはすすんでおなみを捨てたわけじゃない。やむをえなかった」

「義姉さんは元気ですよ。兄さんがいなくなったころは、一時なげきかなしんで痩せほそっちまったけど、気をとりなおしてからは元気で家の中を切り盛りしてます」

百次郎はここではじめて千太郎を兄とよんだ。

「本人さえよかったら、もう一度嫁いでくれるといいんだが」

ゆっくりとあるきながら千太郎はいった。

「そんなことを兄さんがいうのは身勝手すぎますよ」

兄のやさしさからでた言葉だろうが、おなみのこころをわかっていないとおもった。

「おまえに惚れている女がいるようだが」

「伊達が奥州へさらっていこうとした女です。兄さんとも、出会ったというじゃないですか」
「戦というのは過酷なものだ。人間一人の幸福や生命を無残にきりさいていく」
「でもこれは伊達がしかけた戦ですよ。片倉小十郎どのは昨日さまざまいっておられたが、所詮それは奥州だけにつうじる論理ですよ。ずいぶん勝手気ままな理屈だとおもいました。どこの地にだって、それぞれの苦しみや不幸はあるものです。奥州だけが不幸だとおもったら大間違いだ。南の薩摩や長州、土佐にだって、それなりの苦しみはあるんじゃないでしょうか」
百次郎は昨日感じたことを口にした。奥州にそだった者が奥州のことしか知らずに、自分たちだけが不運で不幸だとおもいこんでいる。
「そうじゃない、百次郎。おまえは奥州のことがわかっていないから、そんなことがいえる」
千太郎の態度がややあらたまった。
「兄さんは知ってるんですか」
「知っているとも。おれはもう長年奥州に住みくらしている。おまえも多少は奥州のことがわかっていたら、すこしはおれの気持がわかってくれるとおもう」
「わたしは、木乃伊とりが木乃伊になるなんてことはありません」
「おまえはなにも知らん」
ここで両人の言葉がとぎれた。
二人の生き方は平行線をたどるしかないのだ。
しばらく沈黙をつづけた。

「兄さん、一体どんなことがあったんです。おしえてください。何が兄さんを変えちまったんですか」
沈黙をやぶって百次郎はいった。
「裏切者にその理由をきいてどうしようというんだ。裏切ったというだけで十分じゃないか。その罪や汚名が消えるわけじゃない」
「そうはいきません。はっきりと聞いておきたいのです。ましてあなたは裏切っていながら正々堂々とした態度を見せているのだから、その理由をどうしてもいうべきですよ。それがいやなら、恥にまみれて薄暗い人生を生きていくべきでしょう。そうでなければ、伊達藩とたたかって死んでいった中町奉行同心たちは浮かばれません」
百次郎は夏目新蔵や奥野孫七、そのほかの者たちのことをおもった。
「天明の大飢饉がおれをかえた」
つぶやくように千太郎はいった。
「天明の大飢饉？」
意外なこたえだった。
「あの飢饉のさなか、おれは仙台城下はずれの鶴ケ谷にひそんでいた。あそこで、おれはこの世の地獄を見たんだ」
薄暮から本格的な夕暮れにうつっていった。境内の木槿が白い花をぽっかりと浮かべている。
千太郎の顔も夕暮れの中にしずみかけている。こまかな表情はほとんど消えて見えなかった。

そのほうがかえって話しやすかった。

あの飢饉のとき、鶴ケ谷に群れあつまった浮浪人たちがみな餓死していったことは百次郎もきいていた。

「うむ……」

百次郎はちいさくうなずいた。

「天明の大飢饉は全国いたるところをおそったが、とくに奥州の被害はものすごかった。飢饉は奥州諸国をおおいつくした。生きながらえた者がいたのが不思議なくらいだ」

「……」

百次郎もこの年、江戸にいて飢饉のことは知っていた。とりわけ奥州では無慮何十万という餓死者がでたこともきいていた。

「あの年……、奥州は食べ物はおろか、木の実、草の根、犬、猫、鼠、蛇まで、およそ口に入れられるものはことごとく食べつくしてしまった。おれは鶴ケ谷の破れ寺で毎日、飢え死にしていく者を何人も見ていた。最後には人が人を食う修羅餓鬼道におちいった。おれの知っている女は、子供のために自分の腿の肉を千切ってあたえていた。ところが最後には自分が飢えにたえかねて、とうとう自分の子を裂いて食ってしまったんだ。そんなにまでして何日か生きながらえたその女も、やがて発狂して、境内にたむろする浮浪人どもに寄ってたかって食いつくされてしまった。おれは坊主に化けてひそんでいたので、それもなにかの縁か因果かとおもって、穴を掘って埋めてやり、経をあげ、かたちばかりの供養をしてやった。それがことのおこりで、それ

から毎日、境内のどこかで飢え死にしていく者たちの供養をするようになったんだ。任務をそっちのけで、何ヵ月ものあいだおれは鶴ケ谷で葬い坊主をつづけたものだ」

「そうか……」

「そんなことをしているうちに、いつしかおれは奥州の人々のこころの奥を知るようになったんだ。飢饉は全国をおそったとはいっても、江戸で飢え死にをした者はおるまい」

「そうだったろうな」

「江戸はなんといっても将軍のお膝元だ。奥州の米はことごとく買いあつめられて、船で江戸へはこばれた。江戸を餓死からすくうために、奥州の者たちは餓死していったわけだ。奥州の百姓は自分たちのつくった米を一粒も口にすることができず、江戸のために死んだ。おれは知らぬ間に奥州の人々を気の毒におもうようになり、この人々のためにすこしでも役にたってやりたいとおもうようになった。お前はおれをあまいとおもうか知れないが、おれのこころはしだいに公儀や江戸からはなれていった」

「……」

「任務のことをわすれがちになり、かえって任務が重荷になってきた。そしてかんがえぬいたあげく、〈直参の士ここに果つ〉の文字を楓にほりこみ、今までの自分に訣別をつげた。中町奉行与力をつづけることがただしい生き方だとはおもえなくなったからだ」

百次郎はだまってきき入った。

「ところがとうとう、おれのことが伊達藩庁に知れてしまった。ある日とつぜん、大勢の捕り手

にかこまれて、つかまった。藩庁へ引ったてられ、寒河江兵部どのの調べをうけた。おれは黙して一言もしゃべらなかったために、調べは何日もつづいた。それでも兵部どのは根気よく調べをつづけ、とうとうおれのほうが三ヵ月めに根負けしてしまった。そしておれはころんだのだ。奥州のためにいくらかでもはたらいて、奥州の人々につくしてやろうという気持になった。そのときにおれは、裏切って直参の士ではなくなったがために、文字をきざんだ楓を切り捨てた」

かたりおわったとき、千太郎の顔はほとんど夕闇の中に没しかかっていた。

百次郎はすぐには返事ができなかった。

「兄さんのことはわかった。もう兄さんについてとやかくはいうまい」

しばらくたってからいった。

「いくらかわかってくれたか」

「だが、おれの生き方はべつだ」

「おまえは奥州の飢饉を知らぬからな」

「おれは兄さんが死んだとされて、中町奉行与力の身分をついだ。そして今、奥州六藩を相手にたたかっている。奥州の陰謀をはばまねばならぬ。兄さんとは敵味方だ」

百次郎は決然とおもいを断ち切っていった。

「いつでも相手になろう。おれは今は伊達藩の禄を食んでいる。しかも兵部どのの片腕といってもいい」

千太郎もしずかに応じた。

「伊達藩のやりかたはあきらかにまちがっている。オロシアの力を借りてもし望みを達したとしても、いずれはオロシアの属国とされてしまうだろう。他国の力を借りて戦をするとは愚の極みだ。おれは兄さんをたおさねば、中町奉行所の面々に申し訳がたたぬ」

百次郎は兄と闘う覚悟をきめた。

「天地一心流、かなり腕をあげただろう」

「ためしてみてはどうか」

百次郎は挑発した。徐々に闘志がわきたってきた。

「避けることはできそうにないな」

「わざわざ陸奥まできて、兄弟で斬り合うことになろうとは」

いいつつ百次郎は二、三歩さがった。そしてもろもろの感情をねじ伏せるだけのはげしい闘志をかきたてた。

千太郎も数歩さがって、距離をとった。

ほとんど同時に、一刀を抜きはなった。

百次郎は少年期、青年期をつうじて兄から剣術の稽古をつけてもらった。が、後には兄をしのいだという自覚があった。

兄と腕くらべをしてみたいという気持もあった。

両者が夕闇の中でかまえに入ったとき、百次郎はふといやな胸さわぎをおぼえた。妙に気が散って、精神の集中がはかれなかった。

これでは負ける、とおもった。
「百次郎、どうした。臆したか」
対峙しつつ、千太郎は呑んでかかってきた。
「兄さん、おれは水入らずの勝負がしたい。助太刀は遠慮してもらおう」
百次郎は背後に潜伏する人の気配を感じていたのだ。
「むろん、そのつもりだ」
千太郎は心外だという顔をした。
兄自身は知らないのだと察した。
そのとき、
シュッ
耳なれた例の音がした。
「あっ」
手弓だとさとった瞬間、千太郎が声をあげた。そして千太郎のかまえが急にくずれた。
手弓の矢は千太郎をおそった。矢は兄の左の肩口に深々と突きとおっている。
意外な上にも意外な成り行きだ。百次郎は愕然となった。
あやまって千太郎を射たのだとおもった。
「兄さんっ」
さけんで千太郎のほうへ走り寄ろうとした。

「くるな！」
千太郎が声をしぼって、百次郎をきびしくこばんだ。
と同時に、ふたたび手弓の音がした。
「ううっ」
千太郎が又してもうめいた。今度の矢は千太郎の腹部をつらぬいた。
「はかったなっ、竜王坊！」
千太郎は前方の木陰にむかって憤りをこめてさけんだ。
シュッ
シュッ
つづいて矢が百次郎の体をするどくかすめた。
木陰から木陰へ、白い浄衣のひるがえるのが見えた。
百次郎はそちらへむかって身がまえた。
「兄さんっ、しばらく我慢してくれ」
兄が気がかりだが、まず敵をたおさなければならぬ。千太郎の傷は第一矢はともかく、第二矢は致命傷になりそうだった。
「伊達藩内には、おれにあくまでも気をゆるさぬ者たちがいた。そやつらはおれをたおす機をねらってたんだ。残念だっ……」
千太郎にも傷の深さはわかるようだ。

激痛から呼吸が荒くなった。その顔を憤怒と無念の色がおおっている。
奥州のためにすべてを捨てて伊達へはしった兄が、伊達の者によって欺し討ちにされた。百次郎の体のうちを兄以上の憤怒がかけめぐった。が、百次郎の短筒は急場には間に合わぬ。
「おれを楯にしろ、どうせ死にゆく身だ。遠慮するな」
千太郎が血を吐くようにいって、百次郎を自分の体でかばった。
「兄さん、死ぬなよ！」
いいつつ百次郎は一刀をかまえた。
シュッ
飛んできた矢を、一刀で打ちはらった。
矢は中央から真っ二つに切れて落ちた。
二度、三度、四度、百次郎は左右に一刀をふるった。
そのたびに木陰から飛来する矢はことごとくきれいに打ちはらわれた。
「腕をあげたな、百次郎。これじゃあ、おれが勝てるわけがない」
瀕死の瀬戸際で千太郎がいった。
シュッ
シュッ
さらに射かけてくる矢を切りはらった。
夕闇が濃くなり、だいぶ視界がきかなくなっていた。百次郎は隙を見て相手の手もとへ飛びこむ機をうかがった。

「兄さん、死ぬとはきまっていないぜ。辛抱しろ」
百次郎は一方で、千太郎を叱咤した。なんとしても、死なせたくはなかった。にわかに兄弟の実感と情愛がわいてきた。
千太郎の呼吸がいっそう荒くなった。
「も、百次郎……、おなみを、た、たのむぞ……」
そういった後、千太郎がこと切れたのがわかった。
百次郎は撒き菱用の菱を数個懐中からとりだした。
「やっ！」
はげしい気合いをこめて、木陰にひそむ竜王坊にむかって投じた。
竜王坊がからくもそれをかわした。
千太郎の死によって、百次郎の闘志はいやがうえにも高まっていた。
「やっ」
「やっ」
「やあっ！」
つづけざまに気合いを発し、連続的に菱を投じた。
そのうちの一つがよけそこねた竜王坊の首筋に吸いこまれた。
と同時に、百次郎は猛然と地を蹴った。飛ぶように境内をはしった。一刀をかまえて十余間を

疾走した。
木陰のあいだを浄衣がひるがえった。
「くらえっ！」
かまわず追って、百次郎は腹のうちから怒りとともに気合いをほとばしらせた。
一刀は地を摺るようにすべって、天をめがけて一閃された。
斬られたはずみで、山伏の体が三間ほどはじけとんだ。
さらに疾って、百次郎はふたたび一刀を袈裟懸けに斬りおろした。
骨を断つ音とともに、竜王坊の背中が二つに割れ、大量の血が噴きだした。そしてそのまま絶命した。

爆破行

野分が昨日、江戸をはしりぬけた。
残暑は野分とともにはらわれた。
百次郎は朝の床の中で、爽涼感を満喫していた。昨夜、百次郎は左近とともに暴風雨の中を無事江戸に帰還した。

今日は新涼の秋晴れである。庭から百舌鳥と懸巣の鳴き声がきこえてきた。
おなみが家の中をいそがしくうごきまわる気配がしている。おなみは今日も元気そうだ。
やがてここに、百次郎をおこしにくるだろうとおもった。
（以前とすこしもかわらないな）
かわらぬほうがいいのだ、とおもった。
幕軍と奥州六藩との戦いはおわっていない。一時の休戦から、ふたたび戦闘に入り、今は泥沼の膠着状態がつづいている。光格天皇の和睦斡旋は実をむすばなかった。
片倉小十郎はあくまでも奥州の野望をつらぬく意志を表明した。
幕府の大軍は白河をこえて、奥州へ進撃していったが、伊達が天下に誇る〈四十八館制〉がその前に立ちふさがっている。これを一つ一つ突破していくのは、大変な難事であった。これらをゴボウ抜きにできるとふんでいた幕府の当初の思惑はまちがいだった。
しばらくたつうちに、廊下におなみのしずかな足音がきこえてきた。それは部屋の前でとまった。
「百次郎さま、もうお目ざめですか」
以前とかわらぬあかるい声で呼びかけてきた。
百次郎は一瞬、修羅の世界をわすれかけた。奥州へおもむき、はからずも兄と再会し、決闘中に兄をころされた出来事まで、夢かと一瞬錯覚した。
千太郎のことは、昨日、何もかたらなかった。今後もかたるつもりはなかった。おなみは夫を

うしなったかなしみを十一年まえにとっくりあじわっている。それをふたたびあじわわせる必要はないからだ。

「今、さめたところですよ」

おなみは百次郎がずっと奥州へいっていたことすら知らない。

「今日は百次郎さまが久しぶりにかえってきたお祝いをいたしますから、もうお起きになってください」

屈託のない声だ。

百次郎は千太郎が最後にいいのこした言葉をおもいだした。千太郎はできれば、百次郎とおなみに夫婦になってもらいたかったのではないかとおもった。

おなみが千太郎の嫁としてすごしたのは、ほんの三年ばかりのあいだでしかない。夫の死後、百次郎が嫁をもらわぬのをいいことに、ずっと実家にもどらずこの屋敷でくらしている。この屋敷の居ごこちがよほどよいのだとかんがえるしかなかった。

「源之助は」

ときくと、

「もう、道場におでになってます」

という返事だ。

この男のくそ真面目はいつもかわることがない。百次郎が奥州へいっていたあいだは、ずっと源之助が代稽古をつとめていた。

金次も折にふれて顔をのぞかせていたそうだ。

おなみと彼女のこころづくしによる膳をはさんだ。箸をうごかしているあいだ、おなみのあかるい視線がまぶしかった。

道場に久方ぶりに顔をだし、半刻ばかり稽古をつけてから、屋敷をでた。

神田川ぞいにぶらぶらとあるいた。秋燕が柳原の堤のほうへ矢のように飛び去った。

そのままどこまでもあるきとおせば、両国にでる。

三月におこった江戸大火の傷跡はもうどこにものこっていない。江戸は何度も大火に見舞われたが、そのたびに不死身のようによみがえってきた。

両国も見事に立ちなおっている。つい四ヵ月前ここが焼け野原になったことなど、とても想像できぬ。不思議なほどのたくましい力を江戸の人間は持っている。

大川端から一筋ひっこんだ中通りに、新規開店の富田屋をみつけることができた。船宿が並んだ一画の裏手にあたる。

まだ暖簾はでていない。ちいさな看板だけが目印になっている。

戸をあけて入っていった。

調理場で白い割烹着をきたお蝶が今日の仕込みに余念がない。割烹着の下の粋な縦縞がなつかしい。

「いい店が見つかったな」

声をかけると、

「まあ、おかえんなさいませ。旅先では大層お世話になりました。丁度手ごろな店が見つかったもんですから……」

一瞬目がかがやいたが、すぐにやや他人行儀な答えをかえしてきた。店で情人の顔を見せるのは商売上の御法度だ。

お蝶は白河へ寄った百次郎とわかれて、伝兵衛、長吉とともに先に江戸にもどっていた。旅先で百次郎の身分を知ったので、江戸での百次郎への接し方にいっそうこころをくばっているようだ。

しかし一見よそよそしい態度の中にかくしきれぬばかりの情がつつまれていることが百次郎だけにはわかった。

「きてるかね」

小声でたずねると、お蝶はちいさくうなずき、さりげなく二階を指さした。以前の富田屋と同様、今度も二階にお蝶の部屋のほかに空部屋があるようだ。

あがっていくと、六畳間に伝兵衛、源之助、金次、さらに長吉の四人があつまっていた。

顔ぶれを見まわして、これだけの者たちが今までよく命をながらえてきたものだと、今更ながら感嘆のおもいをいだいた。みな二度や三度、いや数度はいつ死んでもおかしくない危険をくぐりぬけてきたのだ。

「ふたたび戦いがはじまった。今度はいつ果てるともない長い戦いになるだろう。泥沼の戦いがつづけば、オロシアがわが国に野心をいだく隙もうまれてくる。何としてもこれだけは避けなくてはならない」

百次郎は自分のかんがえをのべた。白河城で定信の見識にふれてからというもの、百次郎はいささかそれに影響をうけた。定信の見識は人をうごかす力をもっていた。

ほかの四人は一様にうなずいた。

「伊達藩をたたき、奥州連合を一挙にぶちこわす手段がただ一つある。だが、それを成功させるのは、はなはだむつかしい」

百次郎がそういうと、四人は沈黙した。それぞれ百次郎の意中をおしはかっていることが想像された。

百次郎もしばらく沈黙した。

「女川、でしょうか」

長吉がいった。

百次郎はうなずいた。

「女川を木端微塵にたたいてしまえば、伊達の拠りどころはなくなるでしょう。オロシアあっての六藩連合ですから、これがくずれ去るのはわかりきっております」

長吉がつづけた。

源之助、伝兵衛、金次もこれに同意の様子である。

「女川港は、今や奥州最強最大の要塞といえる。この港をまもるために、伊達は女川に水も洩らさぬ守りをしいている。この守りをつきやぶって湾内に侵入するのは至難のわざだ」

百次郎の顔がきびしくなった。
「しかしそれを突破しないかぎり、港へはちか寄れないのでしょう」
「オロシアの軍艦が湾頭に陣取っているかもしれません」
「ちかづく者にはありとあらゆる攻撃が準備されているだろう」
さしもの伝兵衛、源之助、金次らの強者たちも今度ばかりは二つ返事の賛同を見せなかった。それは自殺しにいくにひとしいからだ。
「オロシアの軍船もおそらく女川湾の守りについているだろう。オロシアにとっても女川をまもりぬくことが国の利益になるのだ。女川をうしなっては、今までつみかさねてきた苦労が水の泡になる」
百次郎はいった。彼自身も女川湾の固い守りを突破して、秘密港にちかづく成算は今のところもっていなかった。
「ほかに、伊達をたたく手段はないものでしょうかね」
金次は女川爆破にはほとんど望みを持っていないようだ。
「総力戦でじっくりと月日をかけて奥州六藩をたたきつぶすか、短期決戦で女川をおとすか。この戦の見通しは二つに一つしかあるまい」
百次郎は悲壮な決意でいった。中町奉行与力としての使命ばかりではない。オロシアのわが国侵入を未然にふせぐというあらたな目的がうまれていた。
沈黙がふたたび部屋の中におとずれた。おもくるしい空気が部屋の中を圧した。

「やるしかない。われわれで女川をやっつけましょう」
しばらくして源之助がいいだした。それを待っていたかのように、
「女川をたたく手段はかならずあるとおもう」
伝兵衛がつづけた。
「どんなに難攻不落の要塞であろうとも、どこかにかならず隙はあるはず」
長吉も賛同した。
金次はそれにうなずいた。
百次郎は彼等の中からこういう声があがるのを待っていたのだ。しかもこれは、白河城で定信が百次郎に指示した作戦であった。

陸前・女川――。
幕府との開戦いらい、石巻、塩竈などの伊達主要港が幕府水軍の大挙北上にそなえ、きびしい海上封鎖をしたのにともなって、女川湾にも外洋からの侵入にたいして厳重な防備がしかれた。湾は東にむいてひらけている。湾の西北部、もっとも深く切れこんだところに、女川港がある。
湾の両門、四子ノ崎と寄磯崎には船番所と遠見番所をもうけて、湾にちかづいてくる船を警戒し、伊達水軍数十艘がたえずあたりを遊弋している。さらに湾頭には、オロシアの軍船オホーツク号が錨をおろして外洋から湾をうかがう敵にたいして幾門もの長大な鉄筒を不気味にむけてい

る。港の入口には二ヵ所に船手組の見張番所がおかれて、港に接近するものをきびしく警戒している。

ひるがえって港の背後を見れば、三方を切り立った山でかこまれ、西方の一部、万石浦につうじるところだけが小丘陵になっており、そこ以外は通行を遮断されている。しかも山々は海べりの際までせまり、その大部分は絶壁にちかい急傾斜である。

海岸線づたいにいく道すらもない。陸上の交通といえば万石浦をへて石巻へぬける道しかなかった。しかも港から万石浦への道には番所がおかれ、仙台から派遣されてきた役人と兵がきびしくかためている。この一ヵ所さえかためれば、陸の防備はまず心配はいらないのだ。

女川の背後の山々は牡鹿半島から駒ケ峰、光山、大草山、袴ケ岳、大六天山、京が森山、黒森山、石投山、硯上山、小淵山、明神山とつづく連峰である。

この連峰のむこう側、日影村に百次郎、源之助、伝兵衛、金次、長吉の五人がひそかに寄りあつまったのは、八月に入って何日もたってのことだ。

五人は一緒にやってきたのではなかった。おもいおもいのいでたちで伊達藩の目をかすめ、別別の道をとおってようやくここまで到達した。

百次郎は修行僧の身なりで、二番めに一昨日、日影村についた。

百次郎より三日もはやく、伝兵衛が行商人のいでたちで敵中を突破して、最初に姿をあらわした。

百次郎に半日おくれて、その日の夕方、長吉が猟師姿で到着し、翌日、武者修行のよそおいで

源之助がやってきた。

最後に今日、行商人姿の金次がようやく到着した。

百次郎は江戸から船で小名浜までゆき、そこから陸前浜街道を北上した。幕軍対奥州軍の戦線をたくみに脇道によけ、何度も両軍から誰何されながらかろうじて伊達領に潜入し、石巻へでて、そこから井内、鷲ノ巣をとおって日影村にいたった。もっともみじかい道程をとって、江戸から十一日間を要してきた。

日影村は石巻から二里ばかり北東の地で、かつては住民二十数戸の寒村だったが、天明の大飢饉で全員餓死していらい廃村になっていた。

ここは石投山と黒森山の西の麓に位置する。京が森山の南麓を迂回すれば、万石浦の沿岸をとおって女川へまわれる。

万石浦のすぐちかくに、慶長年間支倉常長がイスパニア、ローマをめざして船出した漁港月ノ浦がある。

百次郎とほかの四人は、何度も女川とのあいだをへだてる連峰を見あげた。標高はさほど高くはないが、峰は急峻である。三陸海岸特有の地殻運動によってできた山々であるから、海岸線と同様ごつごつとした鋸の歯のような山容を見せている。

一同は江戸をたつときから、この山越えを決意していたのである。

万石浦から女川にいたる唯一の道は伊達藩の警戒がきびしく、とても突破することは不可能である。山越えしか、方法はなかった。

女川港の警備は厳重をきわめているが、それはすべて湾から侵入してくる敵にたいするそなえである。

陸上の警戒は女川の秘密港に領民をちかづけぬ目的だけにある。背後から山をこえて外敵がやってくるとは、まったく予想していないのである。

長吉はかつて一度、この連峰を鹿を追って縦走したことがあるので、地形については知っていた。

「山越えはそう簡単ではありません。道なきところをのぼっていきます。きついところもあるでしょう。女川へおりるのはもっと大変です。急坂というよりも、断崖とこころえておいてください。源平合戦の鵯越えのようなものです」

長吉は一同に念をおした。

冬に入れば雪がつもるので、山越えはまず不可能だ。秋八月はその弊害がない。夏の暑さもないので、時候はまさに絶好である。

秋気が澄んで、山の姿が近々とせまっている。蕭颯たる雰囲気にみなはつつまれた。

作戦会議に入った。山越えさえできれば、女川港の爆破は可能であった。

長吉はかつて港の築構工事に人夫としてくわわっていたので、現地の様子や建物の配置、波止場の位置などについてくわしく知っている。

「わたしが女川をぬけだしたころは、警備もまだそれほどきびしくはありませんでした。ですから現在では多少様子がちがうかもしれませんが」

と前置きしてから、長吉は港の絵図面を紙にかいて一同に披露した。

四人はしばらくそれに見入って、作戦をこらした。

「襲撃は暁か、夕方がいい」

百次郎がいった。本来、奇襲は夜討ちがもっともよいとされるが、小人数で建物や港を破壊するのが目的となると、目が十分にきかなくては不利である。

破壊にもちいる火薬はわが国のものではあまりききめがない。長い鎖国によって、兵器の開発、発展がいちじるしくおくれたことは、このたび伊達がつかっているオロシア渡りの新式銃と火薬の威力が証明している。

一同はオロシアから輸入された火薬を貯蔵した火薬庫をやぶって、これをつかうことにきめていた。爆発の危険があるのと、火薬が湿気をきらうため、火薬庫はほかの倉庫からはなれた山際にもうけられている。

「では暁に」

長吉がいった。

「今日、日がおちるまでにのぼり、山頂で一夜をあかす。暁に一気に山をくだり、港をおそう。いうところの、朝駆けだ」

百次郎がいうと、一同はしっかりうなずいた。伝兵衛、源之助、金次の目にも闘志のかがやきがあった。

持ち場をきめた。長吉が案内にたち、火薬庫は伝兵衛がやぶる。

伝兵衛と百次郎、源之助の三人が火薬をはこびだし、波止場や倉庫、オロシア商館にしかけ、爆破させる。

長吉は彼らを警固しつつそれに参加し、金次は見張役をつとめる。

相手に感づかれたときは、長吉と百次郎が猟師筒と短筒で敵に応じ、伝兵衛と源之助とが爆破任務にしたがう。

金次は遊軍である。

「いくぞ！」

百次郎が号令した。

百次郎は修行僧の衣装をぬぎはらって、筒袖、軽衫、山笠、草鞋に変えていた。木樵か猟師といった姿だ。

まだ、秋の太陽はほとんど頭上にある。

一同は山中へふみこんでいった。

道はない。日影村から女川への山越えは誰もしないからである。

あるのは木樵や猟師がまれにとおる道なき道だ。そこを長吉が先頭にたってすすんでいった。

紅葉にはまだすこしはやい。松、杉、楢、欅、檜などが一面に群生している。下草もふかい。ときに蔦類が地を這っており、歯朶類も多い。

山越え用の斧や山刀をたずさえてのぼっていった。地面はかわいているので、すべりやすくはなかった。

「あわてることはないぞ。日のあるうちに、のぼりきればいい」

百次郎が注意をあたえたが、はやりたつこころをおさえきれぬためか、一同の足はついはやくなった。

長吉の足どりはさすがに軽い。まるで平地をいくようなものだ。方向にまよいがなく、自信にみちた足どりですすんでいった。

十一年間にわたる山の暮らしは無駄ではなかった。長吉の先導がなかったら、ほかの四人はこうもやすやすと山をのぼっていかれなかっただろう。

半刻（一時間）ばかりあるきつづけると、ようやく足のはこびがおそくなった。猟師道も木樵道もなくなったのだ。けもの道をさがしていくしかなかった。

五人は汗をかきはじめた。

途中に湧き水があった。喉をうるおし、しばしやすんで、またすすんだ。

七合目附近までいったとき、前方でがさがさっと音がした。

みなは立ちどまって、前方に注意をこらした。百次郎と源之助、長吉はとっさに短筒と猟師筒をかまえた。それぞれ危急にそなえて火縄に火を点じており、弾ごめもしてあった。

茶色いものが視界の隅をかすめた。

「牡鹿だ。見事なやつだ。あんなのにはここらでも滅多にお目にかかれない」

長吉はそういって口惜しそうに見逃がした。

そんな長吉に猟師の根性を垣間見た。

日がだいぶかたむいた。秋の日はつるべ落しという。山の中ではとくに日のくれるのがはやい。日が落ちると同時にあたりが暗くなる。

黒森山の山頂が見えてきた。むこうに、石投山の頂きも見える。

ふりかえると、仙北平野が足下はるかにひらけている。平野がまぶしいばかり日にかがやいて黄金色に見えるのは、秋の田がすっかり熟しているからだ。

西側に奥羽山脈の高い尾根が長々とつらなっている。奥州の屋根というにふさわしい。正面に見えるのが船形連峰である。

赤々と落暉がはじまったとき、一同はそろって尾根に立った。

かぎりなく眺望がひらけた。目の下に、蒼々と女川湾がひろがっている。湾はさらにはてしなく外海につづいている。

「ううむ！」

「あれか……」

「秘密港だ」

今や要塞に化したといわれる女川港を眼下に見おろした。断崖下にそれはある。まるで箱庭を見おろすようだ。

港の中央に波止場が見える。突堤がのびている。

「波止場ぞいにずらっと立ちならんでいるのが倉庫です。そのうしろがオロシア居留地になっており、その中心にオロシア商館があります。その反対側に伊達藩の役所や番所がおかれています。船手組の見張番所は湾の入口にあります」

長吉は指さして説明していった。

出発するときに彼がかいて見せた絵図面とほぼ一致する。

湾頭に遊弋する伊達水軍の船が黒く点々と見え、さらに周囲を圧するごとく、オロシアの軍船が巨大な威容を浮かべている。

女川港の守備が背後の山を天然の要害として、もっぱら海へむかって敵の侵入にそなえていることが一望のもとに了解される。

「まさに鵯越えだ」

源之助が下をながめて慨嘆するようにいった。真上からのぞむと、まるでえぐったように断崖が切りたっている。

「それほどじゃないところもあるんです。なるべく平坦な場所をえらんで降りていきます」

長吉がなぐさめるようにいって、はげました。

海が突然かげってきた。薄暮をとおりこして、急に濃い夕闇がおとずれた。

「夜をあかす場所を見つけておけ」

百次郎が命ずると、長吉と伝兵衛がさがしあるいた。

日がおちると、急速に山の空気が冷えこんできた。

やがて、長吉と伝兵衛が手ごろな場所を見つけてきた。山の岩屋で、五人は夜をすごした。

暁と同時に、一同は岩屋をでた。

昨夜の星月夜が徐々にうすらいでいった。東が海だから、明けてくるのがはやい。

水平線のかなたが白んでいる。さいわい霧がかかってなかった。

「わたしが降り口をさがし、先頭をいきます。みなは後につづいてください」

長吉はためらわずに急峻な崖をくだりはじめた。

伝兵衛もこれくらいの傾斜はものともしない。崖とはいっても、真っ直ぐに降りるのではなく、わりあいに勾配のなだらかな場所を斜めにつたいながら、下へ下へとおりていった。

下をのぞきこむと目がくらむので、足下だけを見て、長吉と伝兵衛にしたがってあとの三人はすすんだ。

見た目よりは危険ではなかった。木の枝や幹、蔓をたよりに、さらに岩や石の出っ張りを足場にし、すべるように降下していった。

真下の敵陣がしだいにはっきりと見えてきたが、慣れればしだいに恐怖心はなくなった。それでも五人がすすむとともに、小石や土が音をたてて落下していった。

瞬時のやすみもなく一同はくだっていった。なまじやすめば、足がすくむおそれがあった。息つくいとまもなく港をめざして降下していった。

港がぐんぐんちかづいた。下からもち上ってくる感じだ。

長吉と伝兵衛がほぼ同時に、下へ降りたった。

百次郎も源之助も小石や土を落下させながら、下に到着した。金次も無事だった。

時間は半刻ほどしかかからなかった。

ようやく払暁の時刻だから、港はまだねむっていた。しずまりかえっている。船手組の見張番所や、万石浦へつうじる道の番所も小人数の宿直はいるだろうが、大部分は宿舎で眠りをとっているころだ。

しかも宿直の注意はひとしく海へむかっている。

長吉は伝兵衛とともに音もなく火薬庫へはしった。火薬庫であることは、屋上に避雷のための鉄鎖がとりつけてあることでわかる。

百次郎と源之助も火薬庫へむかい、金次は見張りに立った。

伝兵衛は錠前に細工をほどこして扉をあけた。桁行三間、梁間五間の大きくて頑丈な蔵である。ここにオロシアから輸入した火薬が貯蔵されている。今度の戦にそなえて輸入した火薬が樽づめで大量に貯蔵されていた。

見張りの金次をのぞく四人の手にかつがれて、四斗詰めの火薬樽はぞくぞくと蔵の外にはこびだされた。

この樽には中の火薬をそこなわない用心に柿油が厚く塗りこめられている。

四人はその火薬樽をまず波止場へいくつもはこび、その基礎部分にしっかりとすえつけた。

さらに居留地のオロシア商館、幾棟もたちならんだ倉庫の一つ一つに火薬樽をすえつけていった。

それらの樽からは導火線を長くのばした。導火線はいわば火縄である。

四人の男たちはすこしの遅滞もなく、手順どおりに仕事をすすめていった。あまつさえ、火薬庫の中の火薬樽にまで導火線をひいた。

あとわずかで終了する段にまできたとき、金次の大声がひびいた。

「気づかれたっ、敵がくるぞう！」

その声で四人の手足がほとんど同時にとまった。

見ると、番所のほうから宿直とおぼしき番士たちが六、七人おっ取り刀でこちらにむかって駆けてくる。その中には火縄銃を手にした者もいる。

その者が威嚇と警報のために、一発、空へむかって撃ちはなった。

払暁のしじまをやぶって銃声がひびきわたった。

瞬間、百次郎は身が凍りつくようなおもいにおそわれた。

ほかの者たちもさすがに緊張しきって顔面蒼白となっている。動作も膠着した。

「むかえ撃ちますか」

そばにいる源之助がたずねた。

「やむをえない。あとすこしでおわるところだったが」

「もう余裕はありません」

そういったとき、もう一人の番士が火縄銃をはなった。

百次郎は火縄銃を持つ番士にむかって短筒をかまえた。

ねらいをつけるやいなや、引金をひいた。

銃声とともに、番士が前のめりにたおれた。そのとき、

「大変だっ！」

金次がさけんで宿舎のほうを指さした。

四人の視線がそちらへ吸い寄せられ、凝然とうごかなくなった。

「おおっ」

「うぬ！」

言葉にならぬ声を長吉と源之助がはなった。

百次郎も一瞬、肝をぬかれそうになった。なんと、一様に白い衣をまとった屈強な男たちが宿舎から、蜂の群が大きな巣から飛びたつようにいっせいにとびだしてこちらにむかって殺到してきたのである。数十人はゆうにいる。

「蔵王山伏っ」

「またしても、伊達山岳党！」

百次郎も源之助も驚嘆の声をあげた。彼らが今時こんなところで待ちかまえていようとは想像もできなかった。

蔵王山伏たちは幕軍とのあいだに有利な山岳戦をいどむべく、国境の戦陣へむかっているはずであった。ところが、そのうちから数十人をのこし、女川の守備にあてていたのだ。

敵方も用意周到な作戦をこらしていた。いかに伊達陣営が女川に重点をおいていたかがわかる。

山伏たちは手に手に得意の手弓をかまえている。彼らの発する怒号がひびいてきた。
「導火線に火をつけよ！」
百次郎は瞬時に覚悟をきめ、命令をくだした。
伝兵衛がはしった。源之助も駆けた。長吉も疾走した。
三人はそれぞれ導火線に火を点じた。
各所の導火線が白煙をたてて燃えだした。
伝兵衛と源之助、長吉がまたはしった。背をまるめるようにして港の内を疾走した。
百次郎は三人のうごきをしっかりと目の中でたしかめつつ、短筒を撃ちはなった。
先頭をくる山伏がたおれた。
長吉もただちに一人撃ちたおした。
が、一人二人をたおしても大勢はすこしもかわりない。蔵王山伏たちは殺到してきた。
（生きてはかえれぬ！）
百次郎はそう覚悟した。もう逃げ道はない。九死に一生の可能性もなかった。
その瞬間、轟音が波止場のほうで炸裂した。山が噴火してくずれ落ちていくようなすさまじい光景がおこった。
轟音はつづけざまに鳴りひびいた。
火薬樽がつぎつぎに爆発した。巨大な火柱と噴煙がいくつもたちのぼり、わずか数瞬のうちに波止場が破壊された。その猛烈な爆風で一町ばかりはなれている百次郎らも大きな衝撃をうけ、

足もとがぐらっと揺らぎたおれそうになった。百次郎らは地に伏して、ようやくこらえた。
石や土砂、木端などが雨のようにふりそそいだ。
べつの方角でまた大音響がおこった。居留地のオロシア商館がこの瞬間に爆破されて、粉みじんに吹っ飛んだ。
轟音が轟音をよんでつづけざまに鳴りわたった。
とてもこの世のものとはおもわれぬ光景が展開した。幾棟も立ちならんだ倉庫が大音響のたびに爆破され、噴煙とともに炎上していった。
火山が爆発するようなすさまじさだ。大地が大地震のように揺れうごき、砂煙が高々と舞いあがった。噴煙は竜巻のように空をおおい、灼熱の烈風が何度となくおそってきた。
轟音はとめどなくおこった。もう何をいっても言葉はつたわらなかった。熱湯をあびたように、全身があつくなった。
大音響と爆発の中で、何人も、十何人もの山伏たちが吹きとばされていくのが見えた。山伏ばかりでなく、それは地上のほとんどあらゆるものを破壊し、粉みじんに吹きとばすすさまじさを見せた。
もう伝兵衛、源之助、長吉の姿も金次の姿もわからなくなった。
さらに今までの爆発の何十倍もの大きさの大爆発がおこった。閃光が何度もきらめき、突風がまきおこり、巨大な火柱が地上から雲間をつらぬいて天へむかって立った。
樹木も根こそぎもっていかれた。人間の首や手足がばらばらととんできた。土砂が雪崩のよう

に音をたてて押し寄せてきた。上空は噴煙でまったくとざされた。火薬庫が何十もの火薬樽とともに一時に大爆発したのである。

まさにこの世の地獄が現出した。自分たちがひきおこしたことながら、百次郎はこの世の終焉がきたとおもった。この瞬間、海がうねり、咆哮し、湾内の水が一時にひき、はるか沖合に大波が立ちさわいだ。百次郎は聴覚をうしない、視覚もうしない、ほぼ同時に意識をもうばわれた。皮膚は焼け、全身が木炭のようになっていった。

それは神仏の人間世界への怒りのようにみえた。女川港のすべてはこの爆破によって、なにもかも吹きとばされた。敵も味方もなかった。形あるものはすべて破壊され、生きているものはことごとく死んでいった。山さえもくずれ、川は涸れた。

女川の壊滅によって、状況が一変した。

オロシアと伊達藩の貿易は現実に中断のやむなきにいたり、六藩連合も瓦解にみちびかれた。幕府と六藩とのあいだで、伊達斉村の蟄居謹慎、片倉小十郎の切腹を条件に、あとはお咎めなしの和解が成立した。それは寛政六年八月のことだった。

だが、切腹した小十郎の遺骸は幕府の検使がくるまえに、伊達藩の手によって焼かれた。そのため、遺骸は偽ものだという噂がたった。本物の小十郎は六藩連合の連判状を手にして、新庄津太夫とともに捲土重来を期してオロシアへわたった、といいつたえられた。このいいつたえは末長く幕末まで伊達藩につたわった。

（完）

解説

石井冨士弥

たとえば、われわれの日常で、ごく、ふつうのニュースとして報道されているできごと——なにを例にひいてもいいが、仮りにイベントとして、とにかく華やか、かつ、賑やかで景気のよいものほどよい。……アイドルスターの結婚なぞでも、いいだろう。

これで、テレビ、芸能誌などが、飛び切り大一番のビッグ・ニュースとして騒ぎたて、茶の間の一言居士や投書マニアに、得たり！　という顰蹙の材料を提供したとしても、ここまでは、その時点での、単なる芸能トピックスにすぎない。——で、さらに、そこに、当日の騒ぎを象徴するものとして、新郎新婦を見ようとしたファンの一人が、昇っていた塀から落ちて〔人死〕まで出た、と報道されたとしても、まァ、殺伐な現代では、当然そんなこともあろうかと、一般的納得のままうけ入れられてしまおう。

——ところが、この男ないし女の被害者の身もとを手繰っていったら、こういう浮いた芸能関係とはまるで無縁な政府筋の機密員だったりしたらどうであろう。ここから、一見、単なるアイドルスターの結婚騒ぎの背景から、思いもかけぬスケール大きな〔国際〕的〔大陰謀〕なぞが、突如あぶり出されてきた——という視点を、小説のうえに引き出してみせることになると、これ

は、手っとり早くいえば、推理物（ミステリー）のパターンであり、現代冒険小説へスタートするプロトタイプとなる。

数ある文庫本の中から本書を選択なさった読者なら、おそらく〔時代小説〕がお好きな方にちがいないが——とすると、こちらのジャンルで、そういう傾向のものといえば、時代〔伝奇〕小説だ。

つまり、過去のできごとである〔歴史〕の中でも、よく知られた表通りの通説のなかに、仮想される可能性ギリギリの〔もうひとつの歴史〕をフィクションで割り込ませ、築きあげてみせるという——いわば、そういうことがあってもふしぎではないと、読者に納得させてしまう〔仕掛け〕で成立したロマンの世界だ。

これは、その舞台が壮大なほど、ナルホド甲斐もあろうというものである。現在、意図してこの方向へ、過激に意欲的に挑戦し、つぎつぎに成果（オオモノ）度を上げている一番手の実力派のひとりが、本書の南原幹雄だ。

＊

——で、その奇想天外ぶりを、まず、ご承知いただくため、いきなり、本書『北の黙示録』に用意されたズバ抜けたメイン・アイデアの〔仕掛け〕を取り出して、この作家の華麗な特徴をご紹介しよう。

今様のグルメ志向ではないが、小説作品にも、いわゆる喰べごろならぬ〔読みごろ〕があるようだ。本編は昭和58年4月から翌年6月まで「小説現代」に好評連載され、完結後直ちにハードカバーで上木（じょうぼく）されたが、偶然だが、現在のほうが一層読者を興趣ふかくなじませる状況になったようである。つまり、昭和62年11月現在でいえば、本年はＮＨＫ大河ドラマが伊達政宗公の大奮闘で久方ぶりに活気づいているからである。

——この天下制覇の夢を徳川政権のために絶たれ、心ならずも大名として臣従した奥州の独眼竜が、極秘の宿願を抱いたまま寛永13年に没してから百五十余年後、泰平の政治も露国使節の来航でようやく慌だしくなった寛政4年（一七九二）、時を合わせるように死せる梟雄の野望が勃然と甦え り、江戸幕府を震撼させるカウントがはじまった……というのが本編の中心プロットだ。こうなると、読者は、〔実録〕の武将物語をテレビで愉しみ、徳川幕政への野心を屈伏したままで終った彼の遺志については、虚構（フィクション）部分で、百五十余年後に実現してみせた本編で眺めることになるわけだ。

まさか、これだけの時間的距離をおいた時代に、政宗の企みが、仮りに——ひそかにでもあったとして、外国船騒ぎに結びつけて、むっくり息をふき返し、またまた天下を聳動（しょうどう）させるというようなアイデアは、ふつうなら思い及ばざるところだが、それを、南原幹雄は、ひょいと立体的に組み上げてみせるのである。本編執筆の時期は、むろん伊達ブームの三年前だが、タイミングとしては、絶好の〔読みごろ〕というべきであろう。

さて、では、そのメイン・アイデアを、クルクル展開させる〔仕掛け〕だが——これがこの作家の異能を証明するように、目の醒めるような〔歴史〕のひだを探り出して意表を衝く。まず、表通り（おもてどお）の〔史〕実で、本編に扱われる寛政4年から6年までの主なできごとといえば、たいがい

の年表では、

寛政4年＝（4月）林子平『海国兵談』の絶版を命ぜられ処罰（8月）ロシア使節ラクスマン根室に来航、通商を求む（11月）朝廷典仁親王尊号宣下の議幕府の反対により停止。海辺警備を松平定信に管掌させる／寛政5年＝（3月）沿岸諸藩に厳重警備を命ず（6月）ラスクマン松前着（7月）松平定信老中を辞す。塙保己一、和学講談所設定／寛政6年＝（1月）江戸大火。

――ぐらいで、五年前の天明7年（一七八七）には海の向うのアメリカに合衆国憲法が制定されるというような世界的蠢動期の時代にふさわしく、〔鎖国〕日本にも、いろいろ海の外からの危機感が兆していたことだけは読みとれよう。

この中に、〔寛永十四、十五年の島原の乱における天草征討の軍令いらい百五十余年ぶり〕と、作者自らいうような、泰平の江戸幕政下ニッポンを真っ二つにする大戦争が〔実現〕する〔裏面史〕をハメ込もうというのである。

＊

この〔仕掛け〕を、どんな大手品で成り立たせるかというと、この作家は、いとも簡単な伝奇小説の原型様式のひとつ〔密書獲り〕に還元して、そこから発想する。

その密書はといえば――徳川政権事実上の出発を決定した大阪夏の陣の年の元和元年（一六一五）、ひそかに徳川家に反撃を企てていた伊達政宗は、南部利直・津軽信枚・最上義俊・上杉景勝・佐竹義宣という周辺雄藩と六ヵ国同盟を結んだ〔神文誓詞〕を取りかわしていたという設定で、これが中心的メイン種だ。この根拠となるのは、慶長18年（一六一三）の例の支倉常長の欧州派遣で、特にローマ法王庁には〔奥州王〕と自らを売り込み、海外貿易実現の野望が伏在していたといわれる政宗の遠因を持ち出したところに説得力がある。これに泰平の政治もそろそろ海外船の来航が多くなり、特に北海にロシア使節が通商を求めて現われた史実の時期に結びつければ、遠い過去に埋められた筈の藩祖伝来の遠大な野望実現の好機として、ふたたび乾坤一擲の大勝負に賭ける気ぐみにもなろうというわけだ。

――とある一日。この眠れる〔危険文書〕を携えた男……例の政宗の母方出羽57万石の最上義光九代目の血筋、いまは2千石の無役の捨扶持を貰っているだけの左近義季が、宿老寒河江兵部を訪れたところから、この番外徳川史は幕開きと相成る。（この昔日の威光をまったく失ない、ただ由緒と格式だけで生きているかつての驍将最上義光の末裔を引っ張り出したところにも、歴史好きの読者なら、さもありなんと納得させられるみごとな設定だ）彼はお家再興の宿願を、〔神文〕を手中にして高く売りつけようというもくろみを隠し持つという、ストーリー展開上の重要な味つけの引き出し部分を与えられ、押さえの役回りを担当する。これで一方のお膳立てはそろった。

さて――これに対抗する幕府方に、どんな奇手を据えるか、だ。

＊

ここにも、文壇デビュー初期に早くも旧来の日本製時代物の型を破り、海外冒険物の傑作『ジャッカルの日』（'70＝F・フォーサイス）に比肩する興趣を提供して嘱目された『暗殺者の神

話』（昭51）の作者らしいが――奥州六藩同盟の野望と四つに組む〔受け〕の立場の幕府側には、〔中町奉行〕を掘り起こしたことである。

通常の時代考証では、甚だしいのは触れられもしないか、またはあっさりと参考程度に列記されるかする程度で、ふつう北と南だけしか一般化していない江戸町奉行所を、元禄15年から享保4年までの17年間、常盤橋御門内にあったというこの〔中町奉行〕に着目し――じつは廃止以後、秘密機関となって存在し、俄然、この大陰謀粉砕に立ち上るという絶妙のコントラストに据えてみせたことだ。しかも、本編スタートの翌年隠退した史的事実も、奥州と関東とを押さえる鎮台となる覚悟からのものであったという設定で裏づけられる白河藩主、時の老中楽翁松平定信をこの秘密機関の陰の黒幕にもってきたことも、話の大がかりさをさらに引き立てるにふさわしい対極的配慮で、どっしり重みが加わった。ここから、表向き天地一心流道場主実ハ……というヒーロー赤石百次郎を中心に、同家住込み弟子遠藤源之助、船頭さみだれ伝兵衛、中村座表方鎌鼬の金次、のちには猟師長吉も加わったプロフェッショナルが〔天下の一大事〕突破作戦にチャレンジすることになる。（この辺り、密命を伝える与力なぞに、かの007ジェームズ・ボンド君のシリーズでおなじみの秘密機関の上司〔M〕氏が、ほほ笑ましくも連想させられるではないか）――一方、この面々を迎え撃つ、作品構成上では一応の〔悪玉〕もまた、凝ったもっともらしい工夫がある。政宗の庶子方之助宗秋が蔵王山麓で、伊達家の繁栄と奥州鎮護を祈願して蔵王山伏の開祖となったというところから、作者に本編へ呼び込まれた。手弓を使う山中を自由自在に跳梁する〔伊達山岳党〕とくれば、いかにも強敵らしく見えようというものだ。

かくて、まさにヤマ場ヤマ場の幾重畳の連続で、虚々実々の裏面闘争がつづく。――史実ギリギリといったが、この作家の特色は、現在のテレビ時代劇のように、ほとんど現代化したような無茶な考証無視や、荒唐無稽な武器の設定を避け、ここまではゆるされるという範囲まで史料を利用するところにある。あくまでも、基本的には正攻法時代作家としての良心と真骨頂の姿勢がこの辺りにうかがえよう。――こうして、寛政の大火は、伊達家が、盟国佐竹藩の奥方帰国のためにうった江戸騒乱策であったと跡づけられたり、エカテリーナ女帝に謁した大黒屋幸太夫の例にならって通商の途をつけようと新庄津太夫が密航するなど等、準備万端相整ったところで、いよいよ最大のヤマ場。作者の抱いたこのプロットは、もはや抜きも差しもならず、とうとう〔史〕外の伊達・徳川の〔大戦争〕を実現させてしまうよりほかなくなる――ところまでくれば、読者も、もう、虚か実かなぞ疑うようなヤボな詮索はやめたくもなろうから、本編作中に限り許容して、闘わせてみたくもなる。

クライマックスは、牡鹿半島のつけ根、三方山で囲まれた陸の孤島という〔女川〕が伊達側の大要塞で、これの大爆破という最大のお愉しみとなる。あるいはアリステア・マクリーンの傑作で映画にもなった『ナヴァロンの要塞』（'57）の痛快さを想い出される読者もおありだろう。――一人の英雄の一生に20数巻の大河作品を重ねる作風もある一方、本編のように、一つ一つの史的データを利用すれば、どれも独立した一巻物となり、総計厖大な大伝奇小説にもなりうる話を、南原幹雄は気前よく鉄砲玉のように息つく暇なく畳みかけたエピソードでうちまくる。

これが、つまり、新しい現代のテンポに、もっとも適合した時代小説（アクモノ）の甦りなのだ。

ふた昔前までは、外国ムードの濃いものは、まだ〔バタ臭い〕といった。でも——第二次大戦後42年、いまではもう、単なる書店の一隅にひっそりおさまるジャンルとしか認知されなくなってしまった、かつて大衆文学の王座に君臨した〔時代小説〕の分野のひとつ、〔伝奇〕小説は——こういう海外翻訳ベストセラーのもつメカニカルな構成ともいうべき小説作法のおもしろさを、ごく自然に呼吸する作家の登場によって、ふたたび活性化が与えられたともいうべきであろうか。

*

南原幹雄は、昭和48年小説現代新人賞（『女犯地獄』）受賞以後、先にあげた『暗殺者……』で頭角を現わし、ついで〔大型時代経済伝奇〕作家の力量をはっきり示した『鴻池一族の野望』（昭52）につづき、『闇と影の百年戦争』（昭和56年度第二回吉川英治文学新人賞受賞）以来、本書の傾向に属する異色時代伝奇大作長編を続々と発表、つど時代ファンを悦ばせている現在では貴重になった時代物の第一線作家だ。——このほか、〔江戸時代経済企業〕小説の系統（本編にも、その名が登場する伊達家の蔵元升屋平右衛門の番頭で〔山片蟠桃〕名義の著書もある町人学者升屋小右衛門を主人公とした『商道の覇者』＝同51＝その他）や、江戸市井の武士・町人の男女の業を類作のように情緒的に描かないところに独自の巧みをもつ——私見でひそかに名づけた〔江戸市井非情〕物の長・中・短編と、扱う世界はひろい。が、なんといっても、時代物ひと筋のこの作家の独創性が発揮されるのは、本編のような構想雄大な伝奇作品に本領があるようだ。

——わが国のこの伝奇小説の系譜は、大正期にはじまり、第二次大戦後昭和30年代の柴田錬三郎・五味康祐・山田風太郎という鬼才によって〔日本的〕な面は開花し尽くした。つまり、明治・大正・昭和初期から終戦までの変転はありながら、どこか人生への向日性濃いモラル観を基底にしないでは成立しなかったエンターテインメントの世界は、ここまでひと区切りとなり、以後つぎの原子戦争の危機が日常化した世代へバトンタッチされることになったからである。

敗戦による良き時代のモラルへの虚無的な反抗から一時代をつくりあげた柴田・五味・山田を代表とする各作家にしても、自身、まだどこかに破壊すべき旧時代の残滓を内蔵していたが、以後の〔現代の〕時代作家は、そういう旧型モラルなど、きれいさっぱり無縁でいてよくなったのである。つまり、特に対抗すべき〔正統〕なモラルもなければ、遠大な〔夢〕もまた、なくなったのだ。——ここから、そもそもは本質的には保守的といえる時代小説読者にも、新しいカンフルを注入した世界へ導入する必要が生じたといえよう。さらに敷衍すれば、しばしば、本来〔愉し〕かるべき現代の一般読物全体でさえ、空漠とした後味のままで終るのも、その傾向の表われと指摘してもいい。

南原幹雄は、その意味でも、望まれるべき今日性を、充分身につけて、このジャンルに登場した作家だといえる。

だから、この雄渾万丈なロマンである本編の結びさえ——この終熄した良き黄金期の〔次代〕を継承した世代の作家である南原幹雄は、

それは、神仏の人間世界への怒りのようにみえた。（略）敵も味方もなかった。形あるものはすべて破壊され、生きているものはことごとく死んでいった。山さえもくずれ、海は涸れた。

と、荘重な〔北の〕神の〔黙示録〕のまましめくくるのだ。主人公自体さえ〔この世の終焉がきたとおも〕い〔聴覚もうしな〕って〔意識も目もうばわれた。皮膚は焼け、全身が木炭のようになっていった〕と、生死のほども読者に解明せず、エンドとなる。

——そういえば、この作家は、初期の『いろの罠』（昭51）から『神々の賭け』（同61）の長編群から最近作『首獲り』に至るまで、結びは主人公の生死を読者の判断にまかせたまま、進行形でぷっつりきる例が多い。

所詮、現代には、さかしらぶって小説作家が、明瞭に完結してみせるべきほどのものは、もう、どこにもない——という、今を生きるクールな世代の作者の、むしろ謙虚な姿勢からくるものかもしれない。

ともあれ、そういう現代のクラさの中に、次々と壮大な夢を仕掛けて、読者とともに愉しもうというのが、南原幹雄の作家的出発からの宿願のようだ。ぼくは、作者には企図外のことであろうが、ひそかに『タイタニックを引き揚げろ』（'76＝クライブ・カッスラー）と共通した後味を〔時代小説〕の中で連想させてくれる本編『北の黙示録』を、数あるこの作家の秀作長編の中でも、その意味の硬質な〔仕掛け（メカニズム）〕の特色がもっとも発揮された代表作の一つと呼ぶことに躊躇しない。

——これは、わりあい、思うように書けたとおもっています。

と、自作にシャイな作者自らいうとおり、これだけふんだんに惜し気もなく奇手をつめこんだ本編……さァ、あとは、充分、読者に堪能していただくだけ——。

（文芸評論家）

北の黙示録(下)
南原幹雄
© Mikio Nanbara 1987

講談社文庫
定価400円

昭和62年11月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——有限会社中澤製本所

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫第一出版部宛にお願いいたします。 (庫一)

ISBN4-06-184104-1 (O)

この作品は、昭和59年8月本社より刊行されたものです。

講談社文庫刊行の辞

二十一世紀の到来を目睫に望みながら、われわれはいま、人類史上かつて例を見ない巨大な転換期をむかえようとしている。

世界も、日本も、激動の予兆に対する期待とおののきを内に蔵して、未知の時代に歩み入ろうとしている。このときにあたり、創業の人野間清治の「ナショナル・エデュケイター」への志を現代に甦らせようと意図して、われわれはここに古今の文芸作品はいうまでもなく、ひろく人文・社会・自然の諸科学から東西の名著を網羅する、新しい綜合文庫の発刊を決意した。

激動の転換期はまた断絶の時代である。われわれは戦後二十五年間の出版文化のありかたへの深い反省をこめて、この断絶の時代にあえて人間的な持続を求めようとする。いたずらに浮薄な商業主義のあだ花を追い求めることなく、長期にわたって良書に生命をあたえようとつとめるところにしか、今後の出版文化の真の繁栄はあり得ないと信じるからである。

同時にわれわれはこの綜合文庫の刊行を通じて、人文・社会・自然の諸科学が、結局人間の学にほかならないことを立証しようと願っている。かつて知識とは、「汝自身を知る」ことにつきていた。現代社会の瑣末な情報の氾濫のなかから、力強い知識の源泉を掘り起し、技術文明のただなかに、生きた人間の姿を復活させること。それこそわれわれの切なる希求である。

われわれは権威に盲従せず、俗流に媚びることなく、渾然一体となって日本の「草の根」をかたちづくる若く新しい世代の人々に、心をこめてこの新しい綜合文庫をおくり届けたい。それは知識の泉であるとともに感受性のふるさとであり、もっとも有機的に組織され、社会に開かれた万人のための大学をめざしている。大方の支援と協力を衷心より切望してやまない。

一九七一年七月

野間省一